

アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アル=ビールーニー著
『占星術教程の書』(3)

山本 啓二*・矢野 道雄** 訳

第5部 占星術

第1章 宮

349 (347). 宮の性質とはどのようなものか

ある宮をある行に書き、それに続く宮をその下の行に書くと、上の行に来るものが熱の (hārr) 宮となり、下の行が冷の (bārid) 宮となる。次に、それぞれの宮はその下のものとともに乾 (yābis)、その次はともに湿 (raṭb)、またその次はともに乾となり、このように最後まで続く。宮の持つ能動的力と受動的力が知られると、宮はその両方に応じて、宮<の性質>に似た世界の構成要素 ('anāsir) と身体の体液 (aḥlāt) とに関係づけられる。すなわち、熱と乾の宮は世界の火と身体の黄胆汁に、冷と乾の宮は土と黒胆汁に、熱と湿の宮は空気と血液に、そして冷と湿の宮は水と粘液に結びつけられる。これは次の図のとおりである。

熱の宮	おひつじ宮	ふたご宮	しし宮	てんびん宮	いて宮	みずがめ宮
乾と湿	乾	湿	乾	湿	乾	湿
冷の宮	おうし宮	かに宮	おとめ宮	さそり宮	やぎ宮	うお宮

インド人は水の宮については、うお宮、やぎ宮の後半、そしてみずがめ宮の後半¹⁾を考えている。これは、すでに述べたそれらの図像によっている²⁾。すなわち、やぎ宮の後半は魚のようであり、みずがめ宮の後半³⁾には注がれる水がある。さそり宮については、彼らはそれを水の性質とは考えずに、空気の性質だと考えている。またかに宮は共通な性質で、ある状態では水の性質、またある状態では空気の性質とみなしている⁴⁾。

350 (348). 男性宮と女性宮とは何か

すべての熱の宮は男性であり、すべての冷の宮は女性である。惑星は性質や男女という点で似ているもの(宮)にある時、その力が強くなる。だから、惑星の性質はそれ(宮の性質)へと移行し、その結果、男性の惑星が女性宮にあるために女性の性質を示すようになる。またインド人は、男性宮を凶星に、また女性宮を吉星に結びつけている⁵⁾。

* 京都産業大学文化学部教授

** 京都産業大学文化学部教授

1) すべての写本とペルシア語版は誤って「前半」としている。

2) 159節で黄道12星座の図像が説明されている。星座と宮の図像は同じものである。

3) ここではG以外の写本とペルシア語版が誤って「前半」としている。

4) さそり宮とかに宮に関する典拠は不明。

5) インド人の見解に関する典拠は不明。

351 (349). 昼の宮と夜の宮とは何か

これについては、男性宮すべてが昼<の宮>であり、女性宮すべてが夜<の宮>であるという点で一致している。昼の惑星は昼の宮において力が強くなり、夜の惑星は夜の宮において力が強くなる。この点について人々は、ルーム人の『選集』(al-Bizīdağ)⁶⁾で述べられていることに矛盾している。彼らは、おひつじ宮、かに宮、しし宮、いて宮が昼で、それらの反対側にあるてんびん宮、やぎ宮、みずがめ宮、ふたご宮が夜であり、残りが昼と夜に共通だと言うのである⁷⁾。さらに、これに関するインド人の見解は、おひつじ宮、おうし宮、ふたご宮、かに宮、いて宮、やぎ宮が夜に強くなり、残りの6つが昼に強くなるというものである⁸⁾。

352 (350). 手足が切り取られた宮とは何か

これは、おひつじ宮、おうし宮、しし宮、うお宮である。すなわち、おひつじ宮としし宮は分かれた蹄や爪を持つ足が切り離されていること、おうし宮も同様に雄牛の<下>半身が臍から切り取られていること、そしてうお宮は四肢がないことから、そのように言われる。

353 (351). 直立宮 (muntāṣiba) と非直立宮 (ḡayr muntāṣiba) とは何か

直立宮とはおひつじ宮、てんびん宮、いて宮である。書物にはこのように書かれているが、その他の宮については何も書かれていない。インド人は、おひつじ宮、おうし宮、かに宮、いて宮、やぎ宮が背を上直立して昇り、しし宮、おとめ宮、てんびん宮、さそり宮、みずがめ宮が頭を上直立して昇り、さらにふたご宮とうお宮が側面を上傾いて昇る、と考えている⁹⁾。しかし私はこのように2つに分ける意図については自信がない。またほとんどの星座の構図もこれとは一致しないし、そのことを証明してはいない。

354 (352). 人間宮 (insīya) と非人間宮とは何か

人間宮とは、ふたご宮、おとめ宮、てんびん宮、みずがめ宮、そしていて宮の前半分であり、このことはすでに述べた宮の図に見られる人の図像からわかる。ただし、てんびん宮はそうではない。たいていの場合、そこには、完全な人間の姿か人の片手、あるいは紐をつかむ鳥¹⁰⁾が描かれている。

四足を持つ宮は、おひつじ宮、おうし宮、しし宮、そしていて宮の後半分である。また時には、おうし宮との類推から、やぎ宮の前半分も含まれる。これらのうち、おひつじ宮とおうし宮は分かれた蹄、しし宮は爪、そしていて宮は蹄を持っている。宮のうち、しし宮、さそり宮、いて宮、うお宮のような動物の種類を示すものはすべて、獣を指示内容に含んでいる。また、ふたご宮、おとめ宮、うお宮、やぎ宮の後ろ2/3は鳥を、かに宮、さそり宮、いて宮、やぎ宮は爬虫類や昆虫を、そしてかに宮、さそり宮、うお宮は水棲動物を指示内容に含んでいる。このことはこれから表の形

6) この著作はウェッティオス・ワレンス (2世紀) の『アントロギアイ』(Anθολογίαι) のことであり、そのアラビア語名はバフラヴィー語の vizīdak (選集) に由来する。この書はギリシア語からバフラヴィー語に、さらにそれからアラビア語に翻訳されたと考えられるが、どちらの翻訳も残っていない。

7) これについての記述は、実際には『アントロギアイ』には見られないが、テーベのヘファイスティオン (4世紀) の Apotelesmatica, 第3巻, 第1章, 2には見られる。

8) 2世紀の『ヤヴァナジャータカ』(Yavanajātaka), 1.81 参照。

9) ヴァラーハミヒラ (6世紀) の『ブリハッ・ジャータカ』(Bṛhajātaka) 1.10 では、ふたご宮は頭を上昇る宮とされている。

10) ビールーニーによるてんびん宮のイメージが何に由来するのかわからない。

で十分詳しく示されるだろう。表は語ることもより雄弁だからである。

インド人について言えば、彼らは区分を増やし、人間宮がふたご宮、おとめ宮、てんびん宮、いて宮の前半分、そしてみずがめ宮の後半分であり、四足を持つ宮がおひつじ宮、しし宮、いて宮の後半分、そしてやぎ宮の前半分であると言っている。彼らによる水と空気の宮については、すでに述べた(349節)。

355 (353). 声を持つ宮 (muṣawwita) と持たない宮 (ġayr muṣawwita) とは何か

ふたご宮、おとめ宮、てんびん宮は声が大きく、中でもふたご宮は舌先が滑らか (mantīqī) である。おひつじ宮、おうし宮、しし宮¹¹⁾ は半分の声を持ち、やぎ宮とみずがめ宮は声が弱い。またかに宮、さそり宮、うお宮には声がない。このことは、これらの宮における、声や話し方に関する指示のよしあしを知るために必要なことである。

356 (354). 多産宮 (walūd)、不妊宮 (‘aqīm)、その他の宮とは何か

水の宮、すなわちかに宮、さそり宮、うお宮、そしてやぎ宮の後半分は多産であり、おひつじ宮、おうし宮<の後半分>、てんびん宮、いて宮、みずがめ宮は子供が少なく、またおうし宮の前半分、しし宮、おとめ宮、やぎ宮の前半分は不妊である。双子を産む宮 (al-muti‘ma) について言えば、それはふたご宮、おとめ宮、いて宮、うお宮であり、時にはおひつじ宮、てんびん宮、やぎ宮の後半分も双子の出産 (al-it‘ām)¹²⁾ を示す。またやぎ宮の前半分とさそり宮の前半分は、両性具有者を示す。しかし一方で、おひつじ宮とてんびん宮のそれぞれは2つの色と性質を持つと言われる、おとめ宮が3つの姿を持つと言われるように、やぎ宮といて宮もそのように言われる。

ふたご宮は多くの姿と顔を持つ。なぜなら、双子の出産(多胎分娩)は、時には2人を越えて、3人あるいはそれ以上になるからである。

357 (355). 性行為に関する宮の状態とは何か

おひつじ宮、おうし宮、しし宮、やぎ宮、うお宮は好色であり、性行為に対して貪欲である。てんびん宮といて宮にはややその気がある。女性について言えば、おうし宮、しし宮、さそり宮、みずがめ宮は、女性の美德と貞節を示す。おひつじ宮、かに宮、てんびん宮¹³⁾ は女性の不貞を、またふたご宮、おとめ宮、いて宮、うお宮は中庸を示す。<その中でも>おとめ宮は最も貞淑である。

358 (356). 陰鬱で心配性の宮とは何か

それは、しし宮、さそり宮、やぎ宮であり、てんびん宮とおとめ宮のそれぞれにはやや陰鬱さがある¹⁴⁾。

359 (357). 宮が示す世界の方角とは何か

おひつじ宮は東の中央、しし宮はその左の北寄り、いて宮はその右の南寄り、おうし宮(やぎ

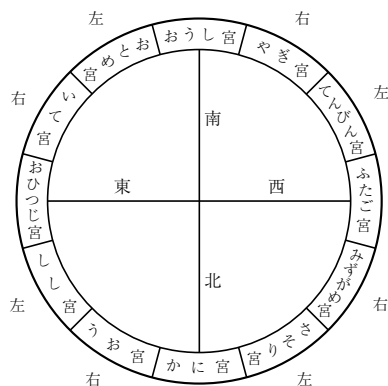
11) アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.18によれば、いて宮もここに属する。

12) ここで it‘ām を「双子の出産」と訳したのは、その語根が「双子として生まれる」という意味を持つからであるが、実際には「多胎分娩」を意味している。

13) アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.15によれば、やぎ宮もここに属する。

14) アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.21 [3]。

宮)¹⁵⁾は南の中央、おとめ宮(おうし宮)はその左の東寄り、そしてやぎ宮(おとめ宮)はその右の西寄りを示す。またふたご宮(てんびん宮)は西の中央、てんびん宮(みずがめ宮)はその左の南寄り、みずがめ宮(ふたご宮)はその右の北寄り、かに宮は北の中央、さそり宮はその左の西寄り、そしてうお宮はその右の東寄りを示す。この図のとおりである。



360 (358). 宮が示す風とは何か

すべての風はある宮の方角から吹く。なぜなら、風は宮と関係があるからである。東風 (aṣ-ṣabā) はおひつじ宮に、西風 (ad-dabūr) はふたご宮に、南風 (al-ḡanūb) はおうし宮に、そして北風 (aš-šamāl) はかに宮に属する。これと同じように、すべての横風 (nakkāʾ) は、その風向きに近い宮と関係がある。例えば、風が東と南の間で吹く時、風が東寄りであれば、それはいて宮と関係があり、また南寄りであれば、それはおとめ宮(おうし宮)と関係がある。

361 (359). 宮が示す身体部位とは何か

頭と顔はおひつじ宮に、首と喉ぼとけ (ḥarazat al-ḥulqūm) はおうし宮に、両肩と両手はふたご宮に、胸、両脇、両乳、肺、胃はかに宮に、心臓はしし宮に、腹、内臓はおとめ宮に、腰、尻はてんびん宮に、男性器と女性器はさそり宮に、両太腿はいて宮に、両膝はやぎ宮に、両脛はみずがめ宮に、そして両足はうお宮に属している。

また時として書物によってはこのことについて混乱があり、おひつじ宮に頭、顔、内臓があるなどとされている。ヴァラーハミヒラ (Barāhamihir, Varāhamihira) が述べたように、天球が人体で、人の頭がおひつじ宮だと考える類推が一般的である。かつて人の両足がおひつじ宮に結びつけられていたが、インド人は、頭がおひつじ宮に、そして顔がおうし宮に属すると考えるようになった¹⁶⁾。

また宮には、人体の病気、色・宝石・姿、居場所・国、動物の種類・水・火に関する指示がある。われわれがそれらを表にしたのは、その方が見つけやすいからである。それは神が望まれたこと。

15) () 内は、アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.25に見られる正しい記述。黄道上で180度反対側にある宮が、方角でも反対側になる。

16) ヴァラーハミヒラの『プリハッ・ジャータカ』第1章には、人体と宮の関係が述べられている。それによれば、おひつじ宮が頭、おうし宮が顔、ふたご宮が胸、かに宮が心臓、しし宮が腹、おとめ宮が腰、てんびん宮が下腹、さそり宮が生殖器、いて宮が太腿、やぎ宮が膝、みずがめ宮が臀部、そしてうお宮が足にそれぞれ対応している。

362 (360). 宮が示す性格 (al-aḥlāq) と行動 (as-siyar)¹⁷⁾

宮名	性格と行動
おひつじ宮	よく笑う、おしゃべり、威厳がある、高慢、旅好き、怒りっぽい、好色、勇敢
おうし宮	深遠、愚鈍、嘘つき、狡猾、好色、無知
ふたご宮	高貴、清潔、人を楽しませる、英知と天に関する諸学を愛する、寛大、勇気がある、クルアーンを暗唱する
かに宮	愚鈍、無口、移り気
しし宮	威厳がある、臆病、怒りっぽい、厳しい、頑固、粗野、狡猾、心配症、よこしま、忘れっぽい、うぬぼれが強い、勇敢
おとめ宮	寛大、気質がよい、正直、疑い深い、抜け目がない、賢い、思慮深い、向こう見ず、活発、ひょうきん、踊る、弦楽器を奏でる、クルアーンを暗唱する
てんびん宮	思慮深い、疑い深い、勇敢、愚鈍、臆病、公正、正直、性格が目立たない、詩を書く、富を持ち気前がいい、クルアーンを暗唱する
さそり宮	気質が悪い、心配事と策略がある、寛大、大胆、厚顔、陰気、怒りっぽい、残忍、クルアーンを暗唱する、無知、怠惰、うぬぼれが強い、勇敢
いて宮	威厳がある、無口、浪費家、狡猾、狂信者、水上旅行者、技師、測量士、天国や来世について思いめぐらす、動物好き、飲食の場所や衣類が清潔、よこしま、忘れっぽい、自尊心が強い
やぎ宮	高慢、嘘つき、怒りっぽい、鋭敏、変わり身が早い、邪悪について思いめぐらす、心配事と苦勞が多い、粘り強い、英知を好む、英知で有名、偽善者、楽しみを持つ、暮らし向きがよい、人を欺く、よこしま、忘れっぽい、好色、勇敢
みずがめ宮	気質がよい、慎重深い、忍耐と男らしさについて貪欲、食べ物について清潔、食べ物について寛大、財産を貯えることに熱心、財産に対して強欲、安楽の時には立ち向かう、苦難の時には臆病、穏やか、死について頻繁に考える、怠惰
うお宮	気質がよい、寛大、清潔、貪欲、考えが定まらない、誠実さにおいて中庸、策略と詐欺を講ずる、よこしま、忘れっぽい、無知、勇敢

363 (361). 宮が示す外的特徴 (ḥilya) と容貌 (ṣuwar)

宮名	外的特徴と容貌
おひつじ宮	中背でやせぎみ、上目がち、目が黒または青、耳が曲がっていて大きい、口が醜い、髪が巻き毛で赤みを帯びている
おうし宮	十分に背が高い、額が大きい、眉が小さい、目が黒く、白目が少ない、伏し目、鼻が広い、鼻先が膨らんでいる、口が広い、唇と首が大きい、髪が直毛で黒い、腹が大きい
ふたご宮	中背、体格と見た目がよく、首と髭がきれい、美しい、瞳が鋭い、肩幅が広い、脚が腕より長い
かに宮	中背、肩甲骨が厚く長め、髪が薄い、鼻が曲がっている、歯が不揃い、伏し目、下半身の方が大きい、脚が腕より長い
しし宮	十分に背が高い、胸と額が広い、指が太い、太腿が細い、上半身が大きく美しい、<目が>青か赤黒い、鼻が膨らんでいる、口が広い、歯に隙間がある、髪が赤みを帯びている、腹が大きい
おとめ宮	中肉、<背が>高め、髪が直毛、顔がきれい、胸と腹にあざがある、首にほくろがある
てんびん宮	手足が中庸、顔と体がきれい、肌が白い、顔色が悪い ¹⁸⁾ 、目が黒い、鼻がきれい、首と腰にほくろがある、足がきれい
さそり宮	頭蓋骨が隆起している、目がかわいく小さい、目が黄色、顔が丸い、額が狭い、髪が刺のよう、<髪が>頭頂部に多い、<髪が>赤みを帯びている、手足が長い、腿が細い、足が大きい、肩幅と胸が広い、鼻が平べったい、背中にほくろがある、腹が大きい

17) 362-375 節の順番は写本によってさまざまであり、ここでは主に CPM に基づく順番に従う。また、以下、表形式になっている節においては、節番号に続く表題は原文にはなく、訳者が便宜的に挿入したものである。

18) アラビア語で「顔色が悪い」という場合、その色は「蒼白」ではなく「黄色」である。

いて宮	体がきゃしゃ、体がきれい、十分に背が高い、顔が美しい、後ろからよりも前からの方がきれい、目がきれい、髭が直毛、髪が少ない、鼻先が大きい、鼻の色が赤みを帯びている、腹と脚が大きい、腿が長い、上腕と足にほくろがある
やぎ宮	体が真つすぐでやせている、姿がきれい、顔つきが山羊に似ている、＜目が＞青い、耳が曲がっている、頭髮が多い、髭が直毛、髭が長い、瞳が大きく黒い、胸毛が少ない、腿と脚が細い、足どりが軽やか、かわいい
みずがめ宮	中背、背が高からず低からずやや高め、額が小さい、目が黒い、黒目が白目より大きい、唇が厚い、上目がち、体が太い、両脚が不揃いで一方が他方より長い、胸が広い、顔が美しい
うお宮	体がきれい、関節と皮膚が弱い、背が中庸で美しい、胸が広い、肩幅が狭い、腹がよじれている、頭が小さい、額が狭い、伏し目、瞳の黒が大きい、かわいい

364 (370). 宮が示す病氣と病氣の状態 (‘ilal wa-amrāq)

宮名	病氣と病氣の状態
おひつじ宮	宮の前半は強く活力が増大し、後半は弱く活力が減少し病氣が多い。特に頭がカボチャのようになる。禿、顔が赤い、爪のしみ、ハンセン病、疥癬、耳と足の慢性病。＜宮の＞初めは腋臭、終わりは腿の悪臭、中間はよい匂いを示す。
おうし宮	前半は強く活力が増大し、後半は瘦せて活力が減少する。病氣の頻度は普通。瘰癧（リンパ節結核）やアングリーナ（口腔と咽頭の境界付近の炎症）のように病氣の多くが首に生じる。そばかす、鼻孔の悪臭、両足の匂い、背中と胸の痣を示す。
ふたご宮	手足が丈夫。匂いがよい。病氣の頻度は普通。病氣の多くは風邪と痛風。小さなそばかすがある。
かに宮	体が弱く、よく病氣になる。病氣の多くは痛風、風邪、癌、禿、薄毛、難聴、発疹性の皮膚病、フケ、ハンセン病、爪のしみ、痔疾、左足と指の倦怠。
しし宮	＜前半は＞体が強く活力が増大し、後半は体が弱く活力が減少し、病氣が多い。特に腹のあたりで。胃弱、目の痛み、禿。前半は口臭を示す。
おとめ宮	体が強く、細さとやせぐあいは普通。手足が丈夫。病氣の頻度は普通。禿を示す。
てんびん宮	細さは普通。体が強く、手足は丈夫。
さそり宮	前半は健康で筋骨たくましく、後半は病弱。手足は丈夫。病氣が多い。病氣の多くは聾啞、夜盲症、禿、薄髭、癌、フケ、発疹性の皮膚病、かゆみ、壊疽、ハンセン病、陰囊水腫、結石、排尿困難、男性器の悪臭。
いて宮	前半は健康で強く、後半は弱く病氣がち。細さは普通。手足は丈夫。病氣の頻度は普通。病氣の多くは痛風、風邪、盲目、片目喪失、禿、疫病、転倒、獣からの伝染病、手足の切断と突起、ほくろとあざが多い。
やぎ宮	体が弱く病氣が多い。手足は丈夫。病氣の多くは聾啞、目の乾燥、淋病、かゆみ、瘰癧、壊疽、癌、脱毛症、風邪、痛風、髪がまっすぐで柔らかい、腫物。他の宮より強度の禿を示す。
みずがめ宮	前半は健康で筋骨たくましく、後半は弱く病氣がち。手足は丈夫。その病氣は黄疸、蒼白、風邪、痛風、黒胆汁、片目喪失、目の痛み、静脈の痛み、めまい、骨折、疫病、転倒、鼻孔の悪臭。
うお宮	体がきゃしゃで細く虚弱。病氣が特に神経に多い。痛風、麻痺、胆汁過多、疥癬、発疹性の皮膚病、フケ、禿、ハンセン病、風邪、薄髭。

365 (360). 宮が示す身体部位¹⁹⁾、366 (362). 色、367 (363). インド人の見解²⁰⁾

宮名	宮が指示する身体部位	色	インド人見解
おひつじ宮	頭、顔	赤が混ざった白	赤みがかった白
おうし宮	首、喉もとけ	白、暗い茶	白
ふたご宮	両手	緑が混ざった黄	ピスタチオの緑
かに宮	胸、両脇、両乳、肺、胃	真っ黒ではないくすんだ黒	少し黒味があった赤
しし宮	心臓	白が混ざった赤	乾いた植物の色
おとめ宮	腹、内臓	白味があった黄	多色
てんびん宮	腰、尻	赤に近い白	黒
さそり宮	男性器、女性器	緑白	金の色
いて宮	両腿	赤みがかった色	ヤシの繊維の色
やぎ宮	両膝	赤に緑が混ざった色	黒と白のまだら
みずがめ宮	両脛	空色と混ざった黄、さまざま な色を持つ	黄色がかったブロンド
うお宮	両足	白	土色のくすんだ薄茶色

368 (364). 宮が示す人の階級 (ṭabaqāt) と職業 (aṣḥāb aṣ-ṣinā'āt)

宮名	人の階級と職業
おひつじ宮	支配者、両替商、貨幣製造者、鍛冶屋、真鍮製造者、肉屋、羊飼、泥棒の親分
おうし宮	仕立屋、穀物計量者、肉屋、法律家、農夫
ふたご宮	支配者、計算者、教師、狩人、踊り手、芸人、画家、仕立屋
かに宮	船乗り、河川の縦穴<を掘る者> ²¹⁾
しし宮	腕輪製作者、貨幣製造者、捕食性動物を使う狩人
おとめ宮	大臣、親方、書記、管理者、中流階級、踊り手、歌手、人の連合
てんびん宮	階級のある人、名士、親友、芸人、哲学者、技士、文法家、隠遁者
さそり宮	医者、手品師、魔術師、船乗り
いて宮	騎乗動物の商人、中流階級、手工職人、人の世話をやき、人のために耐える人
やぎ宮	狩人、奴隷
みずがめ宮	奴隷、女奴隷、ワイン商人、宝石とガラスの職人、教育のない者、死者の衣服を剥ぐ者
うお宮	有力者、崇拜者、後半は両眼の盲目を暗示、瞳を取り出される者、船乗り

19) 「身体部位」はすでに 361 節で扱われており、ここで再び言及されている。この項目の表が見られるのは CORPSAMPer である。

20) この項目は CRA から抜けている。

21) おそらくカナートを掘る者を指していると思われる。

369 (366). 宮が示す場所 (amākin)

宮名	場所
おひつじ宮	砂漠、羊の牧草地、宝石職人や火を扱う者の仕事場、泥棒の隠れ家、材木で屋根を葺いた家
おうし宮	山の近く、庭、草地、牛や象のいる所、食物の家
ふたご宮	山、平らな砂地、狩人のいる所、漁具のある岸、遊び人や賭博師や歌手のいる所、支配者の城
かに宮	ため池、密林、海岸、種と種蒔きの場所、川の崖、神を崇拝する場所
しし宮	山、砦、高い建物、王宮、砂漠、砂利、塩水の土地
おとめ宮	官庁、散歩道、女性や芸人の家、戸口、種を蒔くすべての土地
てんびん宮	モスク、神を崇拝する場所、城、建物、狩りとタカの場所、高台の観測所、砂漠、庭、ヤシの土地、種を蒔く山頂
さそり宮	汚い場所、腐った水の川床、牢獄、悲しみと罪の場所、蠍の巣穴、廃墟、葡萄の木と桑の木の場所
いて宮	障害のない砂漠、マギ教徒の崇拝場所、教会、武器庫、牛房 ²²⁾ 、粗い石の水槽、時々水が引かれる庭
やぎ宮	城、古い水槽、船の港、いろり、泣く場所、奴隷の家、犬とキツネの場所、見知らぬ者の家。前半は砂、岩、車輪、水の渦巻きを示す。
みずがめ宮	流れる水と淀んだ水の場所、風呂のような火を使うもの、ワインの店、売春宿、運河、つるはしで掘るもの、鳥の巣、水鳥の場所
うお宮	女王・崇拝・マギ教の祭司の場所、泣く場所、密林、淀んだ水の岸、塩の沼地、塩水、宝庫

370 (365). 宮が示す国 (al-buldān) と地域 (an-nawāḥī)

宮名	国と地域
おひつじ宮	バビロン、ペルシア、パレスティナ、アゼルバイジャン、アラーン
おうし宮	サワード、マーヒーン、ハマザーン、高地のクルド人<の土地>、マドヤン、キューロス島、アレクサンドリア、コンスタンティノーブル、オマーン、ライ、ファルガーナ。ヘラートとスィジスターンは<他の宮 (てんびん宮) と>共有する。
ふたご宮	ミスル、バルカの諸都市、アルメニア、ジーラーン、ブルジャーニ、ムーカーン、ジルジャーニ。イスファハーンとキルマーンは<他の宮 (いて宮、おとめ宮) と>共有する。
かに宮	ムーカーンの向こう側の小アルメニア、イフリーキヤの一部、ハジャル、バフライン、ダビール、マルヴ・ルード、ホラーサーン東部、バルフとアゼルバイジャンは<他の宮 (てんびん宮、おひつじ宮) と>共有する。
しし宮	ヤーजूズ寄りのトルコ、それに続く居住地の果て、アスカラーン、エルサレム、ニスイービーン、マダーイン、マラティヤ、マイサーン、マクラーン、ダイラム、アバルシャフル、トゥース、ソグド、ティルミズ
おとめ宮	アンダルス、シリア、クレタ島、ユーフラテス川、ジャズイーラ、ジャラーマカ、アビシニアの王国、サンアー、クーファ、キルマーンに続くペルシアの諸都市、スィンドとの境界寄りのスィジスターン
てんびん宮	イフリーキヤ寄りのルーム、アビシニアとの境界寄りの上エジプト、アンティオキア、タルスース、マッカ、ターリカーン、バルフ、トゥハリスターン、ヘラート、スィジスターン、カーブル、カシュミール、中国
さそり宮	ヒジャーズの地、イエメン寄りのアラブ人の砂漠、マディーナ、タンジャ、クバーズ、クバー、ハザル、ライ、クーミス、アームル、サーリヤ、ナハーワンド、ナフラワーン。ソグドは<他の宮 (しし宮) と>共有する。

22) アラビア語で aṣā'il al-baqar と読めるも意味不明なので、ペルシア語版に従う。

いて宮	ジバル、ディーナワル、イスファハーン、バグダード、ライ ²³⁾ 、タンバーワンド、ダルバンド、ジュンディーサーブール、プハーラーとジルジャーンは<他の宮(うお宮、ふたご宮)>と>共有する。アルメニアの海岸、マグリブ寄りのベルベル人<の土地>
やぎ宮	マクラーン、スインド、ミフラーンの川(インダス川)、インド寄りのオマーンの海の中央、中国、ルームの東の土地、アフワーズ、イスタフル
みずがめ宮	ジャバル寄りのサワード、クーファの地域、ヒジャーズの背後、コプト人の土地、西スインド。ペルシアは<他の宮(おひつじ宮)>と>共有する。
うお宮	タバリスターン、ジルジャーンの北、プハーラー、サマルカンド、ルームは<他の宮(てんびん宮)>と>共有する。シリア寄りのカーリーカラー、ジャズィーラ、ミスル、アレクサンドリア、イエメンの海、インド人の東の土地

371 (369). 宮が示す宝飾品 (ḡawāhir) と備品 (atāt)

宮名	宝飾品と備品
おひつじ宮	銅、鉄、鉛、兜、花輪、王冠、ベルト
おうし宮	衣服、羊毛、毛皮、えり、首輪、甘い果実、油、ベニバナ、亜麻の種
ふたご宮	腕輪、上腕の腕輪、ディルハム銀貨、ディーナール金貨、香料、太鼓、弦楽器、吹奏楽器
かに宮	米、サトウキビ
しし宮	胸甲、甲冑、背の高い金属の容器、火で作られる物、金、銀、サファイア、カンラン石
おとめ宮	水銀、食料、穀物、薬草、常用の種子
てんびん宮	絹、弦楽器、太鼓
さそり宮	サンゴのような水の宝石、薬物、アンモニア、水の容器、火で作られる物
いて宮	鉛、金、射手や槍手の乗り物、矢筒、武器、運河、レンガ、石灰
やぎ宮	保管に費用がかかる物すべて
みずがめ宮	水を見つける道具、建物を建てる道具、穴を掘る道具、植える道具
うお宮	真珠・真珠貝・サンゴのように水に関係ある物、サンダル

372 (371). 宮が示す動物の種類

宮名	動物の種類
おひつじ宮	ヤギ・羊・山の羊・鹿のような野生および家畜の分かれた蹄を持つもの
おうし宮	牝牛、牡牛、象、ガゼル、類人猿
ふたご宮	家禽、ロバ、角を持つ蛇
かに宮	爬虫類、水棲動物、スカラベ・蟹・大ヤモリのような陸地にいる多くの足を持つもの
しし宮	荒馬、猛獣、かぎ爪を持つものすべて、黒蛇
おとめ宮	カササギ、ワタリガラス、ナイチンゲール、スズメ、オウム、大蛇
てんびん宮	鳥、ヒョウ、ジン
さそり宮	爬虫類、水棲動物、有害な猛獣、蠍・スズメバチのような足の多いもの
いて宮	蹄を持つものすべて、特に使役馬・ラバ・ロバ、鳥類と爬虫類を示す指示がある
やぎ宮	子鹿、子羊、放牧するもの、昆虫・猿・イナゴを示す
みずがめ宮	二足を持つもの、ワシ、クロウシ、カワウソ、トビネズミ、クロテン、リス、水鳥、特に黒い鳥
うお宮	鳥、クジラ、魚、水棲の猛獣、蛇、蠍

23) ライは3箇所(おうし、さそり、いて)にあるが、写本によってはさそり宮だけに見られる。

373 (367). 宮が示す木と植物

宮名	木と植物
おひつじ宮	<欠落> ²⁴⁾
おうし宮	水の少ないすべての耕地、種を蒔かない植物、新芽、甘い果実、油、キビの種、ベニバナ ²⁵⁾
ふたご宮	高い木
かに宮	<高さが>適度な木、米、サトウキビ
しし宮	高い木
おとめ宮	蒔かれたすべての種、その土地、新芽、穀物、薬草、常用の種子 ²⁶⁾
てんびん宮	ヤシ、高い木、山頂に蒔かれるもの
さそり宮	高さが適度な木
いて宮	<欠落>
やぎ宮	耕地、草、それに似た植物、実も種もないもの
みずがめ宮	チーク、コクタン、ミロバラン、胡椒のような高い木
うお宮	綿、砂糖、リンゴ、モモ、セイヨウナシ、アンズ、ジャクダン、樟脳、ワサビノキ、美味な果物の種類、後半は<高さが>適度な木を示す

374 (368). 宮が示す水と風と火

宮名	水と風と火
おひつじ宮	常用の火
おうし宮	<欠落>
ふたご宮	波立つ水、気持ちのよい風、動物の匂い
かに宮	新鮮な水、激しい雨、空から降るもの
しし宮	流れが激しく制し難いワディ、地面を大きくする隠れた火、暗い天気、石の中の火
おとめ宮	流れるすべての水
てんびん宮	それが吹くことで木につぼみをつけさせ、果実を成長させ、熟させる風、暗い天気を示す
さそり宮	流れる水、川、用水路、水槽、洪水、泥、粘土とアラク酒を浸したもの
いて宮	川、もともと動物の体内にある火
やぎ宮	<欠落>
みずがめ宮	流れる水、海、木を根こそぎにし植物を枯らせる破壊的な嵐、寒さの厳しい風
うお宮	淀んだ水、湖

24) C以外の写本に従って、おひつじ宮といて宮を空白とみなす。Cだけはさそり宮とうお宮を空白にして、内容を繰り上げている。

25) 「甘い果実、油、キビの種、ベニバナ」はベータ系写本のみ。

26) 「穀物、薬草、常用の種子」はベータ系写本のみ。

375 (372). 宮の年、月、日、時間

宮名	宮の年と月と日 ²⁷⁾			同じく宮に属する日と時間 ²⁸⁾	
	年	月	日	日	時間
おひつじ宮	15	15	37 1/2	3	3
おうし宮	8	8	20	1	16
ふたご宮	20	20	50	4	4
かに宮	25	25	62 1/2	5	5
しし宮	19	19	47 1/2	3	23
おとめ宮	20	20	50	4	4
てんびん宮	8	8	20	1	16
さそり宮	15	15	37 1/2	3	3
いて宮	12	12	30	2	12
やぎ宮	27	27	67 1/2	5	15
みずがめ宮	30	30	75	6	6
うお宮	12	12	30	2	12

さて、これから宮の性質が相互に関わることで生じる宮の諸状態について述べよう。なぜなら複雑なものは単純なものに続くからである。

376 (373). 宮位 (nazar) と落位 (suqūt) とは何か

各宮はそれから3番目と11番目のそれぞれの宮を、「六分」(tasdis) と呼ばれる宮位で観ている。なぜなら両者の初点の間には2つの宮、すなわち12の1/6 (suds) があるからである。こうして両者の各度数の間では、30度に達するまで、それぞれ2度、3度、あるいは4度の六分と呼ばれる。3番目の宮に対する宮位は左の六分であり、11番目は右の六分である²⁹⁾。また、各宮は4番目の宮に対して左の「矩」(tarbī) <という宮位>で、また10番目に対しては右の矩<という宮位>で観ている。なぜなら、前者と後者2つとの間は3つの宮、すなわち天球の1/4 (rub) だからである。また、各宮は5番目に対しては左の「三分」(taṭlī) <という宮位>で、9番目に対しては右の三分<という宮位>で観ている。なぜなら、前者と後者2つとの間は4つの宮、すなわち天球の1/3 (ṭult) だからである。7番目に対しては「衝」(muqābala) という宮位である。ある宮と7番目との間は6つの宮、すなわち天球の半分がある。

互いに宮位をなしている宮は「関連している」(murtabiṭa) と呼ばれる。これらが7つの視座 (manāzir) である。2つの六分における視座の数値は60度で、2つの矩では90度、2つの三分では120度、そして衝では180度である。

落位について言えば、ある宮はその両側の宮も、両側の7番目も観ていない。これらはその宮と

27) アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.8によれば、各宮の支配星、すなわちそこを「宿」(443節参照)とする惑星の「小年」(440節参照)が、ここで問題となっている年数であり、そのまま月数となる。またの小年をnとすると、 $(2n \times 2 + n) \div 10$ という計算によって日数が求められる。ただし、やぎ宮とみずがめ宮はともに土星を支配星とするのに、ここでやぎ宮が30ではなく27という「小年」を有していることについては、どこにも説明が見当たらない。

28) 同じくアブー・マアシャル『占星術大序説』VI.8によれば、各宮の「小年」をnとすると、 $(12n \div 2 - n) \div 24$ という計算で求められる商がここで問題となっている日数であり、余りが時間となる。

29) 宮の順番は反時計回り。

は関連しておらず、それを観てもいない。したがって、2番目、6番目、8番目、12番目の宮は、その宮<の宮位>から落ちているのである。

377 (374). 愛する (mutaḥabba) 宮、嫌う (mutabāḡiḡa) 宮、敵対する (muta'adiya) 宮とは何か

「愛する宮」とは三分または六分によって互いに観るものであり、「嫌う宮」とは矩によって互いに観るものである。そして「敵対する宮」とは衝によって互いに観るものである。

おひつじ宮を例にとれば、ふたご宮とみずがめ宮がそれぞれ六分にあり、しし宮といて宮がそれぞれ三分にある。したがって、おひつじ宮はそれらを愛し、それらもおひつじ宮を愛する。また、かに宮とやぎ宮はそれぞれ矩にあり、おひつじ宮は両者を嫌い、両者もそれを嫌う。さらに、てんびん宮は衝にあり、両者は互いに敵対する。おひつじ宮に対して落位にあるのは、おうし宮、おとめ宮、さそり宮、そしてうお宮である。

378 (375). 宮位の序列とは何か

それらの中で最強のものは、各宮における合 (al-muḡāma'a) である。次は衝、次は右の矩、次は左の矩、次は右の三分、次は左の三分である。また最弱のものは六分であり、その中でも弱いのは左である。2つの宮位のうち強い方は、弱い方を無力にするか、その力を弱める。

379 (376). それについてインド人は同意しているか

彼らはその一部、すなわち衝、矩、三分については同意し、それ以外のものについては異なっている。彼らは、宮がそこから3番目の宮を観るが、その3番目の宮はその宮(1番目)を観ないと考える。同じく、それ(1番目)は6番目の宮を観ないが、その6番目の宮はそれ(1番目)を観る。また、それ(1番目)は8番目の宮を観るが、その8番目の宮はそれ(1番目)を観ないと考える。そして合を宮位とは呼ばない。彼らは、まっすぐに立っている人には自分の身体のどの部分も見えないと考えるのである。

序列について言えば、彼らは、3番目と10番目に対しては1/4の宮位、5番目と9番目に対しては1/2の宮位、8番目と4番目に対しては3/4の宮位、7番目に対しては1の宮位であり、2番目と12番目はそれぞれがそれ(1番目)から落ち、同時にそれは両者から落ちる、と考える。

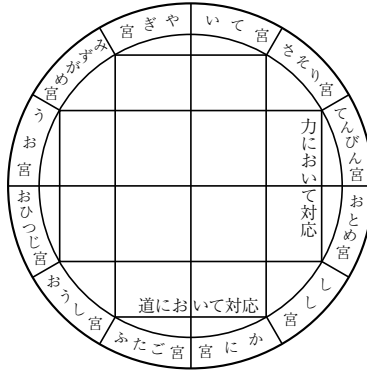
380 (377). 宮位以外に宮について同意事項があるか

2つの宮ごとに、等しい日周円で回転し、その一方は<黄道の>北にあり、他方は南にある。したがって、両者は「力において対応する」(muttafiqān fī al-qūwa) と言われる。なぜなら、両者の一方の昼の時間は、他方の夜の時間に等しく、あらゆる場所において両者の上昇時間は等しいからである。例えば、おひつじ宮とうお宮、おうし宮とみずがめ宮のように以下続く。両者の<各宮内の>度数における対応について言えば、それは反対になる。すなわち、おひつじ宮の最初の度数は力においてはうお宮の最後の度数に対応し、おひつじ宮の10度はうお宮の20度に対応する。

また、2つの宮ごとが<黄道の>南北の一方で同じ日周円で回転する。したがって、両者は「道において対応する」(muttafiqān fī at-tarīqa) と言われる。一方の昼の時間は他方の昼の時間に等しく、夜の時間も同様である。また直立球における両者の上昇時間は等しい。例えば、ふたご宮とかに宮、おうし宮としし宮である。両者における<各宮内の>度数の対応について言えば、それもやはり反対である。すなわち、かに宮の最初の度数は道においてふたご宮の最後の度数に対応し、か

に宮の10度は道においてふたご宮の20度に対応する。

この2つの概念については、書物の中でさまざまな名称が見られる。たとえ概念に対応する名称がそれにふさわしくないとしても、気にすることはない。アブー・マアシャルは、ひとつの惑星に属する2つの宮を道において対応すると言ったが、それは最初の2つのものとは種類が違う³⁰⁾。その名称もまた概念とは対応していないのである。これがいま述べたものの図である。



アブー・マアシャルは、力において対応する、おひつじ宮とうお宮、おとめ宮とてんびん宮の状態と、道において対応する、ふたご宮とかに宮、いて宮とやぎ宮の状態を、「性質における六分」(tasdīs ṭabī‘ī) と呼んだが、それぞれの組みでこの対応が起こるのは、宮位をなさない宮とであり、宮位をなさない宮に最も近い視座が六分だからである。また彼は、おひつじ宮とおとめ宮、うお宮とてんびん宮、ふたご宮とやぎ宮、かに宮といて宮の状態を「性質における衝」(istiqbāl ṭabī‘ī) と呼んだのは、それが宮位をなさないもの同士で起こり、衝に近いからである³¹⁾。

矩について言えば、それは、ある宮の対応と宮位の両方に関係して起る。例えば、おうし宮とみずがめ宮、しし宮とさそり宮は力において矩であり、また、おうし宮としし宮、さそり宮とみずがめ宮は道において矩である。このために、初めに述べたように、指示の力は落位の持つ不一致や不運<の性質>が薄れるように、矩の持つ嫌悪と損失<の性質>が薄れることを伴うのである³²⁾。

力と道におけるこの2つの対応の一方(前者)は天球の南北の両半分に起こり、他方(後者)は天球の上昇・下降³³⁾の両半分に起る。

381 (378). 天球の上昇半球 (nisf al-falak aṣ-ṣā‘id) と下降半球 (nisf al-falak al-hābiṭ) とは何か

この両者は、2至点(夏至点と冬至点)が2つに分けるものである。上昇する半分の宮は、やぎ宮、みずがめ宮、うお宮、おひつじ宮、おうし宮、ふたご宮であり、下降する半分の宮は、それらの反対側の6つである。

インド人はこの2つの半分のそれぞれをアヤナ (ayan, ayana) と呼ぶ。上昇<する半分>はウッタラ・アヤナ (ūtārāyan, uttarāyaṇa)、すなわち北<の半分>である。なぜなら、太陽は南の半分に

30) ひとつの惑星に属する2つの宮とは「宿」のことである(443節参照)。アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.5。

31) アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.6。

32) 「矩」が互いに嫌う宮から形成されることは、すでに377節で説明されている。

33) 「上昇・下降」については次の節を参照。

傾いていても、北の終点に向かって上昇しているからである。下降<する半分>について言えば、彼らは、すでに述べたことから、それをダクシナ・アヤナ (*dakṣāyan, dakṣināyana*)、すなわち南<の半分>と呼ぶ。

上昇する半分の宮は、直立球における宮の上昇時間よりもその土地の上昇時間の方が短いために、「斜めに上昇する宮」(*mu‘waḡḡa aṭ-ṭulū‘*)とも言われる。また、下降する半分の宮は、直立球における宮の上昇時間よりもその土地の上昇時間の方が長いために、「直立して上昇する宮」(*muṣtaqīma aṭ-ṭulū‘*)とも言われる。道において対応するという考えから、斜行する宮は「従う宮」(*muṭī‘a*)、また直立する宮は「命じる宮」(*āmira*)と呼ばれる。なぜなら、2つの宮ごとが同一の日周円で回転し、そのうち下降する半分にあるものが、第1の運動(西から東への運動)において上昇する半分にあるものに先行すると考えると、前者が後者に命令し、招き、後者が前者の後に続いて従い、進むかのようだからである³⁴⁾。

382 (379). 三角宮 (*muṭallaṭāt*) とは何か

同じ2つの性質を持つ宮は、天球では正三角形上にある。このために、その三角形上の宮(三角宮)はひとつのものだとみなされる。概してそれらが支配するのは、同じものあるいは似たものである。

おひつじ宮、しし宮、いて宮は火の三角宮であり、収集と充満を示している。火に対する指示について言えば、おひつじ宮は火を点ずる時に用いられる火を、しし宮は石や木の中に隠れている火を、そしていて宮は生来動物の体内にある火を示す。

おうし宮、おとめ宮、やぎ宮は土の三角宮であり、贈り物と繁栄を示している。種子に対する指示について言えば、おうし宮は種のない草と牧草地を、おとめ宮は穀物や種子を持つものと小さな木を、そしてやぎ宮は高く大きくなるものの種子を示す。

ふたご宮、てんびん宮、みずがめ宮は空気の三角宮であり、散布を示している。ふたご宮は適度で生産的な空気を、てんびん宮は受粉させ、成熟させ、成長させる空気を、そしてみずがめ宮は混乱させる空気と被害を及ぼす嵐を示す。

かに宮、さそり宮、うお宮は水の三角宮であり、獲得を示している。かに宮はおいしく甘い水を、さそり宮は流れの激しいさまざまな水を、そしてうお宮は塩辛く悪臭のする水を示す。

383 (380). 四角宮 (*murabba‘āt*) と四季の宮とは何か

おひつじ宮、おうし宮、ふたご宮は春の宮であり運動を示す。また、歳に関しては幼年期、方角は東、風は東風、昼夜の四分割ではそれぞれの最初を示す。

かに宮、しし宮、おとめ宮は夏の宮であり静止を示す。また、歳に関しては青年期、方角は南、風は南風、昼夜の四分割ではそれぞれの2番目を示す。

てんびん宮、さそり宮、いて宮は秋の宮であり運動を示す。また、歳に関しては壮年期、方角は西、風は西風、昼夜の四分割ではそれぞれの3番目を示す。

やぎ宮、みずがめ宮、うお宮は冬の宮であり静止を示す。また、歳に関しては老年期、方角は北、風は北風、昼夜の四分割ではそれぞれの4番目を示す。

それぞれの季節の最初の宮は「転換宮」(*munqalab*)、2番目の宮はその季節の本当の性質が定ま

34) ブトレマイオスは『テトラビプロス』第1巻第15章で、天球を2分点(春秋分点)で分けて、「命令する宮」を黄道の北の宮に、また「従う宮」を南の宮にしている。

る「固定宮」(tābit)、そして3番目の宮は「二体宮」(dū al-ḡasadayn)と呼ばれる。この3種類のそれぞれは、四角形の上にある。

おひつじ宮、かに宮、てんびん宮、やぎ宮は転換宮の四角宮であり、静寂、清潔、知性、学問とオカルトの原因に対する洞察を示す。

おうし宮、しし宮、さそり宮、みずがめ宮は固定宮の四角宮であり、夢、調査、正義、熟慮、議論好きを示す。また時として、不運に耐えること、仕事と苦痛に対する忍耐を示す。ふたご宮、おとめ宮、いて宮、うお宮は二体宮の四角宮であり、混乱、軽薄、無頓着、遊び好き、乏しい活力、物事の多様性、二色と二枚舌に染まることを示す。

一般的に、固定宮は指示が最も明瞭で、二体宮は最も不明瞭であり、転換宮は両者の中間である。

第2章 惑星

今や惑星の個々の状態に到達した。惑星の宮に対する関係は、魂(al-arwāh)の肉体(al-aḡsād)に対する関係と同じであり、惑星は宮に到達すると宮の性質によって変化を被る。それは、精神(an-nafs)が身体(al-badan)の性情(mizāḡ)に従うかのである。精神は、支配的な混合と、身体から受ける精神の動揺に応じて、怒り、喜び、悲しみ、精神の働きは身体の状態に似るようになるのである。

384 (381). 惑星の性質はどのようなものか

惑星には、その下で受け入れるものに対する作用と影響がある。土星の影響に見られるものは過度の冷たさと乾きであり、木星には適度な熱さと柔らかさ(al-ludūna)³⁵⁾があり、火星には過度の熱さと乾きがある。太陽には極端でない程度に火星よりは少ない熱さと乾きがあり、太陽の熱さは乾きよりも激しい。金星には適度な冷たさと湿りがあり、その湿りは冷たさに勝っている。水星において支配的なのは、極端ではない程度の冷たさと乾きであり、乾きが優位である。さらに、それに混ざるものに応じて変化し、その性質が変わってしまう。

月について言えば、それは極端でない程度に冷たく、湿っており、時には冷たさを不足させ、また時には冷たさが過剰になることがある。なぜなら、太陽から受ける光の一時的な熱のために、月が、季節のように、新月から四半月ごとに変化するからである。四半月の最初は春の性質であり、熱く湿っている。2番目は夏の性質であり、熱く乾いている。3番目は満月の後であり、冷たく乾いている。そして最後は冷たく湿っている。人々によれば、月の湿りは支配的であり、月からなくなることはない。すなわち、月は常に湿っているが、光が増大する最初の半月は、湿気と共に熱さの傾向がある。その後、<ひと月の>後半は湿気とともに冷たさの傾向にあり、熱が月から離れる。それは月の輝く部分が減少するからである。つまり、一時的に得られた性質が無くなると、その後本来の性質に戻るだけなのである。

385 (382). 吉(as-sa'āda)と凶(an-nuḡūsa)にある惑星の状態とは何か

土星と火星は完全に凶星(naḡs)であり、土星は大凶で、火星は小凶である。木星と金星は完全に吉星(sa'd)であり、木星は大吉で、金星は小吉である。木星は土星が呼び込む凶性(manḡasa)

35) 本来ここには「湿り」という表現が求められるが、アラビア語写本とペルシア語版はともに「柔らかさ」として
いる。

を解消する点で土星の反対であり、金星はその点で火星の反対である。太陽<のある宮>が<金星のある宮>と宮位にあるか遠くであれば吉星であるが、合にあるか近くであれば凶星になる。この点について、水星の性質はそのままであるが、凶の状態では凶星と、また吉の状態では吉星と同調する。また、それが単独の場合は吉の傾向にある。月に関して言えば、それは吉星であるが、その動きが速いために<他の>惑星からの位置の変化は大きい。一般に吉星は優れており、その作用は正義、公正、安全、純粹、よい性格、喜び、休息、美、そして美徳である。もし吉星同士が強力であれば互いに友好になり、友情を結び、弱ければ互いに助け合う。凶星は一般に反抗的で、傲慢で、有害であり、その作用は不正、墮落、貪欲、不純、無礼、悲嘆、混乱、不信、懷疑、醜悪、そしてすべての犯罪である。もし凶星同士が強力であれば互いに反発し敵対し、弱ければ落胆し衰退する。

人々によれば、土星の前半は火星のために凶星であり、後半は木星のために吉星である。これは、さまざまな状態における土星と2惑星との協調関係のためである。また火星においては、その前半は吉星で、後半は凶星である。太陽については、その前半は吉星で後半は凶星である。それに関する人々の類推について私は確信がない。この件に関する原理は、ふたつの性質を同時に持つことで影響が過度となる惑星は凶に関り、影響が適度な惑星は吉に関り、そして2つの性質の程度が異なる各惑星については、無条件に惑星を吉とか凶と呼ぶことができない、ということである。

386 (383). そのことについて昇交点と降交点に何か作用があるか

人々の中には、昇交点と降交点にある性質を関係づける者がいる。彼は、昇交点が熱く、吉星で、増大を示し、降交点が冷たく、凶星で、減少を示すと考える。このために、バビロンの人々は、昇交点が吉星と共にあれば吉星であり、凶星と共にあれば凶星だと考える。なぜなら、昇交点は惑星の持つ指示を増大させるからである。それはかけ離れた類推に基づいているので、才能ある者がすべてそれを受け入れているわけではない。

387 (384). それについてインド人は何か見解を持っているか

彼らによれば、完全な凶星は土星、火星、太陽、昇交点であり、降交点は全く考慮されていない。また、完全な吉星は木星と金星である。水星について言えば、それは吉星と共にあれば吉星、凶星と共にあれば凶星である。月について言えば、ある者は、その光が増大する時は吉星で、減少する時は凶星であると言い、またある者は、太陰月の最初の10日は吉星でも凶星でもなく、中間の10日は吉星で、最後の10日は凶星であると言う。

388 (385). 男性の惑星と女性の惑星とは何か

3つの上位惑星は太陽と共に男性であり、その中でも土星は去勢者のようである。また金星と月は女性である。水星は男性の惑星と共にあれば男性で、女性の惑星と共にあれば女性である。このために、水星は両性具有者のようである。もしそれが単独であれば、その本質は男性の性質(aq-dukūra)である。火星を女性と考える人々がいたが、彼らの主張は受け入れられなかった。

389 (386). 昼の惑星と夜の惑星とは何か

土星、木星、太陽は昼の惑星で、昼に力が強くなる。また火星、金星、月は夜の惑星である。水星はそれと交わる惑星や宮に応じて、昼の惑星であり同時に夜の惑星である。各惑星はそれに似た

ものを助け、昼には昼の惑星が、また夜には夜の惑星がそれに助けを求める。

太陽は昼の交替主星 (sāhibat an-nawba)³⁶⁾ であり、月は夜の交替主星である。なぜなら、その間にそれぞれの作用が現われるからである。またその間に地上にない各惑星の作用は、現われずに隠れている。ある人々は、昇交点に男性の性質を与え、昼の惑星とみなし、また降交点に女性の性質 (al-unūta) を与え、夜の惑星とみなしたが、それは正しい基準ではない。

390 (387). 惑星の指示はそのまま続くか、それとも変化するか

それは、宮にあること、恒星や他の惑星と共にあること、そして〈他の惑星に対して〉視座にあることに応じて、また惑星の諸状態、太陽や太陽光線との位置関係、そして近いか遠いかに応じて変化する。つまり土星は上昇する時、乾いていて、下降する時、湿っている³⁷⁾。さらに、同一の惑星が示す同じ状態は、幸運としても不運としても起こる。例えば、土星が土地を求めることを示す場合がそうである。すなわち、土星が力のある状態にあれば、〈人は〉農業のために土地を求め、それが気に入り、そこから富を得る。またその反対にあれば、〈人は〉苦勞して土地を求め、種蒔きで苦勞する。土地に関する土星の不運は続くが長くはない。

われわれは書物で述べられている惑星の指示をまとめて、それらを表にしよう。

391 (388). なぜ惑星は同じことを繰り返し指示し、惑星によって異なることがないのか

このことの根本には、諸原理の脆弱さとそれらに基づく類推の混乱がある。星学者たちは、惑星の性質やその吉凶に応じて、色、匂い、味、属性、作用、特性を惑星に配分することで一致している。さらに、彼らはそのことや、存在するすべての物が生じる時や用いられる時に応じて、それらを惑星に関係づけている。ある物の指示についてひとつの惑星が単独で関することはまれであり、むしろ2惑星またはそれ以上の惑星が、2〈またはそれ以上の〉惑星と関係のある明らかな2つ〈またはそれ以上〉の性質を共有する。例えばタマネギにおいては、火星は熱さにおいてそれと関係し、金星は湿りにおいてそれと関係する。また、アヘンにおいては、土星は冷たさにおいてそれと関係し、水星は乾きにおいてそれと関係する。すなわち、ある者がアヘンを土星に関係づける時は、冷たさにおいてであり、またある者がそれを水星に関係づける時は、乾きにおいてなのである。この件について、人々には体験がないので、彼らの書物の内容は異なるどころか、互いに矛盾している。

時には、複数の惑星が、いくつかの性質や属性に応じて、ひとつの惑星が指示するものを共有したり、他の惑星があるもののさまざまな部分をその惑星と共有することがある。例えば、金星は、その香りが良いことのために、芳香植物全体を示す。また、火星は、木の刺・赤い色・鼻の炎症を招くほど匂いがきついことのために、バラを金星と共有する。また、木星はスイセンを、土星はギンバイカを、太陽はスイレンを、水星はメボウキを、そして月はスマイルを金星と共有する。同じく、惑星はひとつのものを諸部分に分ける。例えば、一本の木においてもそうである。幹は太陽に、根は土星に、刺、枝、または樹皮は火星に、花は金星に、果実は木星に、葉は月に、そして種は水星に属する。例えばメロンのような木についても、前述のように、惑星はひとつのものを諸部分に分ける。こうして、全体は太陽に、果肉と果汁は月に、皮は土星に、匂いと色は金星に、味は

36) 昼夜、日、時間の支配星のように交互に交替して支配する星のこと。

37) 上昇と下降の意味は複数あり、どの場合を指しているのかは不明。例えば、惑星が離心天球上の第1・第2象限にあれば下降し、第3・第4象限にあれば上昇している。

木星に、種は水星に、そして種の皮と外見は火星に属する。

392 (389). 惑星による方角 (ḡihat) の指示はどのようなものか

三角宮の方角を扱った『出生の書』(kitāb al-mawālīd) でナイリーズィー³⁸⁾ が述べたこと以外に、私はこれに関する基準 (qānūn) を入門書の中に見たことがない。土星には東、火星には西、金星には南、そして木星には北への指示がある。

しかし、インド人は「ディグバラ」(ḡihatīh, digbala) と呼ばれる力を惑星に関係づけている³⁹⁾。つまり、それは、上昇点にある水星と木星、10番目<の家>にある太陽と火星、7番目<の家>にある土星、4番目<の家>にある金星と月にそれぞれ属する。したがってそれによれば、東は水星と木星に、西は土星に、南は太陽と火星に、北は金星と月に関係があることになる。

インド人にはまた頭に関係した八角形があり、それを戦いや賭事のために選択占星術 (al-iḥṭiyār) で用いる。彼らは太陽を東に、木星を南に、火星をその間に、月を南と西の間に、土星を西と北の間に、水星を北に、そして金星を北と東の間に置き、西には何も置かない。

393 (390). 日は惑星の間でどのように分割されるか

最初の日、すなわち日曜日の最初の時間から始められる。その時間は、昼と夜とそれらの時間に最もふさわしい理由となる惑星、すなわち太陽に属するとみなされる。次に2番目の時間は、上から下への天球の順番でそれに続く惑星、すなわち金星に属する。3番目の時間は水星に、4番目は月に、そして5番目は土星に属する。この順番で2日目、すなわち月曜日に続く。月曜日の最初の時間の順番は月に、また2番目は土星に属するとみなされる。こうして次の日曜日まで続き、日曜日の最初の時間の順番は太陽に戻る。このことから時間の支配星が知られ、毎日は、その日の最初の時間が属する惑星と関係づけられる。人々は、奇数時間を男性に、偶数時間を女性に関係づけ、毎日の最初の時間を男性、2時間目を女性、3時間目を男性とみなし、一日の時間が完了するまでこのように続ける。

394 (391). これについて相違があるか

この件をインド人は頻繁に用いている。彼らは、1日の時間が24時間で、それがその日の日の出から<次の>日の出までで、その日の支配星が朝にあり、夜がその日の昼に続くように考え、その間にその日の支配星を考えない。また彼らは定時以外を使わない。これは最も類推しやすいものである。

われわれの土地の星学者について言えば、彼らは昼の支配星と夜の支配星とを分け、不定時を用いている。また昼に続く夜の支配星は、下る数え方では1日の支配星から13番目、簡単な数え方では6番目、あるいは遡る数え方では3番目である⁴⁰⁾。このためにアストロラーブにはこの種の時間 (不定時) が描かれている。しかしそれは不自然であるが、決まりになっている。

395 (392). クリマは惑星間でどのように分割されるか

赤道から最初のクリマは、惑星の中で最も高く、天球が最初にあつて最も大きい土星に属すると

38) アブー・アル=アッパース・アル=ナイリーズィーは9世紀の天文学者。この著作は残っていない。

39) 『ブリハッ・ジャータカ』2.19, 『ヤヴァナ・ジャータカ』1.88.

40) 「下る数え方」は1番目から、「簡単な数え方」は8番目から、そして「遡る数え方」は15番目から始める方法。

考える。それは、最初のクリマが最も範囲が広く最も肥沃で、住人の〈肌の〉色と気質が土星に関係があるからである。次に、木星がそれに続き、2番目のクリマがそれに属するとみなす。こうして、7番目は月に属する。アブー・マアシャルによれば、これはペルシア人の見解であり、ルーム人によるそれらの支配星は異なっている。すなわち、最初は土星、2番目は太陽、3番目は水星、4番目は木星、5番目は金星、6番目は月、そして7番目も月に属する⁴¹⁾。

396 (393)．都市の上昇点、クリマ、そして都市の時間の支配星とは何か

ある地域（クリマ）と宮および惑星との関係について言えば、それは特に両者（宮と惑星）による地域（クリマ）に関する指示によるのであり、検証によって決定されていることである。〈都市の〉上昇点と時間の支配星について言えば、都市を建造する時でなければ、それは都市に保存されることはない。どこの都市がそれを保存しているだろうか。これ（保存）が各都市の建設者の義務であったとしても、長い時がそれを消し去ってしまうだろう。基礎が築かれた都市についてわれわれが述べたことと事実が違うことを考えてみなさい。川を掘った時と、そこに水が流れた時のどちらを基準にして、両者（宮と惑星）を世界の大河に関係づけられるだろうか。それが間違っていることは、きわめて明らかである。

397 (394)．惑星の年とは何か

各惑星には、最大年（‘uzmā）、大年（kubrā）、中年（wustā）、小年（ṣuġrā）の4つの種類がある。最大年は時代の変化に用いられる。ある人々によれば、惑星は昔の人に寿命の長さとして最大年を与えていた。他の3種類は、今では、現代人の寿命や、期間とか限られたものを数えることに用いられる。それらは年にだけ用いられるのではなく、数には制限がない。だから、それらは年のこともあれば、月、週、日、時間のこともある⁴²⁾。

398 (395)．惑星のファルダール（fardārāt）とは何か

これはペルシア人の見解である。出生者（al-mawlūd）⁴³⁾は、ファルダールの支配星の年の間、その支配下にあり、その後、彼はその後続く支配下に移る。〈ファルダールは〉昼の誕生であれば太陽から始まり、夜の誕生であれば月から始まり、天球の上から下への順番で続く。

また、惑星のファルダールの年数は7惑星の間でも等分される。その最初はファルダール自身の支配星に属し、天球の下からの順番で続く⁴⁴⁾。

41) アブー・マアシャル『占星術大序説』VI.2には、ペルシア人とルーム人の両方の見解が紹介されているが、ペルシア人による7番目は月ではなく、火星となっている。

42) 具体的な惑星の年数については、440節に見られる。

43) これはもっぱら占星術文献に見られる表現であり、占いをする対象者（native）を意味する。

44) ファルダールの具体的な数値については、441-442節に見られる。

399 (396). 惑星が示す性質、400 (397). 吉星と凶星、401 (398). 男性と女性

惑星名	惑星の性質	吉星と凶星	男性と女性の惑星
土星	過度の冷たさと乾き	大凶	男性
木星	適度の熱さと湿り	大吉	男性
火星	過度の熱さと乾き	小凶	男性、しかし女性とも言われる
太陽	熱さと乾き、熱さの方が優勢	近ければ凶、遠ければ吉	男性
金星	適度の冷たさと湿り、湿りの方が優勢	小吉	女性
水星	中庸の冷たさと乾き、乾きの方が優勢	本来は吉、しかしその他のものに似る	男性、しかしそれと交わるものに似る
月	中庸の冷たさと湿り、時々変わる	吉、他の惑星の凶性を受け入れやすい	女性

402 (399). 昼と夜の惑星、403 (400). 味と匂い、404 (401). 色

惑星名	昼の惑星と夜の惑星	惑星による味と匂いの指示	惑星に属する色
土星	昼	不快な味、渋さ、酸っぱく嫌な味、悪臭	濃い黒、黒と黄色の混ざった色、鉛の色、暗い色
木星	昼	甘さ、苦さ、良い匂い	くすんだ薄茶色、黄色と茶色が混ざった白、明るい色、輝く色
火星	夜	苦さ	暗い赤
太陽	昼	刺激的な味、芳香	明るい色、ブロンド、黄色、時間の支配星の色がその色だと言われる
金星	夜	脂っこい味、甘さ	純粹な白、茶色、肌色、明るい色、緑とも言われる
水星	昼、他の惑星と交わると変わる	混ざった2つの味	混ざった色、灰色と空色のような2色が混ざったもの
月	夜	塩からい、味がない、少し酸っぱい	青、赤・黄・濁った色、または蒼白が混ざった白、明るい色

405 (402). 惑星の示す一般的特徴、406 (403). 状態と形態

惑星名	惑星が指示する一般的特徴	惑星に属する状態と形態
土星	物事のうちで最も寒く、最も堅固で、最も腐敗し、最も力強い	短いこと、乾燥、硬いこと、重いこと
木星	物事のうちで最も公正で、最も完全で、最も美しく、最も善良で、最も従順	均衡、凝結、円滑
火星	物事のうちで最も熱く、最も粗く、最も鋭く、最も赤い	長いこと、乾燥、粗いこと
太陽	物事のうちで最も高貴で、最も気高く、最も有名で、最も寛大	円形、光沢、希薄状態、蒼白、何もない空虚
金星	物事のうちで最も賢明で、最も楽しく、最もおいしく、最も美しく、最も優しく、最も湿っている	矩形、流動、軟らかいこと
水星	これらのうちの2つの事から成る中庸の混合	2つの単独の状態が混ざったもの
月	物事のうちで最も厚く、最も濃く、最も湿り、最も軽い	厚いこと、湿気、堅固、軽いこと

407 (404). 惑星の示す日、408 (405). クリマ、409 (406). 土地の種類

惑星名	惑星の日	惑星のクリマ	惑星に属する土地の種類
土星	土曜日	第1	植物が育たない乾燥した山
木星	木曜日	第2	平坦な土地
火星	火曜日	第3	荒れた未開の土地、砂利の多い土地
太陽	日曜日	第4	鉱物のある山
金星	金曜日	第5	水の多い湿った土地
水星	水曜日	第6	砂地
月	月曜日	第7	すべての平原、平らな土地

410 (407). 惑星の示す場所

惑星名	惑星に属する場所
土星	巢穴、石棺、井戸、古代の建物、破壊された道、生ごみくのある場所、野獣が群れる砂漠、牛・ロバ・馬をつなぐ場所、象の家
木星	人の住む所、貴族の家、モスク、説教壇、教会、シナゴグ、学問くの場所、書物くの場所、崇拜の道、教師の家、鉛製造者の仕事場
火星	火や木の場所、近くにある道、陶器が作られる所
太陽	支配者や統治者の家
金星	隆起した場所、多くの水のある道、崇拜の家
水星	市場、官庁、モスク、画家や漂白する人の家、近くの庭、小川、泉
月	地下や水中の湿った場所、日乾しレンガの場所、水の冷たい場所、川、木のある道

411 (408). 惑星の示す居住地

惑星名	惑星に属する居住地
土星	スインド、インド、ザンジュ、アビシニア、コプト、スーダンの南西、イエメン、アラブ人くの土地、ナバテア
木星	バビロンの人々くの土地、ペルシア、ホラーサーンの人々くの土地、トルコ人くの土地、イフリーキヤ西部のバルベル人くの土地
火星	シリア、ビザンティウム、スラヴ人くの土地、北西にいる人々くの土地
太陽	ヒジャーズの人々の土地、エルサレム、レバノン山、アルメニア、アラーン、ダイラム、中国寄りのホラーサーン
金星	バビロンの人々くの土地、アラブ人くの土地、ヒジャーズ、それに続く場所、島または密林の真ん中にある都市
水星	メッカ、メディナ、イラークの地、ダイラム、ジューラーン、タバリストーン
月	モースル、アゼルバイジャン、敵がいる山道、あらゆる場所の普通の人々くがいる所

412 (409). 惑星の示す鉱物、413 (410). 金属と宝石

惑星名	惑星に属する鉱物	惑星に属する金属と宝石
土星	一酸化鉛、鉄くず、硫酸塩、硬い石	鉛
木星	白鉄鉱、亜鉛、硫黄、赤いヒ素、白と黄色のすべての石、牛の胆石	錫、インド錫、白錫、土質の真鍮、ダイヤモンド、男が用いるすべての装飾品
火星	磁石、赤鉄鉱、辰砂、赤い石、装飾用貝殻	鉄、銅
太陽	ラピスラズリ、大理石、硫黄、黄色いヒ素、ファラオのガラス、鶏冠石、アスファルト	サファイアとルビーの種類、すべての高価な石、純金、装飾したベルト
金星	マグネシア、アンチモン	真珠、カンラン石、シマメノウ、宝石で飾られた装飾品、金・銀・鉛・銅または鉄の家庭の容器
水星	石灰、ヒ素、コハク、黄色か緑色のすべての動く石、水銀	トルコ石、質の悪い真鍮、ディルハム銀貨、ディーナール金貨、ファルス銅貨のうちクベブや木で製造されたものすべて、真珠、サンゴ
月	ナバテアのガラス、細長い石、すべての白い石、エメラルド、月 (al-qamar) という言葉の付く石 ⁴⁵⁾	真珠、水晶、装飾用の貝、銀、金 ⁴⁶⁾ 、ディルハム銀貨、腕輪、印章付きの指輪、杯

414 (411). 惑星の示す穀物と果物、415 (412). 木

惑星名	惑星に属する穀物と果物	惑星に属する木
土星	胡椒、栗、オリーブ、セイヨウカリン、酸っぱいザクロ、レンズマメ、亜麻、麻の種	木のコブ、ミロバラン、オリーブ、胡椒、エジプトヤナギ、ヤナギ、テレピンノキ、トウゴマ、内部が変化しない木・味が不快な木・悪臭がする木、あるいはクルミやアーモンドのように皮の固い果実を持つ木
木星	甘いザクロ、リンゴ、小麦、大麦、米、モロコシ、ヒヨコマメ、ごま	イチジク・モモ・アンズ・ナシ・ハスの実のような、甘く脂肪が少ないか、あるいは皮の薄い果実を持つすべての木、果実に関しては金星と共通
火星	苦いアーモンド、緑の穀物	酸っぱいザクロ・苦いセイヨウナシ・クコのように、苦く、辛く、トゲがあって、その果実に芯、皮、赤色、または渋みがあるか、強い酸味のあるすべての木
太陽	シトロン、インド米	背が高く、果実に脂肪が多いすべての木、果実が乾いた状態で用いられるもの、ナツメヤシ、クワの木、ブドウの木が含まれる
金星	イチジク、ブドウ、ナツメヤシ、穀物、野生のタイム、コロハ (フェヌグリーフ)	イトスギ・チーク・リンゴ・マルメロのような、感触が軟らかく、香りが良く、見た目の良いすべての木
水星	インドマメ、エジプトマメ、キャラウェイ、コリアンダー	匂いが強く、悪臭のするすべての木
月	小麦、大麦、キュウリ、スイカ、メロン	幹の小さい、枝のあるすべての木、甘いザクロとブドウの木が含まれる

45) 例えば、「透明石膏」は「月の石」と呼ばれる。

46) ここにある単語にはさまざまなヴァリエントがあり、ALMŠLYATともALMŠLBANとも読めるが、意味は不明。

416 (413). 惑星の示す植物と種

惑星名	惑星に属する植物と種
土星	ゴマ
木星	花、バラ、香りが甘いか背の高いすべての植物、風が吹いて飛ぶ雑多な毛が巻きつく軽いすべての植物
火星	カラシ、ニラネギ、タマネギ、ニンニク、ヘンルーダ、クレソン、アフリカヘンルーダ、ハツカダイコン、ナス
太陽	ネナシカズラ、サトウキビ、甘露、マンナ
金星	穀物、油、フラワー (hulāwā, ある種の植物名)、甘い香りの複数の色を持つすべての植物、春の花で綿と関係がある
水星	芳香植物、薬草、アシ、水中のすべての植物
月	草、アフリカハネガヤ、バビルス、綿 ⁴⁷⁾ 、アマ、ブドウ、キュウリやメロンのように幹にならないもの

417 (414). 惑星の示すあらゆる事における滋養と薬

惑星名	惑星に属するあらゆる事における滋養と薬
土星	第4段階 ⁴⁸⁾ の冷たさと乾きにある滋養と薬、特に麻痺と死をもたすもの
木星	熱さと湿りが中庸で、均衡がとれているもの、すなわち有益で好まれるもの
火星	第4段階の熱さの有害な毒物
太陽	熱さが第4段階には達しないもの、すなわち有益でどこでも用いられるもの
金星	冷たさと湿りが中庸で、均衡がとれているもの、すなわち有益で味のよいもの
水星	乾きが冷たさに勝り極端ではないもの、すなわち好まれるが時々しか役に立たないもの
月	冷たさと湿りが同等のもの、すなわち時々役に立ち、時々害を及ぼし、常に用いられるわけではないもの

418 (415). 惑星の示す生活の糧、419 (416). 状態、420 (417). 力

惑星名	生活の糧	状態	惑星に属する力
土星	薬	眠ること	抑制する力
木星	果物	着ること (al-libās, 衣類)	精神力、成長力、増大力、肺の中の息
火星	薬	働くこと	怒りから生じる力
太陽	食べ物	食べること	動物的な力
金星	芳香植物	性交すること	感覚的な力
水星	穀物	話すこと	観念的な力
月	飲み物	飲むこと	自然の力

47) アラビア語は ALMKATĪN。「綿」に関係があると思われるが、同定不能。

48) 性質を4段階(最弱、弱、強、最強)で表わす方法はガレノスに遡る。

421 (418) . 惑星の示す四肢を持つもの (dawāt al-arba')

惑星名	惑星が指示する四肢を持つもの
土星	黒い動物、地下の穴に隠れているもの。これには、ウシ、ヤギ (al-ma'z)、黒い騎乗動物、ダチョウ、リス、クロテン、イタチ、ネコ、ネズミ、トビネズミ、黒い大蛇、サソリ、毒を持つものすべて、ノミ、スカラベが属する
木星	ヒト、家畜、ヒツジ (aq-da'n)・雄ウシ・雄ジカのような分かれた蹄や足の裏を持つもの、白黒の斑点のあるものすべて、色が良いか肉がうまいすべての獣、食べられるもの、話すもの、ライオン・ヒョウ・オオヤマネコのうち飼いや慣らされたもの
火星	ライオン、ヒョウ、ジャッカル (aq-di'ab)、イノシシ、イヌ、有害か狂犬病に罹ったすべての猛獣、ヘビ、クサリヘビ
太陽	これには、ヒツジ (al-ganam)、ヤギ (al-arāwīy)、雄ジカ、アラブウマ、ライオン、ワニ、そして夜行性の野獣が属する
金星	これには、野獣のうち白か黄色の蹄を持つものすべて、ガゼル、野生のロバ、ヤギ (al-aw'al) が属する。またこれには、魚が属する
水星	ロバ、ラバ、訓練されたイヌ、キツネ、ウサギ、ジャッカル (ibn āwā)、エゾイタチ、暗闇にいるすべての動物、土または水の中のすべての小動物
月	ラクダ、雄ウシ、ヒツジ (as-sā')、ゾウ、キリン、人に飼いや慣らされた従順なすべての動物

422 (419) . 惑星の示す飛ぶもの

惑星名	惑星が指示する飛ぶもの
土星	水鳥、夜の鳥、カラス、黒いアマツバメ、ハエ
木星	くちばしが真っすぐで、穀物を食べる、黒くないすべての鳥、ハト、シャコ、クジャク、オンドリ、メンドリ、ヤツガシラ、ヒバリ
火星	その肉が食用でくちばしが曲がった鳥。これには、コウモリ、水鳥 (at-taytawā)、赤いすべての鳥、スズメバチが属する
太陽	ワシ、タカ、オンドリ、キジバト
金星	ジュズカケバト、モリバト、野生のハト、スズメ、ナイチンゲール (al-balābil)、ナイチンゲール (al-andalīb)、イナゴ、シラミ、食用でない鳥
水星	ハト、キツツキ、ハヤブサ、タカ、水鳥、ムクドリ
月	アヒル、ツル、ハゲタカ、サギ、大型のすべての鳥。これには、メンドリ、スズメが属する

423 (420) . 惑星の示す基本要素と四体液、 424 (421) . 身体の一部、 425 (422) . 人の内臓

惑星名	惑星に属する基本要素と四体液	惑星に属する身体の一部	惑星に属する人の内臓
土星	土、黒胆汁、時として異臭の粘液を示す	髪、爪、皮膚、羽、羊毛、骨、大脳、角	脾臓
木星	空気、血液	動脈、大脳、精液	肺を太陽と共有
火星	火の上部分、黄胆汁	静脈、身体の後ろ部分	肝臓を金星と共有
太陽	火の下部分	脳、神経、膨らんだ部分	胃
金星	<欠落>	肉、脂肪、精液	腎臓
水星	黒胆汁	動脈	胆のう
月	粘液	皮膚、身体の左側部分	肺

426 (423). 惑星の示す頭部、427 (424). 感覚、428 (425). 身体部分

惑星名	惑星に属する頭部	惑星に属する感覚	惑星に属する身体部分
土星	右耳	聴覚	臀部、後部、内臓、泌尿器、口蓋垂、背中、膝
木星	左耳	聴覚、触覚	太腿、腸、子宮、喉
火星	右の鼻孔	嗅覚	脚、胆のう、腎臓
太陽	右目	視覚	頭、胸、横腹、口、歯
金星	左の鼻孔	嗅覚、吸引器官	子宮、陰茎、女性と寝るための器官 ⁴⁹⁾ 、手、指
水星	舌を月と共有	味覚	舌、発話器官
月	左目	視覚、味覚	首、乳房、肺、胃、脾臓

429 (426). 惑星の示す歳、430 (427). 人間関係

惑星名	惑星の指示する歳	惑星に属する人間関係
土星	老年 (ṣayḥūḥa)	父親、祖父、年上の兄弟、奴隷
木星	熟年 (kuḥūla)	子供、孫
火星	壮年 (ṣabāb)	兄弟の真ん中
太陽	盛年 (ruḡūliya)、人生の中間	父親、兄弟の真ん中、マワーリー
金星	青年 (ḥadāta)、成年	妻、母親、年下の姉妹、子供の母親、両性具有者の子供
水星	少年 (ṣabīy)	年下の兄弟
月	生まれた時は幼年 (tuḥūla)。その後変わり、月始めには青年、中旬には壮年、下旬には老年 (kibar) を示す。また養育の状態を示す	母親、母方のおば、年上の姉妹、乳母、女主人

431 (428). 惑星の示す外的特徴と容貌

惑星名	惑星の指示する外的特徴と容貌
土星	外見が醜い、<背が>高い、細身、しかめつら、頭が大きい、<眉が>つながっている、目が小さい、口が大きい、唇が厚い、伏し目、髪が多く黒い、<肌の>色が赤と黒に変わる、首が短い、掌が大きい、指が短い、脚が曲がっている、足が大きい、歩幅が広い
木星	身体が美しい、顔が丸い、鼻先が大きい、頬が膨らんでいる、目が大きく色は濃い黒、顎髭が薄く幅が広い、髪が乏しく赤みを帯びている
火星	背が高い、頭が大きい、目と耳と額が小さい、目つきが鋭い、<目の色が>青い、鼻と唇が美しい、肉と髪が少ない、髪が直毛で赤みを帯びている、指が長い、歩幅が広い
太陽	頭が大きい、太っている、<肌が>白く黄色が染まっている、直毛、白目に黄色がある、声がかすれている、腹が大きく、脂肪のたるみがある
金星	顔が美しく丸い、<肌が>白く赤が染まっている、太っている、腹に脂肪のたるみがある、頬肉が多い、目がよい、黒目が白目より大きい、歯が小さい、首が美しい、中背、指が短い、脚が大きい
水星	体格がよい、肌が緑に近い、額が美しく狭い、耳が大きく、眉が美しく繋がっている、鼻が美しい、口が大きい、歯が小さい、顎髭が薄い、髪が半分縮れている、目つきがよい、足が長い
月	色が白く美しく澄んでいる、身体が健康、顔が丸い、顎髭が生えそろうっている、眉が繋がっている、頭に裂け目がある、歯が先端で隙間が空き曲がっている、髪の毛がある、髪が美しい

49) 前述の「陰茎」を言い換えたものだと思う。

432 (429). 惑星の示す性格

惑星名	惑星に属する性格
土星	臆病、腰抜け、思慮深い、小心、貪欲、悪意がある、狡猾、心配性、暴君的、妄想に取りつかれている、発言と友情において信頼できる、慎重さ経験がある、何を考えているか分からないほど深遠で無口、奪い取らないような人を愛さない、怒ると自分を制御できない、自分の行為を主張する。湿気と乾燥のように相反するものを示すために、<惑星は>知性を指示するが、無知を誰も指摘しないほどその人は愚かである
木星	性格がよい、知性に鼓舞される、穏やか、志が高い、信心深い、公正、信頼される、機転がきく、心が寛大で自由、友情が信頼できる、誇りが高い、大都市での指揮を好む、不動産・豪邸に対して貪欲、忠誠心が強く信用できる、悪事を嫌う、神を畏れる、減食に耐えられる
火星	考えの混乱、堅実さ・恐れ・無知・悪意・軽率・向こう見ず・大胆・論争好き・愚かさ・卑猥な言葉・移り気に欠ける、思慮・厳格さ・凶々しさに欠ける、羞恥心・信仰心・忠誠心に乏しい、むら気・欺き・機敏さ・冗談・聡明さ・活力が目立つ、友情・善良な喜び・忠誠心への無関心を表に現わす
太陽	知性・知識・理解力・壮麗さ・誇り・傲慢・荘厳・清潔・名声に対する貪欲・権力・闘争・賛辞への愛・人との交際・人への服従・怒りっぽい怒りが冷めやすいことが含まれる
金星	よい性格、壮麗、善良、情熱、貪欲、歌・娯楽・遊びの愛好、寛大、自由、兄弟仲のよさ、清潔、虚栄、高慢、自惚れ、喜び、上品な振る舞い、正義、神として崇めること、宗教に身を捧げること、肉体の強さ、精神の弱さ、子供・群衆への愛、誰に対しても心が穏やかなことが含まれる
水星	知性、賢明、優しさ、穏やかさ、威厳、同情、哀れみ、自制、優雅、深遠、移り気、保護、あらゆる事における傑出、楽しみに対する貪欲、秘密の隠匿、秘密に対する探求心、統率・評判・功績に対する貪欲、寛大、兄弟の権利を護ること、悪事を避けること、信仰が正しいこと、神への不誠実な服従、裏切り、華麗、悪意、臆病、恐怖、思考の混乱が含まれる
月	精神の健全さ、王たちとともにあれば王に、奴隷たちとともにあれば奴隷になるほど人々の性質に染まること、親切、忘れっぽい、雄弁、臆病、秘密を守らない、美と賞賛に貪欲、人々に喜びを感じる人が多い、人々に尊敬される、陽気、女性に対する野心が非常に多い、愛情を表に現わす、思慮と独り言が多い、知力がない

433 (430). 惑星の示す行動、性質、状態

惑星名	惑星に属する行動、性質、状態
土星	遠方への長い追放、極度の貧困、自分や他人に対する貪欲によって得た富、困難、辛苦、不運、心配、混乱、孤独の好み、不正や古くからのことによる隷属、詐欺行為、策略、泣くこと、悲しみ、孤児になること、嘆き
木星	人助け、人間関係の修復、人々に施し物を広めること、近づくすべての人に対する喜びを表わすこと、宗教への献身、公正な命令、嫌悪感を起こすものを禁じること、正夢、性行為が多い、笑い、冗談、雄弁、財産や収入を求める激しい欲望、自己欺瞞、慎重さに欠け向こうみず
火星	追放、旅、口論、戦い、逃亡、悪事、善良さに欠けること、健全な物を蝕むこと、嘘、中傷、偽りの誓い、不実で自由な結婚への激しい欲望、姦通・殺戮・強奪に対する欲望、暴動・逃亡・すべての突発事の扇動、孤独を好むこと、隣人の悪意、即答による計略、復讐の追求
太陽	支配や指導に貪欲、金や財産を集めることへの欲望、話し好き、来世への不安、不正を行うこと、危害を与え・利用し・蜂起させるために反逆者を制圧すること、近くにいる者を極度の誤りによって不当に扱い不幸にし、遠くの者を幸せにする、太陽が高揚にある時は王を指示し、失墜にある時は王が見放す人々を指示する
金星	勇敢、笑い、嘲笑、踊り、ぶどう酒と蜂蜜の愛好、チェスや双六で遊ぶこと、誓いと嘘が多い、あらゆる事を楽しむこと、それに対する欲望、放蕩、男女に対する反感、背後からとか擦りつけるというようなさまざまな仕方での性行為が多い、話し方が優雅、装飾品・香水・金銀の装飾品・衣服への愛好

水星	教養・神学・啓示・論理学を教えることが上手い、甘い言葉、雄弁、聡明、情報の暗唱者、激しい暴力、財産の損失、敵による被害・敵からの恐怖が多い、奉仕が乏しい、仕事が速い、男女の使用人を多く欲しがる、すべてのことにおける善意。悪口・泥棒・嘘・偽装を指示する
月	虚、中傷、身体の治療に対する配慮、生計を得る幸運、扶養する力、性行為が少ない、結婚が多い、物事すべてに対して適応するための機敏、陽気

434 (431). 惑星の示す病気

惑星名	惑星と関係のある病気と病気の状態
土星	衰弱、疫病、貧困、死、見えない箇所の病気、手足の痛み
木星	なし ⁵⁰⁾
火星	痩せていること、慢性病、熱、陣痛と中絶した胎児による妊婦の傷害、子宮の切開
太陽	熱
金星	なし
水星	なし
月	病気が多い

435 (432). 惑星の示す階層

惑星名	惑星の指示する階層
土星	地主、君主の執事、敬虔な信者、苦行者、働き過ぎの奴隷、下層民、迫害された者、宦官、泥棒、死くにかけている者、マズダク信者 (al-mazdakšūn)、魔術師、悪魔、悪鬼、中傷する者
木星	王、宰相、貴族、名士、裁判官、学者、礼拝者、法律、家、商人、金持ち、賞賛する者、誉める者
火星	指揮官、射手、兵士、戦士、集団から離脱する者
太陽	王、名士、指導者、指揮官、総支配人、裁判官、賢者、群衆
金星	貴族、金持ち、君主の妻、姦婦、姦夫、それらの子供
水星	商人、書記、官庁と地租の長官、闘士、奴隷
月	君主、貴族、高貴な自由民、妊婦、男の金持ち

436 (433). 惑星の示す信仰

惑星名	惑星の指示する信仰
土星	ユダヤ教、服装を黒くする
木星	キリスト教、服装を白くする
火星	偶像崇拜、酒を飲み服装を赤くする、(神のすべての属性を否定する観念) ⁵¹⁾
太陽	戴冠、(ゾロアスター教)
金星	イスラーム
水星	あらゆる信仰における法学者の対立、(無神論、二元説、信仰の探究、見解の相違、精神錯乱)
月	どの勝利者も受け入れる信仰、(マンダ教、ハッラーン人の信仰)

50) 「なし」という表現がなく、ただ空欄になっている写本もある。

51) 以下 () 内は、写本 PM にのみ見られる内容

437 (434). 惑星の示す図像

惑星名	惑星の図像
土星	右手に人の頭、左手に人の手を持ち、ジャッカルに乗る長老。棒で死者を追い立てている。別の図では、頭に兜をかぶって灰色の馬に乗り、左手に顔を覆う盾、右手に剣を持っている
木星	右手に抜いた剣、左手に旅に持参する弓と真珠を持つ若者。使役馬に乗っている。別の図では、粗末な椅子に座り、色とりどりの服を着て、左手に真珠を持つ男
火星	2頭のライオンに乗り、右手に抜いた剣、左手に戦闘用の斧を持った若者、別の図では、頭に兜をかぶって灰色の馬に乗り、左手に赤いぼろ布の付いた槍、右手に人の頭を持って、赤い服を着ている
太陽	右手に盾の形のような支えるための棒を持ち、四頭の牡牛が引く荷車に乗り、手には真珠を持つ男。別の図では、座っていて、顔は円のように丸く4頭の馬の手綱を持つ男
金星	ラクダに乗り、手の間につまびく弦楽器を持つ女。別の図では、座っていて、髪を垂らし、左手に髪の手、右手にそれを見るための鏡を持ち、服は緑色と黄色で、首飾り・鈴・腕輪・足首飾りを付けている女
水星	クジャクに乗り、右手に蛇、左手に読むための黒板を持つ若者。別の図では、椅子に座り、手には読むための本を持ち、頭には王冠をかぶり、緑色と黄色の服を着ている男
月	右手に槍、左手に300本もあるかのような30本の槍を持ち、頭には王冠のようなものがあり、4頭の馬が引く荷車に乗る人

438 (435). 惑星の示す職業

惑星名	惑星が指示する職業
土星	建築物、出費、農業、土地と水の活用とそれらの分配、皮を湿らせ、なめす仕事、物品や遺産の算定、墓掘り、粗悪な鉄・鉛・骨・髪から作ったものと黒人奴隷の販売、悪事につながる知識、悪事・制圧・怒り・束縛・足かせ・さらし台を伴う事
木星	清潔な仕事、良い統治、崇拜、善行、夢解釈、金細工、断片的な銀と金・白い衣服・果物・ブドウ・サトウキビの販売
火星	守衛の管理、武器の販売と製造、鉄工、乗る動物・羊の管理と屠殺と皮はぎ、獣医、外科学の研究、少年の割礼、犬との遊び、ヤマネコ・ブタ・大鎌・ビール・グラス・大型カバン・小箱の販売、泥棒、傲慢、発掘、追剥ぎ、タブーの侵害、墓荒らし、死人からの略奪、牢獄、拷問、殺人
太陽	奪取、贈り物、犠牲の動物の販売
金星	清潔で立派な仕事、市場とそこでの商売を好む、重さ、広さ、分量、絵、色、染色業、仕立て業、香水製造。真珠・金銀の装飾品・糸・白い服・ブドウ酒・王冠や飾り帯の数珠つなぎの真珠の販売、歌の伴奏、作曲、打楽器・弦楽器の演奏、賭博、遊び仲間
水星	商業、商取引、協力、忠誠の宣誓、測量、簿記、天体、予言、知識が向上するもの、天体の観測、土地の測量、哲学、論争、教育、詩、雄弁、知識、技術の熟練、手の繊細さ、すべてのことに完全を求めること、奴隷・革・本の販売、ディーナール金貨・ディルハム銀貨・ファルス銅貨に刻まれたものすべて、放血、櫛の仕事
月	情報と手紙の伝達、代理、経理、宗教の研究、すべてのことに関する能力、医学の探究、測量、天の学問、水と土地の鑑定、剃髪、食物・銀の指輪・おとめの奴隷の販売。逃亡者と魔術師を示す

439 (436). 惑星の前後の光の度数、 440 (437). 年

惑星名	前後の光	惑星の年 ⁵²⁾			
		最大	大	中	小
土星	9	265	57	43 1/2	30
木星	9	427	79	45 1/2	12
火星	8	284	66	40 1/2	15
太陽	15	1461	120	39 1/2	19
金星	7	1151	82	45	8
水星	7	461 ⁵³⁾	76	48	20
月	12	520	108	39 1/2	25

441 (438). 昼夜のファルダール、 442 (439). ファルダールの分担期間⁵⁴⁾

惑星のファルダール						
昼	夜	分担期間				
太陽 10	月 9	太陽のファルダール	1	5	4	7
		月のファルダール	1	3	12	21
金星 8	土星 11	金星のファルダール	1	1	21	10
		土星のファルダール	1	6	25	17
水星 13	木星 12	水星のファルダール	1	10	8	14
		木星のファルダール	1	8	17	3
月 9	火星 7	月のファルダール	1	3	12	21
		火星のファルダール	1	0	0	0
土星 11	太陽 10	土星のファルダール	1	6	25	17
		太陽のファルダール	1	5	4	7
木星 12	金星 8	木星のファルダール	1	8	17	3
		金星のファルダール	1	1	21	10
火星 7	水星 13	火星のファルダール	1	0	0	0
		水星のファルダール	1	10	8	14
昇交点 3	昇交点 3	昇交点も降交点も惑星とはファルダールを分担しない				
降交点 2	降交点 2					

これから宮における惑星の協調関係 (al-mušarakāt) と役 (al-ḥuzūz) について述べよう。

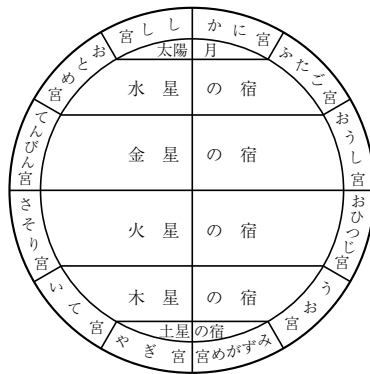
52) 惑星ごとに年数が割り当てられる伝統はギリシア以来であるが、それがどのような根拠に基づいているかについては説明がなされていない。しかし、いくつか説明のつくものもある。土星と木星の小年はそれぞれの公転周期に一致している。また太陽の小年はメトン周期 (19 太陽年 = 235 朔望月) を、同じく太陽の最大年はソティス周期 (1460 恒星年 = 1461 エジプト年) を連想させる。中年は大年と小年の和を半分にしたものである。なお、ギリシアの伝統では、中年の端数は切り捨てられ、土星、木星、火星はそれぞれ 43、45、40 年とされ、太陽は 69 年、月は 66 年とされている。太陽と月の中年がなぜアラビアで変更されたかは不明である。

53) アブー・マアシャル『占星術大序説』VII.8 では 480 年としている。

54) ファルダールについてはすでに 398 節で説明されている。人生を 75 年と考え、例えば昼に誕生した者であれば、最初の 10 年は太陽が支配し、さらにその期間を 7 惑星が順番に 1 年 5 月 4 日 7 時間ずつ支配することになる。この 7 惑星によって下位区分されたファルダールは、「ファルダールーヤ」とも呼ばれる。523 節参照。

443 (440). 惑星の宿 (buyūt) とは何か

天球は半球に分けられる。一方はしし宮の初めからやぎ宮の終わりまでで、太陽に属するとみなされる。太陽の宿はその最初、すなわちしし宮である。他方の半分は月に属し、みずがめ宮の初めからかに宮の終わりまでである。月の宿はその最後、すなわちかに宮である。その他の惑星には逆行と順行の運動があるので、両者(太陽と月)の宿の両側にある、太陽の半分にある宿と月の半分にある宿が、各惑星に属しているとみなされる。太陽から遠く離れていない惑星、すなわち水星から始め、おとめ宮とふたご宮がその宿だとみなされる。それは太陽と月の宿に隣接している。次に天球の下から上の順番に、各惑星とともに<宿が>後に続く。以下の図のように、てんびん宮とおうし宮が金星の宿、さそり宮とおひつじ宮が火星の宿、いて宮とうお宮が木星の宿、そしてやぎ宮とみずがめ宮が土星の宿となる。



444 (441). 2つの宿にある惑星の状態は等しいか

惑星の2つの宿の一方が、その惑星により適している。その結果、性質や男女の性が一致するために、惑星はその宿で「歓喜する」と言われる。太陽と月には性質が一致する宿はひとつしかない。その他の惑星について言えば、おとめ宮(冷・乾・女)はふたご宮(熱・湿・男)よりも水星(冷・乾・男女)に、おうし宮(冷・乾・女)は金星(冷・湿・女)に、おひつじ宮(熱・乾・男)は火星(熱・乾・男)に、いて宮(熱・乾・男)は木星(熱・湿・男)に、そしてみずがめ宮(熱・湿・男)は土星(冷・乾・男)により適している⁵⁵⁾。

この件に関してインド人は、ある点ではそれに近く、別の点では違っている。すなわち、おひつじ宮は火星に、おうし宮は月に、しし宮は太陽に、おとめ宮は水星に、てんびん宮は金星に、いて宮は木星に、そしてみずがめ宮は土星に、それぞれ他の宮よりも適している。彼らはそれをムーラトリコーナ (mūlatrikūn, mūlatrikōṇa) と呼ぶ。

惑星がそこにあることがその宿に付け加えられるシャハーダ (ṣahāda) である⁵⁶⁾。

445 (442). 害 (wabāl) とは何か

各宮は惑星の宿に対面しており、それがその宮の害であり、弱点 (du‘f) である。インド人は宿は知っているが、害を知らない。宿のために図を描いたように、害についても同じく図に描こう。

55) 宿と惑星との相性については、性の一致を最優先していることがわかる。

56) 「シャハーダ」とは、占星術上の影響力の序列を決定する際に考慮される「役」のことである。499節参照。

容易に思い描き記憶できるように。



446 (443). 惑星の昂揚 (aşraf) と失墜 (hubūt) とは何か

これらは、宮の惑星に対する関係が、権力の場所に対する君主の関係と同じであるような宮のことである。惑星はそこで顕著になり、昂揚する。昂揚はその宮の一定の度数と関係がある。

惑星の昂揚がその度数だけにあると考える星学者もいれば、昂揚の度数の前にある一定の度数が昂揚に属すると考える者もある。また、宮の初点から昂揚の度数までを昂揚と考える者もいれば、宮全体が昂揚であり、その度数が昂揚の極限だと考える者もある。以下が、ペルシア人とギリシア人による昂揚の宮と度数である。

惑星	土星	木星	火星
昂揚	てんびん宮 21°	かに宮 15°	やぎ宮 28°
惑星	太陽	金星	水星
昂揚	おひつじ宮 19°	うお宮 27°	おとめ宮 15°
惑星	月	昇交点	降交点
昂揚	おうし宮 3°	ふたご宮 3°	いて宮 3°

惑星の失墜は、昂揚に向かい合う宮の、すでに述べた度数と同じ所にある。惑星はそこでは威厳を失い、その状態は悪くなる。

447 (444). 昂揚に違いはあるか

宮については違いはない。しかし度数については、インド人は太陽の昂揚がおひつじ宮の10度、木星の昂揚がかに宮の5度、土星の昂揚がてんびん宮の20度にあることで一致しており、その他の宮については共通している。また彼らは、昂揚にある昇交点と降交点には言及していないが、それはもっともなことである⁵⁷⁾。

448 (445). 三角宮の支配星 (arbāb) とは何か

火の三角宮の支配星は、昼は太陽で夜は木星であり、両惑星の協力星 (sarik) は昼夜ともに土星である。土の三角宮の支配星は、昼は金星で夜は月であり、その協力星は昼夜ともに火星である。空気の三角宮の支配星は、昼は土星で夜は水星であり、その協力星は木星である。水の三角宮の支

57) 『ヤヴァナ・ジャータカ』 1.58-60, 『プリハッ・ジャータカ』 1.13。

配星は、昼は金星で夜は火星であり、その協力星は月である。

無批判な星学者 (ḥaṣwīyat al-munaḡḡimīn) は3惑星が同時に三角宮の支配星になると考え、<夜は>昼の順番を変えるだけである。すなわち、火の三角宮の支配星は昼は太陽、木星、土星で、夜は木星、太陽、土星である。その他についてはこれに準ずる。しかし、かつて彼らの書物はそれについての規則や推論で満ちていたのに、今は理解する際に<それらを>考慮していない。

449 (446). 宮における惑星の視座とはどのようなものか

2惑星が互に見つめ合う (mutanāzirān) 2つの宮にある時、それらもまた同じく見つめ合う。もし両惑星が同じ宮にあれば、両者は「集合」(muḡtami'ān) と呼ばれ、また同じ宮の同じ度数にあれば「会合」(muqtarinān) と呼ばれる。一方が他方から3番目<の宮>にあれば、両者は六分で見つめ合い、一方は右<の六分>であり、他方は左<の六分>である。一方が他方から4番目<の宮>にあれば、両者は矩で見つめ合っている。一方が他方から5番目<の宮>にあれば、両者は三分で見つめ合っている。そして一方が他方から7番目<の宮>にあれば、両者は衝で見つめ合っている。

両者の度数が等しければ、「その視座において結合する」(muttaṣilān fī dālika l-manẓar) と言われる。なぜなら、その時の天球は両者の間隔によって、正六角形、正方形、正三角形、あるいは半分に分割されるからである。

450 (447). 惑星の好意 (ṣadaqa) と敵意 ('adāwa) とは何か

われわれがここに述べることは、惑星が宿やその支配星と結合すること (ittiṣāl) に関係がある。これについて星学者たちはいくつかの見解を持っている。ある者は、土星と木星のように、根本と影響において正反対にある2惑星の間に敵意を考える。一方は暗く、悪く、過度であり、他方は明るく、良く、穏健である。またある者は、同時に2つの性質における対立を考え、火のものを水のものの敵、空気のを土のものの敵とみなしている。さらにある者は、惑星の宿と昂揚の位置からそれを考えている。惑星が宮位において互いに敵対する時 (377節参照)、<宿と昂揚の>支配星も敵対し、ある惑星の宿から12番目<の宮>に宿か昂揚を持つ>支配星をその敵と考えるのである。

好意については、敵意の理由についてわれわれが述べたこととは反対である。哲学者のアブー・アル＝カーシム (Abū al-Qāsim al-Falsafi)⁵⁸⁾ が用いているものは、それと似たものであり、この表の中にある。

惑星名	敵対する	害する	援助する	援助を求める
土星	太陽と月に	木星を	火星を	金星に
木星	火星と水星に	水星を	金星を	月に
火星	木星と金星に	月を	太陽を	土星に
太陽	土星に	金星を	水星を	火星に
金星	火星と水星に	火星を	土星を	木星に
水星	木星と金星に	金星を	水星の策略、ずるさ、悪意を利用するので、援助もしないし、援助を求めることもしない	
月	土星に	火星を	木星を	金星に

58) この人物について詳細は不明。

われわれの仲間が惑星における好意と敵意を用いることはめったにない。しかし、インド人にとってそれは重要なことであり、それらの効力は非常に大きいものである。彼らは、宿や昂揚に匹敵するものとしてそれらを用いるのである。したがって、それらに関する彼らの見解を述べる必要がある。それには彼らの諸原理に応じた一般的な規則があり、彼らの主張はこの表にある⁵⁹⁾。

惑星名	惑星の味方	惑星の敵	中庸にある惑星
土星	木星、火星、月	土星、金星	水星
木星	太陽、水星	月に敵意を示す惑星はない	土星、木星、火星、金星
火星	木星、太陽、月	水星	土星、金星
太陽	太陽、金星	月	土星、木星、火星
金星	火星、太陽、月	金星、水星	土星
水星	土星、水星	太陽、月	木星、火星
月	金星、水星	火星、太陽、月	木星

これは基本的な敵意と好意であり、時には変化する。各惑星は、ある惑星<がある家>から10番目、11番目、12番目、2番目、3番目、または4番目<の家>にあると、<それに対して>誠実であり、最も純粋な友情を示す。もしその惑星が中庸にある惑星であれば味方になり、敵<の惑星>であれば中庸になる。惑星がその他の家にあると、それは敵対し、敵意は激しくなる。もしそれが中庸にある惑星であれば敵対し、味方であれば中庸になる。

さて、宮のさまざまな部分と、惑星と宮の協調関係についてこれから述べよう。

第3章 宮の細分割

451 (448). ニームバフル (an-nīmbahr) とは何か

これは宮の半分であり、インド人はそれをホーラー (hūr, horā)、すなわち時間と呼ぶ。各男性宮の前半は太陽に属し、後半は月に属する。女性宮においてはその反対で、女性宮の前半は月に属し、後半は太陽に属する。この種のことにに関して、われわれの仲間はいまだそれ以外のものを発見し、それと異なるものを導き出そうとしている。しかし、両者の違いが光と闇ほどの違いになるまでは、それらを教える必要はない。

すでに述べたこととこれから述べることについては、彼ら以外の人々の教えを無視してそれを用いる人々にとっては一致したことである。

452 (449). 顔 (al-wuḡūh) とは何か

これは宮を3等分したものである⁶⁰⁾。その支配星は、ペルシア人とルーム人においては一致していて、おひつじ宮の最初の1/3の支配星は火星、2番目は太陽、そして3番目は金星である。天球が下る順に、最後の宮まで続く。

59) 『ブリハッ・ジャータカ』2.16。

60) ギリシア語でデカノス (δεκανός)、ラテン語でファキエースまたはデカヌス (facies, decanus) と呼ばれるもの。プトレマイオスは『テトラビブロス』第1巻第23章で「顔」(πρόσωπον) に言及しているが、それはデカノスのことではない。

453 (450). 図像 (šumar) とは何か

これはまさに「顔」である。それが「図像」と呼ばれるのは、ルーム人、インド人、バビロン人がそれぞれ、顔と共に昇る図像を考えたからである。ルーム人について言えば、彼らは恒星の中に想定した48星座を考えた。残りの2つの民族について言えば、彼らは功績、野心、目的に基づいて、それらの地域の特徴を示し、判断を見いだす場合に必要となるような図像を考えた。話が長くなり、またわれわれの手にある星学書 (al-kutub an-nuğūmiya) は、それを使うための方法に触れていないので、それについて述べることはしない。

454 (451). ダリージャー (darījān) とは何か

これはインド人における宮の3分の1である。彼らはそれを「ドレーカーナ」(darīkān, *drekāna*) と呼ぶ。彼らによるそれらの支配星は<前述の顔のそれとは>異なっている。各宮の最初のダリージャー⁶¹⁾は、その宮の支配星⁶²⁾に、2番目はその宮から5番目<の宮>の支配星に、そして3番目はその宮から9番目<の宮>の支配星に属している⁶³⁾。以下の表に顔とダリージャーの支配星がある。

宮名	顔の支配星			ダリージャーの支配星		
おひつじ宮	火星 10°	太陽 20°	金星 30°	火星 10°	太陽 20°	木星 30°
おうし宮	水星 10°	月 20°	土星 30°	金星 10°	水星 20°	土星 30°
ふたご宮	木星 10°	火星 20°	太陽 30°	水星 10°	金星 20°	土星 30°
かに宮	金星 10°	水星 20°	月 30°	月 10°	火星 20°	木星 30°
しし宮	土星 10°	木星 20°	火星 30°	太陽 10°	木星 20°	火星 30°
おとめ宮	太陽 10°	金星 20°	水星 30°	水星 10°	土星 20°	金星 30°
てんびん宮	月 10°	土星 20°	木星 30°	金星 10°	土星 20°	水星 30°
さそり宮	火星 10°	太陽 20°	金星 30°	火星 10°	木星 20°	月 30°
いて宮	水星 10°	月 20°	土星 30°	木星 10°	火星 20°	太陽 30°
やぎ宮	木星 10°	火星 20°	太陽 30°	土星 10°	金星 20°	水星 30°
みずがめ宮	金星 10°	水星 20°	月 30°	土星 10°	水星 20°	金星 30°
うお宮	土星 10°	木星 20°	火星 30°	木星 10°	月 20°	火星 30°

455 (452). プトレマイオスは宮の3分の1を用いたか

彼に見られるのは、空気の変化について宮に関する経験と事例に基づいた、宮全体、経度上の宮の各3分の1、そして緯度の南北両側に属する指示である。空気やそれがもたらすものの性質を示す惑星の指示が知られ、気象現象が見られる朔と望の時の惑星の位置が経度と緯度でわかれば、惑星と恒星の混合からもたらされる指示が十分に知られる。以下の表に、プトレマイオスが顔について述べたことが見られる⁶⁴⁾。

61) この用語はペルシア語の *darēgān*、さらにはパフラヴィー語の *dahīg* に由来するギリシア語のデカーノスの翻訳借用である。サンスクリットの *drekāna* も同じギリシア語から派生している。

62) 宮の支配星とは、その宮を宿とする惑星のこと。

63) 『プリハッ・ジャータカ』1.11。

64) プトレマイオスの『恒星の諸相』(*Φάσεις ἀστειῶν ἀστέρον*) という著作には気象現象についての記述があるが、それがここで言及されている文献かどうかは不明。なおこの著作のギリシア語版は第1巻が失われ、第2巻のみが存在しており、アラビア語版は断片しか残っていない。

宮	宮全体の指示	北	南
おひつじ宮	雷、あられを伴う雨を生む	熱い、湿っている、腐敗している	水を生む、冷たい
おうし宮	同時に2つの性質を示す、熱さの傾向がある	性質が温和	秩序のない混乱を生む
ふたご宮	温和な性質を起こす	風と地震を生む	火のように燃えている
かに宮	よい状態を起こす、熱い	火のように燃えている	火のように燃えている
しし宮	熱さと熱く淀んだ空気を生む	火のように燃えている	湿っている
おとめ宮	湿っている、雷を生む	風を生む	性質が温和
てんびん宮	変わりやすい、変化する	風を生む	湿っている、伝染病を生む
さそり宮	雷を生む、火のよう	燃えている	湿っている
いて宮	風を生む	風を生む	非常に湿っている、変化しやすい
やぎ宮	非常に湿っている	非常に湿っている、腐敗している	非常に湿っている、腐敗している
みずがめ宮	冷たく水のように	燃えている	吹雪を生む
うお宮	冷たい、風を生む	風を生む	水のように

宮	宮の最初	宮の中央	宮の最後
おひつじ宮	雨と風を生む、震える	性質が温和	燃えている、伝染病とはしかを生む
おうし宮	地震、風、霧を生む	湿って、冷たい	火のよう、稲妻と落雷を生む
ふたご宮	多く湿らせる、腐敗している	性質が温和	性質が混合される、混乱している
かに宮	熱く淀んだ空気・地震・暗闇を起こす	性質が温和	風を生む
しし宮	熱く淀んだ空気と伝染病を生む	性質が温和	湿って、腐敗を起こす
おとめ宮	暑さが激しい、腐敗している	性質が温和	水のように
てんびん宮	良い性質	性質が温和	水のように
さそり宮	吹雪を生む	性質が温和	地震を起こす
いて宮	湿っている	性質が温和	火のよう
やぎ宮	腐敗を生む	性質が温和	雨を降らす
みずがめ宮	非常に湿っている	性質が温和	風を生む
うお宮	性質が温和	非常に湿っている	燃えている

456 (453). 区界 (al-ḥudūd) とは何か

これは宮における不等区分であり、それぞれが惑星に関係づけられている。これはペルシア語では「マルズ」(marz, 領域)と呼ばれ、人々によってさまざまである。それらには、カルデア人、すなわち古代バビロン人、アスタラートゥー (Astarātū)⁶⁵⁾、そしてインド人のジュナフ (Ġunah)⁶⁶⁾

65) アブー・マアシャル『占星術大序説』第5部第12章にアスタラートゥーの区界が述べられている。この人物は『テトラビプロス』では言及されていないので、ビールーニーはアブー・マアシャルのこの著作を典拠にしたと思われる。

66) ビールーニーの『過去の痕跡』によれば、ホスロー2世 (590-628年)の時代の星学者。

にそれぞれ関係づけられたものがある。これらすべてが占星術で用いられるわけではなく、占星術に携わる人々がそれらに熱心なわけでもない。しかし彼らはエジプト人の区界については一致して、それ以外のものを認めていない。プトレマイオスの著作を解説する者は、プトレマイオスがある古書の中に見つけ、『テトラビプロス』(*al-Arba' maqālāt*)として知られる彼の著作に書いたと述べている区界を用いた⁶⁷⁾。われわれはエジプト人の区界とプトレマイオスの区界をそれぞれ紹介しよう。それ以外のものを長々と論じても得るものがないからである。

宮	エジプト人による区界の支配星					プトレマイオスによる区界の支配星				
おひつじ宮	木星 6	金星 12	水星 20	火星 25	土星 30	木星 6	金星 14	水星 21	火星 26	土星 30
おうし宮	金星 8	水星 14	木星 22	土星 27	火星 30	金星 8	水星 15	木星 22	土星 26	火星 30
ふたご宮	水星 6	木星 12	金星 17	火星 24	土星 30	水星 7	木星 13	金星 20	火星 26	土星 30
かに宮	火星 7	金星 13	水星 19	木星 26	土星 30	火星 6	木星 13	水星 20	金星 27	土星 30
しし宮	木星 6	金星 11	土星 18	水星 24	火星 30	土星 6	水星 13	金星 19	木星 25	火星 30
おとめ宮	水星 7	金星 17	木星 21	火星 28	土星 30	水星 7	金星 13	木星 18	土星 24	火星 30
てんびん宮	土星 6	水星 14	木星 21	金星 28	火星 30	土星 6	金星 11	木星 19	水星 24	火星 30
さそり宮	火星 7	金星 11	水星 19	木星 24	土星 30	火星 6	木星 13	金星 21	水星 27	土星 30
いて宮	木星 12	金星 17	水星 21	土星 26	火星 30	木星 8	金星 14	水星 19	土星 25	火星 30
やぎ宮	水星 7	木星 14	金星 22	土星 26	火星 30	金星 6	水星 12	木星 19	火星 25	土星 30
みずがめ宮	水星 7	金星 13	木星 20	火星 25	土星 30	土星 6	水星 12	金星 20	木星 25	火星 30
うお宮	金星 12	木星 16	水星 19	火星 28	土星 30	金星 8	木星 14	水星 20	火星 26	土星 30

457 (454). インド人はどのような区界を用いるか

彼らは、男性宮すべてに対してはひとつの一致した数値を用い、また女性宮すべてに対しては数値と支配星の順番を反対にしている。彼らはそれを「トリンシャ・アンシャ」(*turī śānṣ, trimsāṁśa*)、すなわち30分の1と呼ぶ。それは等分割ではないので、宮の度数を数える必要がある。彼らについて述べたことが、以下の表にある。

男性宮 の範囲	5	5	8	7	5	女性宮 の範囲
	火星	土星	木星	水星	金星	

67) 『テトラビプロス』第1巻第21章には「……最近、大部分が損なわれている古写本がたまたま手に入った。これは、説明が自然であり、区界の順番と量について一貫して……」とある。

458 (455). ヌフバフル (an-nuhbahr) とは何か

これは宮の9分の1であり、インド人はそれを「ナヴァ・アンシャカ」(nawānuṣak, navāṃśaka)と呼ぶ。彼らによれば、その力は非常に大きく、その結果、その場所における惑星の力が宿の力に匹敵する時、「ヴァルゴッタマ」(barkūttam, vargottama)、すなわち最大の役と呼ばれる。われわれは表の中に、宮ごとに宮の9分の1を記した。ヌフバフルの支配星はその宮の支配星であり、ヴァルゴッタマである。最初の9分の1は転換宮に、5番目<の9分の1>は固定宮に、そして9番目<の9分の1>は二体宮に属している。これはインド人の一致した見解であるが、われわれの間は支配星の順番を変え、天球の順番にした。達人自身が会得するまで、それを<用いることを>避けるのが適切だろう。

ヌフバフル		おひつじ宮 しし宮	おうし宮 おとめ宮	ふたご宮 てんびん宮	かに宮 さそり宮
度	分	いて宮	やぎ宮	みずがめ宮	うお宮
3	20	おひつじ宮 火星	やぎ宮 土星	てんびん宮 金星	かに宮 月
6	40	おうし宮 金星	みずがめ宮 土星	さそり宮 火星	しし宮 太陽
10	0	ふたご宮 水星	うお宮 木星	いて宮 木星	おとめ宮 水星
13	20	かに宮 月	おひつじ宮 火星	やぎ宮 土星	てんびん宮 金星
16	40	しし宮 太陽	おうし宮 金星	みずがめ宮 土星	さそり宮 火星
20	0	おとめ宮 水星	ふたご宮 水星	うお宮 木星	いて宮 木星
23	20	てんびん宮 金星	かに宮 月	おひつじ宮 火星	やぎ宮 土星
26	40	さそり宮 火星	しし宮 太陽	おうし宮 金星	みずがめ宮 土星
30	0	いて宮 木星	おとめ宮 水星	ふたご宮 水星	うお宮 木星

459 (456). 12分の1 (itnā ‘ašriyat) とは何か

これは宮の12等分の1であり、各区分に支配星がある。各宮において、12分の1の最初はその宮の支配星⁶⁸⁾から始まり、それが最初の12分の1の支配星となる。その後、2番目<の12分の1>は<最初の宮から>2番目<の宮>の支配星に、そして3番目<の12分の1>は3番目<の宮>の支配星に属し、このようにして最後の宮まで続く。掛けることは割ることよりも易しく、また時として、惑星ごとに2度1/2ずつ引くことは困難である。特に、1/2の端数を扱う場合はそうである。人々によれば、この作業を容易にするために、宮の初めから求めるべき度までの度数に12を掛け、求めるべき度数のある宮から宮の順番に、各宮につき30度をその合計から引く。そして30度に満たない宮の支配星が、その度数にある12分の1の支配星である⁶⁹⁾。これはルーム人とインド人が一致していることである。

68) ここでの宮の支配星とは、宮を宿とする惑星のことである。

69) 例えば、しし宮18度における「12分の1の支配星」を求めるとすれば、 $18 \times 12 = 216$ 。216度は、しし宮30度+おとめ宮30度+てんびん宮30度+さそり宮30度+いて宮30度+やぎ宮30度+みずがめ宮30度+うお宮6度。30度に満たないうお宮の支配星は木星なので、しし宮18度の12分の1の支配星は木星ということになる。

驚くべきことに、われわれの仲間は、＜その体系を＞変えることなく、天球の順番などから＜支配星を＞決定した。彼らはそのことについて救われたとしても、別の不名誉なことからは逃れられなかった。ここはそれについて述べる場所ではない。この表に、宮の12分の1の支配星がある。

おひつじ宮	おうし宮	ふたご宮	かに宮	しし宮	おとめ宮	てんびん宮	さそり宮	いて宮	やぎ宮	みずがめ宮	うお宮	12分の1の支配星
1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	火星
2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	金星
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	水星
4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	月
5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	太陽
6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	水星
7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	金星
8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	火星
9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	木星
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	土星
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	土星
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	木星

460 (457). 男性の度数と女性の度数とは何か

これについては多くの相違が見られ、人それぞれの方法はその権威者 (ṣāhib) から大いにかげ離れている。すべては、証明、何らかの類推、または満足のいく体系に欠けていて、それを修正するにも、由来と全体像について明らかになっていない。それを考えた者はなんと哀れであったことか。しかし人々は、宮から男女を判断するように、度数によって＜男女を＞判断している。

中でもそれらに何らかの体系を与えた者は、度数そのものに宮の性をあてはめた。すなわち、各男性宮の＜最初の＞度数を男性、＜2番目の＞度数を女性として、最後まで続ける。また各女性宮の最初の度数を女性、2番目＜の度数＞を男性として、最後まで続ける。またある者は、度数を1度ずつ分けるのではなく、各宮の男女＜の数＞が天球全体の宮にある男女の数（男女6つずつ）になるように、男女を12分の1の区分にあてはめた。すなわち、各男性宮の2と1/2度を男性、次の2と1/2度を女性とし、最後までこのように考え、また各女性宮の2と1/2度を女性、次にそれと同じだけを男性とし、最後までこのように考えたのである。古代人の中には、各男性宮の12と1/2度を男性、次にそれと同じだけを女性、次に2と1/2度を男性、そしてそれと同じだけを女性と考えた者がいた。彼は、女性宮ではそれとは反対に考えた。すなわち、各女性宮では12と1/2度を女性、次に同じだけを男性、そして2と1/2度を女性、残りを男性としたのである。

体系がないものについては表にする必要がある。それがこれである。

宮	男性の度数は黒で、女性の 度数は赤で書いたもの ⁷⁰⁾						
	7	2	6	7	8		
おひつじ宮	7	2	6	7	8		
おうし宮	7	8	15				
ふたご宮	6	11	6	4	3		
かに宮	2	5	3	2	11	4	3
しし宮	5	2	6	10	7		
おとめ宮	7	5	8	10			
てんびん宮	5	5	11	7	2		
さそり宮	4	6	4	5	8	3	
いて宮	2	3	7	12	6		
やぎ宮	11	8	11				
みずがめ宮	5	7	6	7	5		
うお宮	10	10	3	5	2		

461 (458). 明るい (mudr'a) 度数と暗い (muzlima) 度数とは何か

これもまた規則的ではなく、表にする必要がある。これは、色の知識、美しさと醜さ、強さと弱さ、そして喜び・安らぎと困難・苦悩に関して用いられる。これはさまざまな写本に見られるが、それを校訂する手立てがない。時として、「光明」(mudr'a) は「光輝」(nayyira)、それ以外のは「暗闇」(qutma)、「薄暗」(mutadahhina)、「陰影」(dawāt zill)、そして「虚」(fāriga) は「空」(hāliya) と呼ばれる。

宮	明暗のある度						
	暗闇 3	暗黒 5	暗闇 8	光輝 4	暗黒 4	光輝 5	暗黒 1
おひつじ宮	暗闇 3	暗黒 5	暗闇 8	光輝 4	暗黒 4	光輝 5	暗黒 1
おうし宮	暗闇 3	光明 7	空 2	光輝 8	空 5	光輝 3	暗闇 2
ふたご宮	空 5	光輝 2	暗闇 3	光輝 5	空 2	光輝 6	暗闇 7
かに宮	暗闇 7	光輝 5	暗闇 2	光明 4	暗黒 2	光輝 8	暗黒 2
しし宮	光輝 9	暗闇 5	暗黒 6	空 3	光輝 7		
おとめ宮	暗闇 5	光明 4	空 2	光輝 6	暗黒 4	光輝 7	空 2
てんびん宮	光輝 5	暗闇 5	光輝 8	暗闇 3	光輝 7	空 2	
さそり宮	暗闇 3	光明 5	虚 6	光明 6	暗黒 2	光明 5	暗闇 3
いて宮	光輝 9	暗闇 3	光輝 7	暗黒 4	暗闇 7		
やぎ宮	暗闇 7	光輝 3	暗黒 5	光輝 4	暗闇 2	無 4	光輝 5
みずがめ宮	暗黒 4	光輝 5	暗闇 4	光輝 8	空 4	光明 5	
うお宮	暗闇 6	光輝 4	空 8	光明 8	暗闇 4		

462 (459). 幸運が増大する度数と井戸 (ābar) とは何か

幸運が増大する度数について言えば、光輝星 (an-nayyirān, 太陽と月) のうち交替主星 (389 節参照)、上昇点の度数、または幸運箭 (sahm as-sa'āda)⁷¹⁾ がそこにおいて一致する時が、そのような (幸運が増大する) 時である。

70) 写本における赤字はゴシック体で表記する。

71) 478 節参照。

井戸 (bi'r, 複数形 ābār) について言えば、惑星はその度数にあると活動が弱まる。吉星は幸運にすることができなくなり、また凶星は不運にすることができなくなり、そのためのよい状態を示すことになる。その2つの種類はこの表にある。

宮	幸運な度数は黒、井戸は赤で書かれている ⁷²⁾					
おひつじ宮	幸運な度数 井戸	19 6	11	17	23	29
おうし宮	幸運な度数 井戸	8 5	13	18	24	25 26
ふたご宮	幸運な度数 井戸	11 2	13	17	26	30
かに宮	幸運な度数 井戸	1 12	2 17	3 23	14 26	15 30
しし宮	幸運な度数 井戸	5 6	7 13	17 15	22	23 28
おとめ宮	幸運な度数 井戸	2 8	12 13	20 16	21	25
てんびん宮	幸運な度数 井戸	3 1	5 7	22 20	30	
さそり宮	幸運な度数 井戸	12 9	20 10	17	22	23 27
いて宮	幸運な度数 井戸	13 7	20 12	23 15	24	27 30
やぎ宮	幸運な度数 井戸	12 2	13 7	14 17	20 22	24 28
みずがめ宮	幸運な度数 井戸	7 1	16 12	17 17	20 23	29
うお宮	幸運な度数 井戸	12 4	20 9	24	27	28

463 (460). 目の障害を示す場所とは何か

この指示の気配がてんびん宮とさそり宮にあると言われていたが、これは、宮そのものではなく、雲状の星 (kawāḳib saḥābiya) と、例の動物を表し害をもたらす星座の一部である。

実際に雲状の星は4つあり、その最初はバルセウス座 (ḥāmil ra's al-ḡūl) の手にあるもの (869, 884 Per) である。これは緯度が大きく、惑星の軌道から離れているために、<目の障害を示す>この仲間には含まれない。2番目はかに座の胸にある、2匹のロバのかいば桶 (2632 Cnc) であり⁷³⁾、この仲間に含まれる。3番目はさそり座の外側にある、針の後に続くもの (6441 Sco) である。これは「アンワーの書」(166節参照) では「さそりの毒針」(ḥumat al-'aqrab) と呼ばれることもあり、この仲間に含まれる。4番目はいて座の目にあるもの (v¹, v² Sag) で、この仲間に含まれる。

恒星のうち小さな星が集まると、それらはオリオン座の頭にあるハクア (164節参照) のように雲に似たものになる。ハクアはブトレマイオスが全体でひとつの雲状の星と呼んだ3つの星であり、その緯度が大きいためにこの仲間には含まれない。スライヤー (164節参照) もハクアと同じであるが、その緯度が小さいためにこの仲間に含まれる。緯度が小さいものについては、月がそこ

72) 多くの写本 (BHDTS 以外) が黒字部分と赤字部分を2段に分けて表記しており、ここではそれらに従う。

73) 「2匹のロバのかいば桶」は、ギリシア神話に基づく表現である。

を通過し、太陽がそれに近づく。その両者は両目とそれに関する働きを示すものでなのある。

動物の星座にある害の場所について言えば、それは、針 (aš-šawla) のようなさそり座の大針 (mi'bar)、いて座の矢のようなもの、そしてその尾が魚の尾に似ていることのためにやぎ座の刺である。また、しし座の後部、さそり座の両目の間、そしてみずがめ座の水口がこの仲間に含まれていた。

しし座の後部について言えば、しし座の尾とおおぐま座の間にあるお下げ髪 (aq-dafira, 7, 15, 23 Com)⁷⁴⁾ 以外に、そこに雲状のものを私は知らない。それは、ツタの葉の形になる、雲状のもののように集まった暗い小さな星であり、「フルバ」(al-hulba, 髪) と呼ばれる。しかしその北緯は、ハクアの南緯の2倍ある⁷⁵⁾。ししの攻撃はその後部ではなく犬歯や爪で行われるのだから、しし座の後部にある星が図像の上ではなく性質上そのことを示すのでなければ、私はそれがこの仲間に含まれるとは思わない。

さそり座の両目の間にあるものについて言えば、その星座の王冠 (β, δ, π Sco, 164 節参照) から心臓 (α Sco) までの星が、散りばめられた輝く星である。

水口について言えば、それは密集した小さな4つの星 (γ, π, ζ, η Aqr) で、流れ始めた後の最初の水の曲がりにある。人々はそれを「みずがめの瓶」(garrat ad-dalw) と呼ぶが、瓶には星はない。しかし、ペルセウス座の剣に星がなくても、他方の手にある切り取られた首を切るための手が必要なことから、ペルセウス座の剣のように、瓶は注がれる水に必要な物なのである。

古代人が彼らの時代にこれらの星の位置を記録してから、600年以上が経過した。そこでわれわれは、今の時代、すなわちアレクサンドロス暦1340年(西暦1029年)におけるそれらの位置を以下の表にした。もしこの時以後の位置を知りたいければ、66年につき1度、そして1年につき約1分をこの表にあるものに加えよ。

特に目に害を及ぼす星	始まり			終わり		
	宮	度	分	宮	度	分
スライヤー	おうし宮	15	50	おうし宮	17	20
かいば桶	かに宮	24	0	かに宮	24	0
しし座の後部	おとめ宮	6	0	おとめ宮	7	0
さそり座の両目の間	さそり宮	15	0	さそり宮	19	0
さそり座の大針	いて宮	10	40	いて宮	11	10
さそり座の毒針	いて宮	14	50	いて宮	14	50
いて座の矢	いて宮	18	10	いて宮	18	10
やぎ座の刺	みずがめ宮	10	0	みずがめ宮	12	0
みずがめ座の水口	うお宮	3	0	うお宮	4	0

第4章 家

地平線に応じて宮に起る諸状態をこれから述べよう。そのうち家の<分割>方法についてはすでに述べた(343節)。宮や惑星の諸状態を見つけ理解しやすくするために、それらの状態を種類別

74) 「お下げ髪」は現在のかみのけ座にあたる。かみのけ座はいわゆるギリシア星座には含まれていないが、「ベレニケのかみのけ」として古くから言及されている。

75) 『アルマゲスト』によれば、「ツタの葉の形」を成す星群は北緯25度から30度にあり、「オリオンの頭」にある星は南緯13度30分にある。

の表にしたと同じようにすることが、最も適切であろう。崇高なる神がお望みになれば。

464 (461). 出生者を特徴づける家の指示

家	出生者を特徴づける家の指示
I	精神、生活、寿命、教育、誕生地
II	保育、養育、凶星があれば視力の障害、生計、財産、収入源、助手、子供の仕事
III	兄弟、姉妹、親戚、女婿、養母、乳母、友人、移住、近くへの旅、夢、知性、宗教に対する理解
IV	父親、祖父、子孫、不動産、地所、家、水、出自、家系、死後の事、死者が残すもの
V	子供、友人、衣服、幸福、喜び、少ない所得、父親の貯え、生まれ代わり
VI	病気、欠点、凶星があれば足の慢性病、財産の浪費、身体内部、奴隷、女奴隷、乗るための動物
VII	女性、妾、嫁に出すこと、結婚、敵対者、死と戦う者、協力、従者、戦い、口論
VIII	死、死因、殺人、毒、薬による身体の不調、遺産、女性の財産、出費、貧困、赤貧、見せかけの死
IX	旅、不在、宗教、崇拜、魔術師、判決、占星術による予知、予言、哲学すること、測量、洞察の正しさ、誓い、幻と夢の解釈
X	仕事、権力、指導力、高い評判、名声、命令、禁止令、物事の誇張、母親、継母、成長、弱さ、商売、技術、子供、賞賛される者
XI	希望、幸福、敵の敵、来世の事柄、賞賛、賛辞、女性の愛、熱情、衣服、香料、装飾品、商売、建物、友人
XII	敵、不幸、悲しみ、牢獄、負債、賠償金、保釈金、精神錯乱、災難、病気、出産の前に母親が経験すること、乗るための動物、家畜、奴隷、召使、兵士、流刑、飢餓、策略

465 (462). 質問占星術 (al-masā'il) やその他につながる家の指示

家	質問占星術その他につながる家の指示
I	質問者、始まり、知覚できる物、高い地位、地位の向上、魔術、呪文
II	質問者の評価、取ることと与えること、友人を信じること、不在者の帰還、友人の敵、支配者の書物、風がいつ吹くか
III	秘密、知らせ、崇拜の家、高貴な女性
IV	古くて隠された物、財宝、盗みの場所、若者が学ぶ場所、城塞、幽閉、束縛、孤立、腫れた器官、切開、焼灼、義父
V	知らせ、伝達者、贈り物、賄賂、遺産、遠い場所、所有地の穀物、過去の財産の管理、宣教、食物、飲み物
VI	ずっと探し続けている物、逃亡者、求められることのない失したつまらない物、女性問題、宦官、貪欲、羨望、中傷、不正、不道德、嫉妬、欺瞞、恐怖、牢獄、敵、移住、貧者、中途半端な治療
VII	不在者、泥棒、旅人の目的、財宝、腐る物、同輩の死、移住、迅速な殺人、否認、反抗、軽蔑、廉価、高価
VIII	求められる支持者、その人の財産、埋め隠された物、消滅したかはぐれたか古いすべての物、堆肥の山、ごみ、友人の病気、正義なき戦い、愚かさ、口論、軽率、市場の不振、余暇
IX	消失、過ぎ去った物、書物、知らせ、伝達者、驚異的な事、義兄弟、タリーカ
X	君主、名士、裁判官、特別なことや一般的なことにおける著名人、支配者、その人の行い、新たに公認された事、飲み物、継母
XI	スルタンの宝庫、その人の支持者、仕事で得る物、解任の後に来る支配者、不在者、奴隷の子供、健全で美しく有益な物、再開する事、大物の友情、賄賂、敵意
XII	逃亡者、下層民、敬虔な行いを諱める者、孤独な人、囚人、質問に先立つ事、暴君の財産、泥棒、乞食、財産を奪う者、不名誉、卑劣、軽視、悪意、狡猾

466 (463). 家の示す歳、 467 (464). 家に関するインド人の考え、 468 (465). 身体、 469 (466). 身体に関するインドの考え、 470 (467). 序列

家	家が指示する歳	家に関するインド人の考え	家が指示する身体	身体に関するインドの考え	家の力の序列
I	青年、少年	精神	頭	頭	12
II	少年の残り	財産	首	顔	3
III		兄弟	両肩と両手	両上腕	5
IV	老年、死の時	父親、母親、よい家、友人	胸、肋骨、両脇	心臓	7
V		子供、知性	心臓	腹	8
VI		敵、乗る動物	腹	横腹	1
VII	歯が生え揃う<時>	妻	腰、尻	へその下	9
VIII		死	性器	性器	4
IX	壮年の初め	旅、信仰における報酬	両太腿	両太腿	6
X	壮年の中間	仕事	両膝	両膝	11
XI	壮年の最後	収入	両脚	両脚	10
XII		支出	両足	両足	2

471 (468). 家の示す色、 472 (469). 惑星の歓喜、 473 (470). 惑星の力の出現、 474 (471). インドの方法、 475 (472). 男女

家	家の色	家における惑星の歓喜	家における惑星の力の出現	家が指示するインドの方法	男女
I	少し灰色	水星	共通	水星または木星	男性
II	緑	歓喜がない	木星	Iに続く	女性
III	黄	月	火星	IVに続く	男性
IV	赤	歓喜がない	月	金星または月	女性
V	白	金星	共通	IVに続く	男性
VI	黒	火星	共通	VIIに続く	女性
VII	薄暗い日没の色	歓喜がない	金星	土星	男性
VIII	黒	歓喜がない	土星	VIIに続く	女性
IX	白	太陽	水星	Xに続く	男性
X	赤	歓喜がない	太陽	太陽または火星	女性
XI	黄	木星	共通	Xに続く	男性
XII	緑	土星	共通	Iに続く	女性

476 (473).

家	I, II, III	IV, V, VI	VII, VIII, IX	X, XI, XII
右と左	左	右	左	右
肉体と精神	肉体と精神、光の中に現れるまで暗い場所にあるので精神のない肉体とも言われる	精神のない肉体、光と暗闇の間にあるので肉体と精神とも言われる	死と旅の間なので精神も肉体もない	肉体のない精神、それは昇る速さのためである
色	赤	黒	緑	白
遅速	中庸	遅い	中庸	遅い
幸運と不運	不運	幸運	不運	不運
方角	北	西	南	東
男と女	女	男	女	男
性質	寒、乾	寒、湿	熱、湿	熱、乾
インド人による <半円の名称>	すなわち弧 (al-qaws)	ダハナ (dahan, dahana, 火) すなわち弧	ダハナ	
半円の名称	前進の半円	下降の半円、後退の半円	上昇の半円	
インド人による <別の半円の名称>	チャットラ (gatar, chattra)、 すなわち傘		ナウ (nāwah, nau)、すなわち舟	
<別の>半円の名称	地上、惑星の昼、左と長さに関するがある		地下、惑星の夜、右と長さに関するがある	

477 (474). 2つの宮が共有する家の状態はどのようなものか

もし両者の度数が近ければ、両者の間で混合する必要がある。もし両者が宮位をなしていれば、両者の支配星がともに採用される。一方が落位にあれば、宮位をなす方<の支配星>が、また両者がともに落位にあれば、役と証言において多い方<の支配星>が採用される。また、優位にある宮 (al-galaba) はその家における宮の度数がより多い方だとみなされる。

第5章 簡

478 (475). 幸運箭 (sahm as-sa'ada) とは何か

これは、太陽から月までの宮の順方向の距離に等しい距離だけ、上昇点から宮の順方向に離れた天球上の位置である。これを知るには、まず第1の場所に太陽の補正值 (muqawwam, 補正後の真位置) を、第2の場所に月の補正值を、そして第3の場所に上昇点の値を書く。次に、第1の場所にあるものを第2の場所から引く。まず宮から始め、<一方の>宮から<他方の>宮を引く。もし第1の場所の宮の方が大きければ、第2の場所の宮に12を加える。次に、第1の宮をそれから引いて、第1の度を第2の度から引く。もしそれができなければ、第2の宮から1宮を引き、その度に30を加える。次に、第1の度をそれから引く。さらに第1の分を第2の分から引く。もしそれができなければ、第2の度から1度を引き、その分に60を加える。それから第1の分をそれから引く。それを終えたら、第1の場所を消す。それはもう必要なくなったからである。第2の場所に生じたものは、太陽から月までの距離である。第3の場所の宮と度と分にその宮と度と分を加える。そして第2の場所を消す。次に、もし分が59より大きければ、それから60を引き、その代わり1を度に加える。もし度が29より大きければ、それから30を引き、その代わりに1を宮に加える。もし宮が11より大きければ、それから12を引く。第3の場所に残ったものが幸運箭である。

上昇点がおとめ宮の8度20分、太陽がかに宮の27度44分、月がおうし宮の15度25分を例にして、前述のようにそれらをここに記した。

第1の場所の太陽	第2の場所の月	第3の場所の上昇点
3	1	5
27	15	8
44	25	20

月の宮から太陽の宮を引きたくても、引くものが引かれるものより大きい時はそれができない。そこで13になるように月の宮に12を加え、それから3を引く。また月の度から太陽の度を引きたくても、この例ではそれができない。そこでその上にある月の宮から1宮を取り、その度に30を加える。するとそれは45になる。次にそれから27を引く。この例では、月の分から太陽の分を引くことができない。そこでその度から1度を取り、その分に60を加える。その結果それは85になる。次にそれから44を引く。最初の場所を消すと、残りの2つの場所は次のようになる。

2番目	3番目
9	5
17	8
41	20

2番目の場所にあるものを3番目の場所に加えたので、まず宮に宮を加えると14になり、度に度を加えると25になり、そして分に分を加えると61になる。そこで2番目の場所を消す。分が59より大きいのでそれから60を引き、度に1度を加える。度は29を越えていないのでそのままにしておく。そして宮から一回転、すなわち12を引く。そして3番目の場所にあるものはこのようになる。これが幸運箭の場所である。それはふたご宮の26度1分にある。

3番目、すなわち幸運箭の場所
2
26
1

これこそが、この方法に基づいてプトレマイオスが常に変ることなく用いた箭である。それ以外のものについて言えば、昼はそのようにするが、夜はそれを反対にし、月を第1の場所に、太陽を第2の場所に、そして上昇点を第3の場所に置く。しかし、それには矛盾が伴う。

479 (476). 幸運箭以外にも箭があるか

プトレマイオスについて言えば、それ以外を認めていない。彼以外は、出生占星術 (al-mawālid) においてそれを乱用した。われわれは、アブー・マアシャルが述べているものを表にしよう⁷⁶⁾。各箭の観点は3つある。始点 (mabda'), すなわち第1の場所にある項目、終点 (muntahan)、すな

⁷⁶⁾ アブー・マアシャル『占星術大序説』VIII.3-5.

わち第2の場所にある項目、そして起点 (mulqan min-hu)、すなわち第3の場所にある項目である。引くもの (manqūṣ)、引かれるもの (manqūṣ min-hu)、加えられるもの (muzād ‘alay-hi) と言うこともできる。さらに別の条件がそれに加わる。すなわち、昼と夜で設定を同じにするか、あるいはは場所を反対にして、夜は違ったものにするかである。彼らが質問占星術や<物の>価格に関して書き留めている箭には、数に際限がない。なぜなら、それらはたえず増えていて、愚かな者はそれらを増やすことにしかならないからである。そして、習得が不十分なために、<それらは>削除されたり採用されたりしながら残存している。神は助けを求められる者。

7 惑星の箭

番号	箭の名前	始点	終点	昼と夜	起点
1	月の箭、すなわち幸運箭。月の上昇点と呼ばれる	太陽	月	異なる	上昇点
2	太陽の箭、すなわち不在と信仰の箭	月	太陽	異なる	上昇点
3	金星に属する、友情と愛情の箭	幸運箭	不在箭	異なる	上昇点
4	水星に属する、貧困と少ない手段の箭	不在箭	幸運箭	異なる	上昇点
5	土星に属する、束縛、牢獄、それを逃れるか否かの箭	土星	幸運箭	異なる	上昇点
6	木星に属する、繁栄、援助、勝利の箭	不在箭	木星	異なる	上昇点
7	火星に属する、勇気と大胆さの箭	火星	幸運箭	異なる	上昇点

12 家の箭

最初の家 (aṭ-ṭali‘) に属する 3つの箭

8	生活の箭	土星	土星	異なる	上昇点
9	上昇点の支柱の箭、すなわち不変、継続、出生者の状態の箭	幸運箭	不在箭	異なる	上昇点
10	雄弁と理性の箭	水星	火星	異なる	上昇点

2番目の家に属する 3つの箭

11	財産の箭	財産の家の支配星	財産の家の度	異なる	上昇点
12	負債の箭	土星	水星	異なる	上昇点
13	機会をとらえることの箭	水星	金星	異なる	上昇点

3番目の家に属する 3つの箭

14	兄弟の箭	土星	木星	同じ	上昇点
15	兄弟の数の箭	水星	土星	同じ	上昇点
16	兄弟姉妹の死の箭	太陽	10番目の家の度	異なる	上昇点

4番目の家に属する8つの箭

17	父親の箭	太陽	土星	異なる	上昇点
18	父親の死の箭	土星	木星	異なる	上昇点
19	祖父の箭	太陽の家の 支配星	土星	異なる	上昇点
20	性質の箭、すなわち起源と家系の箭	土星	火星	異なる	上昇点
21	ヘルメスによる不動産と地所の箭	土星	月	異なる	上昇点
22	あるペルシア人による不動産の箭	水星	木星	異なる	上昇点
23	農業と耕作の箭	金星	土星	同じ	上昇点
24	物事の結果の箭	土星	朔か望の家の 支配星	同じ	上昇点

5番目の家に属する5つの箭

25	子供の箭	木星	土星	異なる	上昇点
26	誕生時、子供の数、子供の男女の箭	火星	木星	同じ	上昇点
27	男児の状態の箭	火星	木星	同じ	上昇点
28	女兒の状態の箭	月	金星	同じ	上昇点
29	胎児、出生者、問われる者それぞれ男女の箭	月の家の 支配星	月	異なる	上昇点

6番目の家に属する4つの箭

30	ヘルメスによる病気、虚弱、慢性病の箭	土星	火星	異なる	上昇点
31	ある古代人による病気の箭	水星	火星	同じ	上昇点
32	奴隷の箭	水星	火星	同じ	上昇点
33	囚人と束縛の箭	交替主星の 家の支配星	交替主星	同じ	上昇点

7番目の家に属する16の箭

34	ヘルメスによる男の結婚の箭	土星	金星	同じ	上昇点
35	ワーリースによる男の結婚の箭	太陽	金星	同じ	上昇点
36	女に対する男の狡猾さと詐欺の箭	太陽	金星	同じ	上昇点
37	女との男の性行為の箭	太陽	金星	同じ	上昇点
38	男の不徳と不貞の箭	太陽	金星	同じ	上昇点
39	ヘルメスによる女の結婚の箭	金星	土星	同じ	上昇点
40	ワーリースによる女の結婚の箭	月	火星	同じ	上昇点
41	男に対する女の狡猾さと詐欺の箭	月	火星	同じ	上昇点
42	男との女の性行為の箭	月	火星	同じ	上昇点
43	女の不徳と非道の箭	月	火星	同じ	上昇点
44	女の貞節の箭	月	金星	同じ	上昇点
45	ヘルメスによる男と女の結婚の箭	金星	7番目の家の 度	同じ	上昇点
46	ヘルメスによる結婚時期の箭	太陽	月	同じ	上昇点
47	結婚における手配と促進の箭	太陽	月	同じ	上昇点
48	義理の息子の箭	土星	金星	同じ	上昇点
49	口論と論敵の箭	火星	木星	異なる	上昇点

8番目の家に属する5つの箭

50	死の箭	月	8番目の家の度	同じ	上昇点
51	命にかかわる惑星の箭	上昇点の支配星	月	異なる	上昇点
52	死と干ばつが出生者を脅かす年の箭	土星	朔か望の家の支配星	同じ	上昇点
53	重苦しい場所と病気の場所の箭	土星	火星	異なる	水星の度
54	困難と不幸の箭	土星	水星	異なる	上昇点

9番目の家に属する7つの箭

55	旅の箭	9番目の家の支配星	9番目の家の度	同じ	上昇点
56	水上の旅の箭	土星	かに宮の半分	異なる	上昇点
57	敬虔の箭	月	水星	異なる	上昇点
58	理性と深遠さの箭	土星	月	異なる	上昇点
59	知識と理解の箭	土星	太陽	異なる	上昇点
60	伝承、人々の噂、迷信の箭	太陽	木星	異なる	上昇点
61	噂が真実か嘘かということに関する箭	水星	月	同じ	上昇点

10番目の家に属する12の箭

62	出生者の高位、および彼が父親の子かどうかを疑う者の箭	時の支配星	その昂揚の度	異なる	上昇点
63	支配権と権威の箭	火星	月	異なる	上昇点
64	指導者、宰相、権力者の箭	水星	火星	異なる	上昇点
65	権威、援助、勝利の箭	太陽	土星	異なる	上昇点
66	突然昇進する人々の箭	土星	幸運箭	異なる	上昇点
67	聖人、名士、名誉ある人々の箭	土星	太陽	異なる	上昇点
68	兵士と護衛の箭	火星	土星	異なる	上昇点
69	権威者、および出生者がどのような仕事をやるかの箭	土星	月	異なる	上昇点
70	手仕事の職人と商売の箭	水星	金星	異なる	上昇点
71	あるペルシア人による商売、購入、販売の箭	不在箭	幸運箭	異なる	上昇点
72	果たされるべき仕事と指令の箭	太陽	木星	異なる	上昇点
73	母親の箭	金星	月	異なる	上昇点

11 番目の家に属する 11 の箭

74	名誉の箭	幸運箭	不在箭	異なる	上昇点
75	愛される人と憎まれる人の箭	幸運箭	不在箭	異なる	上昇点
76	名誉があって必要物を支援する有名人の箭	幸運箭	太陽	異なる	上昇点
77	成功の箭	幸運箭	木星	異なる	上昇点
78	この世での貪欲と強欲の箭	幸運箭	不在箭	異なる	上昇点
79	希望の箭	土星	金星	異なる	上昇点
80	友人の箭	月	水星	同じ	上昇点
81	必需品の箭	不在箭	水星	同じ	上昇点
82	肥沃、および家での多くの利益の箭	月	水星	同じ	上昇点
83	精神の自由の箭	水星	太陽	異なる	上昇点
84	賞賛され称えられる者の箭	木星	金星	異なる	上昇点

12 番目の家に属する 3 つの箭

85	ある古代人による敵の箭	土星	火星	同じ	上昇点
86	ヘルメスによる敵の箭	敵の家の支配星	敵の家の度	同じ	上昇点
87	不幸の箭	不在箭	幸運箭	同じ	上昇点

以上 87 の箭のうち、惑星に属するものは7つで、80 が家の箭として残る。

惑星または家と関係のない箭は 10 ある。

88	ハイラージュの箭	朔か望の度	月	同じ	上昇点
89	身体が病弱な者の箭	幸運箭	火星	異なる	上昇点
90	騎士道と勇気の箭	土星	月	異なる	上昇点
91	大胆さ、激しさ、戦いの箭	上昇点の支配星	月	異なる	上昇点
92	詐欺、狡猾さ、策略の箭	水星	不在箭	異なる	上昇点
93	必要物の場所と欲望の箭	土星	火星	同じ	上昇点
94	エジプト人による、急務と必要物の遅れの箭	火星	3番目の家の箭	同じ	上昇点
95	ペルシア人による、急務と必要物の遅れの箭	不在箭	水星	同じ	上昇点
96	ジズヤの箭	火星	太陽	異なる	上昇点
97	正しい行いの箭	水星	火星	異なる	上昇点

これが 97 の箭であり、そのうち惑星や家に関係のないものが 10 ある。

480 (477). これらの箭の手順は異なるか、また 2 つが一致することがあるか

これらの中には、状態の違いによって異なるもの、すなわち父親の箭がある。土星が<太陽の>光線の下にある時、昼は太陽から木星までを、夜はその反対を取り、上昇点から加えられる必要がある。また祖父の箭は、太陽がしし宮にある時、昼はしし宮の初点から土星までを、夜はその反対

を取り、上昇点から加えられる。もし太陽が土星の家にあれば、昼は太陽から土星までを、夜はその反対を取り、上昇点から加えられる。ただしその場合、土星が<太陽の>光線の下にあるか、それともそこから出ているかは関係ない。

同じ場所に2つの箭がある場合について言えば、それは何と頻繁に起ることであろうか。そのことは表から明らかである。あるものは昼と夜で同じままであり、あるものは昼は同じであるが夜は異なる。その反対もある。だから、長々とそれを数え挙げても得るものはない。

481 (478). これら以外の箭があるか

これは長くほとんど際限のない話題である。あるものは、一族の状態や支配者の即位に関する世界年回帰 (taḥwīl sanat al-‘ālam) に使われる。あるものは、天候や物価を知るために朔と望<を用いる占い>に使われる。そしてあるものは、質問占星術に用いられる。さらに各人が、各分野について何らかの見解を持っている。われわれは、彼らの書物に見られるこの分野を表にして述べよう。

482 (479). 世界年回帰と合 (qirānat) に使われる箭

番号	箭の名前	始点	終点	昼と夜	起点
1	権威の箭	太陽の天の中央	回帰時の天の中央	同じ	木星
2	別の方法	合の上昇点の度	合の度	同じ	上昇点
3	繁栄の箭	太陽の度	下降点の度	同じ	上昇点
4	戦いの箭	火星	月	同じ	繁栄の箭の度
5	ウマル・イブン・アル=ファッルハーンによる別の方法	火星	月	同じ	上昇点
6	第3の方法	土星	月	同じ	上昇点
7	軍隊における和平の箭	月の度	水星の度	同じ	上昇点
8	主権の箭	太陽	火星	同じ	上昇点
9	勝利の箭	幸運箭	木星	異なる	上昇点
10	合の最初の箭	合の年の上昇点	合の度	同じ	上昇点
11	合の2番目の箭	合の上昇点	合の度	同じ	上昇点

483 (479). 年、季節、朔、望が関わる箭

番号	箭の名前	始点	終点	昼と夜	起点
1	土の箭	土星	木星	同じ	上昇点
2	水の箭	月	金星	同じ	上昇点
3	空気と風の箭	水星の度	水星のある家の支配星の度	同じ	上昇点
4	火の箭	太陽	火星	同じ	上昇点
5	雲の箭	火星	土星	異なる	上昇点
6	雨の箭	月	金星	異なる	太陽
7	あられの箭	水星	土星	異なる	上昇点
8	日々の箭	太陽の度	土星の度	上昇時	月

484 (479). 同じく関係のある価格の箭

番号	箭の名前	始点	終点	昼と夜	起点
1	小麦の箭	太陽	木星	異なる	木星
2	大麦と肉の箭	月	木星	異なる	上昇点
3	米とキビの箭	木星	金星	異なる	上昇点
4	米とモロコシの箭	木星	土星	異なる	上昇点
5	エンドウ豆の箭	金星	水星	異なる	上昇点
6	レンズ豆と鉄の箭	火星	土星	異なる	上昇点
7	エジプト豆とタマネギの箭	土星	火星	異なる	上昇点
8	ヒヨコ豆の箭	金星	太陽	異なる	上昇点
9	ゴマとブドウの箭	土星	金星	異なる	上昇点
10	砂糖の箭	金星	水星	異なる	上昇点
11	蜜の箭	月	太陽	異なる	上昇点
12	油の箭	火星	月	異なる	上昇点
13	クルミと亜麻の箭	火星	金星	異なる	上昇点
14	オリーブの箭	水星	月	異なる	上昇点
15	アンの箭	土星	火星	異なる	上昇点
16	メロンの箭	木星	水星	異なる	上昇点
17	木綿と絹の箭	水星	金星	異なる	上昇点
18	塩の箭	月	火星	異なる	上昇点
19	砂糖菓子の箭	太陽	金星	異なる	上昇点
20	渋いものの箭	水星	土星	異なる	上昇点
21	香辛料のきいた食物の箭	火星	土星	異なる	上昇点
22	甘い下剤の箭	水星	土星	異なる	上昇点
23	苦い下剤の箭	土星	火星	異なる	上昇点
24	酸っぱい下剤の箭	土星	木星	異なる	上昇点

485 (479). 質問占星術に使われる箭

番号	これらは質問占星術に使われる箭	始点	終点	昼と夜	起点
1	本心の箭	上昇点の支配星	10番目の<家の>度	同じ	上昇点
2	必要物があることの箭	時間の支配星	上昇点の支配星	同じ	10番目の<家の>度
3	必要物がある時の箭	時間の支配星	10番目の<家の>支配星	異なる	上昇点
4	噂の真偽の箭	水星	月	異なる	上昇点
5	必要物を入手する者の箭	上昇点の支配星	幸運箭	同じ	上昇点
6	自由人と奴隷の箭	木星	土星	同じ	水星
7	アラブとマワーリーの箭	木星	土星	同じ	月
8	結婚の箭	7番目の<家の>度	7番目の<家の>支配星の度	同じ	上昇点
9	ワーリースによる妊娠時の箭	太陽	木星	同じ	上昇点

10	ワーリースによる仕事の期間の箭	太陽	土星	同じ	上昇点
11	辞職の時の箭	太陽	木星	同じ	土星
12	ワーリースによる時の箭	必需品の <箭の> 支配星	幸運箭	同じ	10番目 <の家>
13	不在者の生死の箭	月	火星	同じ	上昇点
14	はぐれた動物の箭	太陽	火星	同じ	上昇点
15	口論の箭	火星	水星	同じ	上昇点
16	仕事達成の箭	太陽	木星	同じ	上昇点
17	首打ちの箭	月	火星	同じ	8番目の <家の>度
18	刑罰の箭	月	土星	同じ	6番目の <家の>度

486 (480). 2つの箭 (as-sahmān) と2匹の獣 (al-bahimatān) とは何か

ヘルメスには『85章』と呼ばれる論文があり、その中で彼は兆候 (ar-rumūz) のようなものについて述べている⁷⁷⁾。

2匹の獣について言えば、マーシャーアッラーフによれば、黒い獣は土星で、黄色い獣は太陽である⁷⁸⁾。

2つの箭について言えば、それらについてそれぞれの見解を持つ2つの集団が存在するだけである。マーシャーアッラーフらが支配者の寿命についてそれらに依拠したために、その2つが必要とされるようになったのである。

星学者の中には、それらについて、際限もなく精密でない多くのさまざまな方法で長々と計算する傾向がある者がいる。また、王が即位し、王朝の支配者が現れる年の回帰時に、2つの箭の最初のを太陽からしし宮の半分まで<の距離>で、そして2番目の箭を、月からかに宮の半分まで<の距離に>で取る者もいる。ともに、昼夜で異なることはなく、上昇点に加えられる。また最も高度な者は、最初の箭が土星自身で、2番目の箭が木星だと考えている。彼らの考えをすべて述べると、一冊の本になるほど長くなる。

第6章 太陽と惑星の関係

これから太陽との関係における惑星の諸状態について述べよう。というのは、太陽はそれを示す周期性に関して最も有力であり、自然の諸状態の成り行きに最も似ているからである。

487 (481). 内奥 (taṣmīm)、東見 (taṣrīq)、西伏 (taḡrīb) とは何か

惑星が太陽とともにあって、太陽との合まで残り16分以下にある時、または太陽との合の後同じだけ通過した時、その惑星は「内奥にある」(ṣamīm) と呼ばれる。3つの上位惑星について言えば、順行の中間にある時だけそのことが起る。2つの下位惑星では、順行の中間と逆行の中間のそ

77) この著作は一般に、『根拠の書、すなわち星学の85章の書と呼ばれるもの』(Kitāb al-asās wa-huwa allāfi yusammā fi kutub an-nuḡūm al-ḥamsa wa-l-ṣamīm bāban) と呼ばれる。この論文の内容はまだ確認できていない。

78) マーシャーアッラーフにも「85章からなる警句の書」という論文があるが、その内容はまだ確認できていない。

れぞれでそのことが起る。「東見」⁷⁹⁾ という点から言えば、下位惑星における逆行の中間は、上位惑星における順行の中間に相当する。

上位惑星が内奥の分を越えてから、また逆行の中間にある2つの下位惑星がその分を越えてから、惑星から太陽までの距離が6度になるまで、すべての惑星は「燃焼している」(muḥtarāq) と呼ばれる。

惑星から燃焼 (al-iḥtirāq) の性質がなくなると、惑星は「光線の下にある」(taḥta aš-šū'ā) と呼ばれる。太陽と金星・水星のそれぞれとの間が12度、土星・木星との間が15度、そして火星との間が18度になるまで、あたかも惑星が現れて目に見える準備をしているかのようである。その度数が惑星の東見の始まりである。それはクリマヤ都市によって異なるので、視界に現れることを意味しているのではない。それはむしろクリマヤ都市ごとに限定された範囲である。

その後は「東進している」(mušarriq) と呼ばれ、ペルシア人はその時の惑星をケナーレ・ローズ (kinār rūzī, 昼の境) と呼ぶ。その後は上位惑星と下位惑星とで違いが生じる。

上位惑星は距離が30度になるまでは「東進している」と呼ばれ、距離が90度になるまでは「東見が弱い」(da'if at-tašriq) と呼ばれる。その名称(東見)は惑星からは決してなくなる。なぜなら、惑星は太陽が昇る時には東の方向にあるからである。距離が90度を越えた時は、前述の理由から惑星から東見という名称が失われる。その後、惑星は逆行に向かうために留まり、留の後、逆行し、逆行が終わると順行に向かうために留まる。逆行の中間で太陽は惑星と衝になり、逆行の前半は「第1の逆行」、後半は「第2の逆行」と呼ばれる。順行になった後、太陽と惑星の距離が90度になるまで、惑星は日没時に東の方向にある。またそれが90度以下になれば、日没時の惑星は西の方向に傾く。この距離が30度になると、それは西伏の始まりである。西伏の距離は火星では18度、土星と木星は15度までである。その後、惑星と太陽の距離が6度になるまで、惑星は光線の下になり、それから燃える。そして惑星は内奥に戻る。『アルマゲスト』では、夜の境 (aṭraf al-layl, ἄκρόνυχος) と呼ばれる状態が、時として「太陽に対する上位惑星の衝」と呼ばれる。これは、日没時における出が上位惑星に固有なことに由来する。ペルシア人はそれを彼らの言葉でケナーレ・シャブ (kinār šabī, 夜の境) と呼ぶ。しかし彼らは上位惑星と下位惑星に共通な別の状態、すなわち夜の始まりにあたる西伏もそのように呼ぶので、後者と前者を区別するために、後者には「西」という言葉を添えるのである。

488 (482). 東見後の2つの下位惑星の状態とは何か

2惑星の東見は逆行の状態にあり、両者とも太陽から遠くに達することはない。東見に続くのは留、そして順行である。すなわち太陽からの最大距離に達してから太陽への接近を始める。その間ずっと12度の距離になるまで東見という言葉で呼ばれる。それ(12度の距離になる時)は、朝東に両惑星が見えなくなる始まりである。その後、距離が7度よりも少なくなるまでは光線の下になり、それから燃える。太陽との合の時には、2惑星は順行の中間で内奥となる。その後の西における2惑星の状態は、燃焼、光線の下、そして西見⁸⁰⁾ のために夕方現れるという点で、前述の範囲で東にある上位惑星の状態に対応する。その後太陽からの距離が最大となり、留、逆行と続き、前述の距離に達すると前の状態に戻る。また、逆行における内奥は<前述の内奥とは>

79) 「東見」とは、惑星が日の出前に東の空に現れること。152節参照。

80) アラビア語では「西伏」と同じ用語が使われている。

別のものである⁸¹⁾。

489 (483). このことについて金星は水星と異なるか

東見と西伏の距離について言えば、すでに述べたように、星学者たちが土星と木星の間には違いを考えてはいないが、火星には認めているように、両者（金星と水星）の間には区別が必要である。それら（土星・木星と火星）の違いはすでに述べた。金星と水星の間の違いについて言えば、金星は非常に緯度が大きくくなる時があり、時として北緯が最大の時には、内奥と燃焼の区別がなくなる。だから金星は燃焼と光線の下について前述の範囲内（それぞれ6度と12度以内）にある時でも目に見え、この2つの表現は使われない。同様に、内奥の場合、金星の北緯が7度以上である時は、「燃えている」とも「内奥にある」とも呼ばれず、「太陽との合にある」と言われる。

490 (484). 太陽に対する月の状態とは何か

月と太陽の距離が東西に7度以下の時に、月は内奥と燃焼の範囲において惑星と同じ状況にある。その距離が12度、すなわちだいたい新月となる境にまで増えると、月は光線の下になる。したがって、ファースイーサについてすでに述べた距離は、望から両側に新月に向かう2つの距離において、月全体の1/4、1/2、3/4、そして月全体で輝く部分である⁸²⁾。

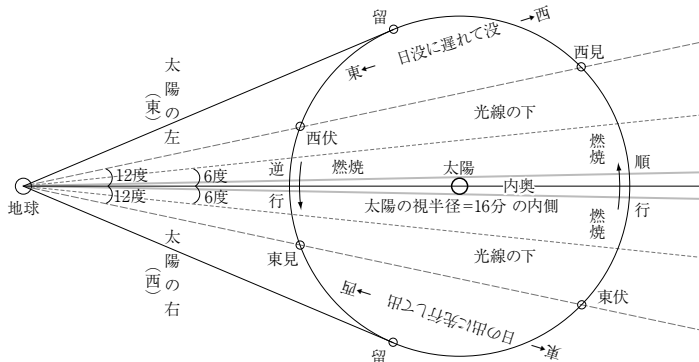
491 (485). 太陽の右 (tayāmun) と左 (tayāsūr) とは何か

星学者が依拠しているのは、3つの上位惑星が燃焼の時から太陽と衝になるまで、また2つの下位惑星が逆行の中間における燃焼から順行の中間における燃焼に至るまで、そして月が望から朔になるまでが、それぞれ太陽の右になるということである。左について言えば、それは、上位惑星が太陽との衝の時から合になるまで、下位惑星が順行の中間における燃焼から逆行の中間における燃焼に至るまで、そして月が朔から望になるまでである。

492 (486). 惑星の影響は惑星の状態の変化によって変るか

もし惑星の諸状態に変化がないのであれば、それを学んでも得るものはない。すでに述べた惑星と太陽の関係について言えば、内奥が強さの最大限にあり、そこにある惑星が幸運を示すというこ

81) 下位惑星の状態を太陽中心説で説明すると、以下のようになる。



82) ファースイーサについては255節参照。輝く部分が月全体の1/4、1/2、3/4、全体となる時の離角は、それぞれ45度と315度、90度と270度、135度と225度、そして180度となる。

とで、彼ら（星学者）は一致している。また燃焼については、それが弱さの最大限にあり、その結果、不運の域を越えて破滅に至ることで一致している。もし彼らが、熱さの過剰や湿気の減少のような、性質の類似や対立によって区別するとすれば、惑星によってはそれによって燃焼による悪影響が少ないことも多いこともあるのである。しかし燃焼の後の光線の下にある惑星は、病気から回復と活力へと向かう者のようである。東見は、そこにおいて恩恵を与えることができる、それら（回復と活力）の完了の時である。ペルシア人はそれを「ダストゥーリーヤ」（*dastūrīya*）と呼び、その名称を太陽の右すべてにも用いている。太陽から30度の距離まではそのまま続き、幸運の指示が中庸になる。そして太陽から45度まではその指示が弱くなり、60度までで状況が変わり「小凶」（*aš-šaqa' al-ašgar*）と呼ばれる。75度までは「中凶」（*aš-šaqa' al-awsat*）で、燃焼までは「大凶」（*aš-šaqa' al-akbar*）である。第1の留にある惑星は抑圧された者や絶望した者のようであり、第1の逆行にある惑星は顔を殴られて当惑した者のようである。第2の逆行では援助を期待する者のようであり、第2の留ではその期待が救出にまで高まる。順行はその名のとおりで、幸運や活力の徴候である。

同様に、惑星の性質は、離心天球において上昇する時に変化し、乾きとなる。また下降する時は、影響の仕方が変わることはなく湿気となる。また周転天球において上昇する時と下降する時にも変化がある。＜上位惑星は＞東見から第1の留までは湿気、また逆行の中間までは熱さ、第2の留までは乾き、そして次の東見までは寒さであるが、影響の仕方に変化がある。なぜなら周転天球での出来事は、太陽に依存しているからである。

また惑星は太陽に近づく時は乾き、離れる時は湿ると言われる。その場合、惑星は燃焼などのために、性質が変化する。このことが＜周転天球の＞上昇と下降に加わると、離心天球の状態とは反対になる。その上さらに＜惑星が＞宮や区界の中の湿の場所にあることが変化させている。男女間に変化が生じることもあり、東見では男性、西伏では女性となる。

宮においても同様で、精神が身体の性情に従うように＜惑星が＞各宮の指示に従う。その結果、女性宮にある男性の惑星が女らしさを示し、あるいは男女の度数に応じた宮の一部分に従う。時として指示の混合によって、宦官、両性具有者、男性の女らしさ、女性の男らしさを示すこともある。

惑星はまた地平線に基づく天球の四分円においても、男女や四性質に関して変化する。また杭などに関しても変化し、特に指示が最も強い場合と最も弱い場合がある。杭では吉星の幸運が強くなるが、特に固定宮においてそうである。また固定宮にある凶星の害が強くなるが、特に杭から落ちる時（248節参照）がそうである。転換宮にあれば、その事態は和らぐが、特に杭を過ぎていない時がそうである。

ある人々によれば、西は下位惑星に、東は上位惑星により適している。彼らは、方向として男女に似ていると考え、問題を一般化したかのようである。しかし、それは限定されていて、太陽からの距離が基準になっている。

上位惑星の東見は燃焼の後の順行中に起り、上位惑星にとって好ましいものであることが知られている。なぜなら、それは惑星が困難から抜け出した段階にあるからである。順行中の下位惑星が夕方西に現われることが、これに対応している。なぜなら、それもこのような特徴にあるからである。

上位惑星の西伏について言えば、これは順行中に燃焼に向かっている時に起る。順行中の下位惑星が朝方東に見えなくなることが、これに対応している。なぜなら、それもこのような状態にあるからである。

下位惑星の東見について言えば、それは燃焼の後に起るために上位惑星の東見の状態に近く、また順行にも近い。もし2つの下位惑星がそこで順行していれば、全惑星が等しく東見の状態にあることになる。

運行が遅くなる下位惑星の西伏について言えば、それは上位惑星の西伏よりも害と弱さにおいて著しい。それは、2つの下位惑星が逆行と同時に燃焼に向かっているからである。したがって西伏にある上位惑星は、その後見えなくなる西伏にある下位惑星よりも安全な状態にある。

第7章 惑星の強弱

両者(上位惑星と下位惑星)の違いは対照的ではないが、東見の強さと西伏の弱さに関する指示の違いについて初心者が知るべきことを、ヤアクーブ・イブン・イスハーク・アル=キンディーの言葉⁸³⁾に基づいて次の表にして引用しよう。崇高なる神がお望みになれば。

493 (487). 惑星が東にある時の指示

惑星	惑星が東にある時の指示
土星	老年の始まり、耕作における幸運、水利技術、装置による水の分配、装置に関する思慮深さと名声、都市の防備、迅速、鋭敏、良くない行いによる富
木星	中年の始まり、よい方向性、美しさ、荘厳、憐れみ、高官を勤めること、判決、人々に対する公正、豊富な財産、よい評判、子供に関する喜び
火星	戦いの手腕、軍団の指揮、援助による名声、征服に対する貪欲、勝利、物事の速さ、鉱山の採掘
太陽	東見と西伏は太陽に対して起ることなので、両者とも太陽は関係ない
金星	東見における惑星の影響は、西伏よりも少ない
水星	知性、論理、思慮遠さ、知恵の発見、詩、雄弁、税金の契約、測量、計算を含むものすべて、知恵、医学、星学、論理学
月	月の半ばから22日までは中年を示し、朔までは老年を示す

494 (488). 惑星が西にある時の指示

惑星	惑星が西にある時の指示
土星	かなりの老年、生計の不運、行いの卑しさ、地位の低さ、奉仕、遅れること、水分や井戸の仕事、卑しい食べ物、詐欺、罪
木星	中年の後半、中位程度の技術、管理、訴訟の代理、スナナの書物のための製紙のような宗教に関する仕事、禁欲生活、外科医学、十分な財産
火星	軍団における卑しい仕事、窃盗、反抗、火と鉄の仕事、肉屋・調理人・鍛冶屋・蹄鉄工・外科の実践のような卑しい仕事
太陽	東見と西伏は太陽に対して起ることなので、両者とも太陽は関係ない
金星	美しさ、愛情、喜び、楽しみ、歓喜、結婚、贈り物、そのための努力、技術のうち娯楽の仕事、染色、装飾、絹の錦織や刺繍の仕事
水星	前に述べたことは東見においては完遂され、西伏においては弱まる。ただし、水星と金星における西伏はより害が少ない
月	朔から7日までは幼年、望までは青年を示す。月とそれ以外のものが「光線の下」にあれば、秘儀と秘密を示す。特に、この段階の月の光に似ていることから、すべての悪い存在を示す

83) キンディーの引用文献が何であるかは不詳。

495 (489). 相遇 (ittiṣāl) と相離 (inṣirāf) とは何か

この2つは宮位(376節参照)と関係がある。惑星の視座は宮と結びついており、<惑星が位置する宮同士が>宮位の関係にある惑星は、前述の合、六合、矩、三合、衝という名のもとで見つめ合っている。互に見つめ合っていない場合は、<宮位から>落ちて、隠れた状態である。ひとつの宮か2つの宮にあって、互に見つめ合う2惑星のそれぞれの度数が等しい時、両者は完全に相遇の状態にある。より速いためにより低い天球にあるものが、より重いためにより高い天球にあるものに相遇するのである。

したがって、月はすべての惑星に相遇するが、後者が月に相遇することはない。水星は月を除くすべての惑星に相遇し、金星は水星と月を除く惑星に相遇する。金星がその両者よりも高いからである。太陽は下位惑星ではなく上位惑星に相遇し、火星はその上にある木星と土星に相遇するが、それより下にあるものには相遇しない。木星は土星にだけ相遇し、土星はいかなる惑星にも相遇しない。すべての惑星がその下にあるからである。見つめ合う2惑星のうち低い方が高い方より度数が少なければ、低い方が高い方とその近くのある場所で相遇しようとしている。もし低い方の度数が多ければ、それは高い方と相遇した後にそれから相離しているのである。そして、低い方は「操縦を強要する惑星」(dāfi‘ tadbīr)、また高い方は「操縦を強要される惑星」(madfū‘ ilay-hi)と呼ばれる。以上が経度上の相遇である。

496 (490). 相遇の始まりに範囲があるか

相遇が出会いに、そして相離が通過に似ているので、低い方の惑星が宮位の宮にあって、相遇に向かう動きを始めた時、その状態は完成に向かっている。ただし、(1) それ以外の惑星が先行して高い方の惑星との相遇を妨害するか、(2) 相遇が完了する前に高い方の惑星が宮から移動するか、あるいは(3) 低い方の惑星が逆行によって相遇を中止する場合は別である。そしてその範囲には違いがある。

ある人々によれば、両者の間の度数を5度から始め、死の度数(次節参照)の5度の分だけ多くとる。他の人々によれば、それを6度で始める。なぜなら、それは惑星の区界の平均値である宮の1/5だからである。また別の人々によれば、それは月食の距離に基づく12度である。さらに別の人々によれば、太陽本体の前後にあって影響力として知られる太陽光<の範囲>に基づく15度である。またある実践家は、相遇の始まりを、両者の間が両者本体の影響力の総和の半分になった時だと考えた。また、相遇を合の時にのみ認め、別の視座ではそれを認めず、用いない者もいる。

相離について言えば、低い方の惑星の度数が高い方惑星の度数より大きいこと以外に範囲はない。その結果、たとえ<範囲が>1分でも彼らはそのように言う。なぜなら、相遇の状態が失われているからである。影響が残る範囲については、相離が完了するまでは相遇に関する前述の数値が用いられる。

497 (491). 死の度数 (daraḡāt mayyita) とは何か

これは、上昇点の度数の前の5度であり、宮の順方向とは反対にある。プトレマイオスはそれを12番目の家とも、上昇点を越えた度数とも考えず、そこに惑星がある時は、それが上昇点にあるものとみなした⁸⁴⁾。

84) 『テトラビブロス』III.11,3参照。

498 (492). 経度上以外にも相遇の種類があるか

相遇には緯度上と性質上の2種類がある。緯度上について言えば、それは<黄道の>南北のうち同一領域にある2惑星の緯度が等しい場合である。両者の緯度が異なり、緯度の大きい方が<どちらかの>領域で下降し、緯度の小さい方が同じ領域で上昇する場合は、一方が他方との相遇に向かっている。もし緯度の大きい方がある領域で上昇し、緯度の小さい方がその領域で下降する場合は、一方が他方との相遇を過ぎたのである。もし両者が同じ領域でともに上昇すれば、相遇は緯度が小さい方の力によって起る。つまり、それが相遇に向かっているのである。この力というのは、惑星の最大緯度が、その時の緯度がより大きい惑星の最大緯度よりも小さくないということの意味している。なぜなら、もし小さければ、その力は発揮されず、相遇したとは言えないからである。もし両者がともに下降し、緯度の大きい方がより速く下降すれば、それは相遇に向かっている。しかし、<相遇が>完了することもあれば、緯度の小さい方が別の領域に移動することで、完了しないこともある。緯度上のこの種類が経度上のものに対して優位であるのは、後者は7つの視座(2つの六合、2つの矩、2つの三合、衝)以外ではあり得ないが、前者にはある優位点があるからである。例えば、ある惑星が上位の惑星⁸⁵⁾に経度上で相遇しながら、その上位の惑星から落位にある別の惑星に緯度上で相遇する場合、その経度上の相遇は一瞬も起らないことになるのである。

性質上について言えば、それは、2惑星が「力において対応する」(380節参照)2つの宮にある場合である。2惑星が「力において対応する」2つの度数に達すれば、両者は相遇する。例えば、木星がおひつじ宮20度、そして月がうお宮5度にあつて、月が木星に相遇する場合である。月がうお宮10度に達する時に、それが完了する。もし両者の宮が互いに見つめ合うか、あるいは両者が「道において対応する」宮にあれば、このことはより確実である。両者が「道において対応する」度数に達する時、相遇が完了する。例えば、木星が前述の場所にあり、月がおとめ宮5度にある時、おとめ宮10度で相遇が完了する。ここでもまた互いに見つめ合うことで確実なものとなる。

499 (493). シャハーダ (šahāda) とムザーアマ (muzā'ama) とは何か

両者は同じ意味を持つ同意語であり、ともに2種類あるうちのひとつの方法で惑星に起る。最初の種類は、惑星が位置する場所においてである。もし惑星に、例えば、その惑星が支配星となる「宿」とか、その惑星が昂揚する「昂揚」とか、あるいは惑星が所有し関係するその他のもののような、ある一定の分担 (naṣīb) や役 (hazz) があれば、その惑星はそこにおいてひとつのシャハーダか複数のシャハーダを持つことになる。もし惑星にその場所において支配権を有するものが何もないければ、その惑星はそこにおいて不在状態 (garīb) となる。もしその場所が、「害」や「失墜」(445-446節参照)のような役の力に対して反対の力となるものであれば、それは不在に加えて災難<の状態>となる。

2番目の種類は惑星の場所以外で起り、次の3種類に分けられる。まず、ある惑星が前述の役のひとつを、別の惑星の場所に認め、その結果、その惑星が別の惑星のシャハーダに関わる場合である。別の惑星は「その惑星の宿の主人」とか「その惑星の昂揚の主人」と呼ばれる。次に、戦いや口論における火星のシャハーダ、財産や名誉における木星のシャハーダ、そして娯楽や結婚にお

85) 「上位の惑星」とはより上位にある惑星という意味であり、太陽より上の、いわゆる「上位惑星」とは異なる。「下位の惑星」も同様である。

ける金星のシャハーダのように、物事における起源や性質に関するものである⁸⁶⁾。そして最後に、昼における太陽、夜における月、そして日や時間などの支配星のような交替<主星>そのものに関するものである⁸⁷⁾。

500 (494). シャハーダに序列があるか

ムザーアマのうちの先頭に立つのは、宿の支配星であり、次に昂揚の支配星、区界の支配星、三角宮の支配星、そして顔の支配星である。これに応じて、彼らは、例えば2惑星の役の数それぞれ合計し、両者を対比するために、宿の点数を5、昂揚の点数を4、区界を3、三角宮を2、そして顔を1と考えた。その結果、<一方の役が他方に対して>多いことや少ないことが知られる。

聖俗両世界にわたる権威を典拠にして、上昇点の支配星は30、昂揚の支配星は20、顔の支配星は10、区界の支配星は5、三角宮の支配星は3と1/2、時間の支配星は4と1/2、そして2光輝星のうちの交替主星は上昇点の支配星と同じものが、それぞれ割り当てられると言われる。そして、惑星の加算される点数を比較する。これは、顔の支配星を<区界と三角宮の支配星に>先行させるという点で、バビロンの古代人やペルシア人の見解に似ている。

星学者の中の改革者たちは、三角宮を区界と顔に先行させる。またある者は、顔をまったく考慮せず、この序列は状況によって異なっている。すなわち、権力、指揮権、威厳に関する事柄については、昂揚の支配星が宿の支配星に先行するのである。また、これらのシャハーダが宮位または宮位に代わるものに基づいていることを知る必要がある。なぜなら、2惑星のそれぞれに2つのシャハーダが集まる時、または両者の役の点数が等しい時、両者のうち宮位をなすものに優先権があり、ひとつのシャハーダ<を持つもの>が2つのシャハーダを持つものに優先することはない。

501 (495). ムブタツズ (mubtazz) とは何か

ムブタツズとは征服するものであり、それには絶対的なものと限定的なものがある。絶対的なものは、惑星のうちその時に最も力のある惑星であり、天球、地平線、<他の>惑星との位置関係においてシャハーダが最も多いものである。

限定的なものは、状態において最も強くて良いものであり、12の家に割り当てられ関係づけられた状態においてシャハーダが最も多いものである。

502 (496). ハイイズ (ḥayyiz) とハルブ (ḥalb) とは何か

両者は意味が似ていて、<同じ状態を>共有している。昼の惑星は昼には地上にあり、夜には地下にある。その反対に、夜の惑星は夜には地上にあり、昼には地下にある。これがハルブである。

また男性の惑星が男性宮にあり、女性の惑星が女性宮にあることがそれに加わると、ハイイズとなる。これはハルブよりも一般的であり、アブー・マアシャルは男女の度数の要件もそれ(ハイイズ)に加えている⁸⁸⁾。ハイイズにおいては、火星は他の惑星とは異なり、男性であり同時に夜の惑星でもある(388、389節参照)。したがって、火星が夜に地上にあって昼に地下にあり、さらに男性宮にあれば、それはハイイズにあるのである。

86) 例えば、火星はどの位置にあっても、戦いや口論に関わることに影響を行使する。

87) 例えば、太陽は昼であればどの位置にあっても、その影響力を行使する。

88) アブー・マアシャル『占星術大序説』VII.6.

503 (497). ムナーカラ (munākara) とは何か

これはハイイズの反対に近い。すなわち、昼の惑星が夜の惑星が支配する宮にあり⁸⁹⁾、その夜の惑星が昼の惑星が支配する宮にあること、または夜の惑星が昼の惑星が支配する宮にあり、その昼の惑星が夜の惑星が支配する宮にあることである。

504 (498). 惑星の歓喜 (farah) とは何か

惑星は力や幸運によって歓喜し、役にあることでそれ自身が喜ぶ。だから惑星は前述の2つの宿のひとつにおいて歓喜し、ハルブかハイイズにあることで歓喜する。また、上位惑星は東にある時や、順行中の下位惑星が西にある時のように、太陽に近づく距離で歓喜する。惑星はそれらが支配する東西南北の方向で歓喜し、表によって家について前述したように、家のひとつで歓喜し、地平線による四分円⁹⁰⁾で歓喜する。そして上位惑星は増加する四分円で、また下位惑星は減少する四分円で歓喜する⁹⁰⁾。

505 (499). 前進 (iqbal) と退却 (idbar) とは何か

前進とは<惑星が>杭にあることである。なぜなら、杭が存在を示すものであり、性質において適度な位置だからである。また、退却とは<惑星が>「杭を過ぎたもの」にあることである。なぜなら、「杭を過ぎたもの」が腐敗と適度からの逸脱とを示すからである。「杭に続くもの」にあることについて言えば、それは2つの状態の中間の境を前進へと越えている。なぜなら、退却から前進への通路の場所にあるからである。気高さ美徳に関して杭と「杭に続くもの」が優越し、脱力感と悪徳に関して「杭を過ぎたもの」が優越することによって、前進と退却の2つの状態が優位にある。3番目<の家>と9番目<の家>は杭を過ぎており、<地平線下に>沈んでいる6番目<の家>と12番目<の家>は上昇点から落ちているのである⁹¹⁾。

506 (500). 閉鎖 (ḥiṣār) とは何か

これが2つの宮で起る場合は、一方が2番目にあり、他方が12番目にある2惑星の間で、ある惑星が閉鎖される (maḥṣūr) ことである。

またひとつの宮の中で惑星本体に起る場合は、惑星が宮の中で2惑星の間にあり、その2惑星の一方がその惑星より度数が少なく、他方がその惑星より多い時である。

さらに光線に起る場合は、惑星がある宮にあり、その前に別の惑星の光線があり、その後さらに別の惑星の光線があることである。2つの凶星の間の閉鎖は極端に悪く、また2つの吉星の間では極端に良い。

507 (501). 疑念 (tuhma) とは何か

各惑星に、不吉な出来事と、燃焼、逆行、害、失墜、没 (zawāl)⁹²⁾、落位、凶星との友好関係、凶星からの憎悪を伴う宮位によって悪い状態とが重なると、その惑星の指示は疑わしく (muttāham)、それは約束を破ることになる。

89) 「夜の惑星が支配する宮」とは、夜の惑星が宿とする宮という意味。

90) 「増加する四分円」と「減少する四分円」については204節参照。

91) 厳密に言えば、6番目の家は下降点から落ちている。

92) 地平線から沈み、見えなくなることだと考えられる。

508 (502). 好意 (in‘ām) と返礼 (mukāfa‘a) とは何か

惑星が、失墜、井戸、あるいは特にその惑星が役を持たない宮にある時、その惑星は窮屈な場所 (al-muṭābiq) や貯蔵穴の中に閉じ込められたような状態である。友好関係、またはムザーアマ関係にある惑星がその惑星に相遇する時、前者は後者の手を取って、困難に巻き込まれた状態から後者を助ける。前者は後者に対して「好意を示すもの」(mun‘im) と呼ばれ、その結果、この好意を示すものに後者に起ったことと同じことが起ると、<今度は>後者が前者に対して好意を示し、前者の好意に対して後者が返礼をする (kāfa‘a) ことになる。

509 (503). 2つの右手を持つもの (dū al-yamīnayn) とは何か

2つの右手を持つものとは、天の中央の杭にある惑星であり、その惑星の六合と矩の2つの光線がともに地上にあり、勝利がその惑星に関係してくる。2つの右手を持つものと呼ぶ理由については、その惑星の指示がそのようなものだと言われている。

2つの左手を持つもの (dū al-yasārayn) について言えば、それは、天の中央にある惑星であり、その惑星の六合と矩はともに地下にある。

510 (504). 進行の無効 (ḥalā‘ as-sayr) とは何か

これは、他の惑星の視座から落ちてはいない惑星がその宮にある間は、他の惑星に相遇しないことである。惑星がその宮での相遇を放棄しようとしまいと、その惑星の進行は無効となり、「相遇に対する進行の無効」(ḥālī al-sayr ‘an al-ittiṣāl) と言われる。

511 (505). 進行の無制御 (waḥṣīya as-sayr) とは何か

これは、惑星がある宮に入り始めた時からそれを出るまで、あるいはある知られた時からその宮を出るまで、すべての惑星の視座から落ちている状態である。これは、上位惑星と太陽においては全く不可能なことである。しかし下位惑星のうち月の場合には、必然的に頻繁に起る。たとえ速い月でなくとも、金星と水星の一方が遅く、他方が速い場合に、両者は進行が無制御だということがあり得る。ある人々は、進行が無制御である月が惑星の区界にあることを、月が惑星と相遇することの代わりに用いている。これは取るに足りない意見であり、根拠が薄弱である。

512 (506). 相遇の状態は何によって完了するか

前述の相遇の形態において、操縦する下位の惑星と操縦される上位の惑星の間に、返却 (radd) と、回避 (fawt)・反抗 (i‘tirād)・阻止 (intikāt)・<光の>遮断 (qaṭ‘)・禁止 (man‘) のそれぞれがないことによって<完了する>。

「返却」とは、上位の惑星が逆行にあるか光線の下にあつて力が弱く、それに差し出されたものを確保できずに<下位の惑星に>戻すことである。もし両惑星の間に「歓迎」(513節参照)があるか、下位の惑星が杭にあるか、両者ともに杭か杭に続くものになれば、この返却の弱さは結果として吉となる。もし上述の弱さが下位の惑星にあり、上位の惑星が杭か杭に続くものになれば、たとえ始めは期待されていても、結果は凶となる。またもし両者がともにそのような状態であれば、すべての事態に凶が及ぶ。

「回避」とは、下位の惑星が上位の惑星との相遇に向っている時、相遇が完了する前に上位の惑星がその宮から移動し、さらに下位の惑星が、その宮にある時か、その宮から移動してから、最初

の惑星と相遇する前に、別の惑星と相遇することである。こうして、最初（上位）の惑星は、＜下位の惑星との＞相遇を回避したのである。

「反抗」とは、下位の惑星が上位の惑星との相遇に向う時に、宮の終わり付近に中間惑星、すなわち下位の惑星より高く、上位の惑星より低い惑星があり、その相遇が完了する前に、中間惑星が上位の惑星の方向に逆行し、反抗者（mu'tarid）のようにそこを通過することである。下位の惑星は中間惑星とは相遇するが、上位の惑星とはしない。

もし中間惑星が上位の惑星のある宮から2番目の宮にあって、逆行の状態でそこに入れば、それは2つある「光の遮断」のひとつである⁹³⁾。もうひとつは、下位の惑星が中間惑星と相遇し、それが完了する前に、中間惑星が上位の惑星を通過することである。下位の惑星は上位の惑星とは相遇するが、中間惑星とはしない。

「阻止」とは、下位の惑星と上位の惑星との相遇が完了する前に、前者の逆行によって前者が後者に対して向きを変えることである。

「禁止」とは、中間惑星が下位の惑星と上位の惑星の間にあって、下位の惑星と上位の惑星の相遇を禁止することである。さらに、合＜となる惑星同士＞の相遇と宮位＜となる惑星同士＞の相遇が同時に起り、合と宮位の度数が同じ時には、合となる惑星の相遇が宮位のそれを禁止する。もし宮位をなす惑星の度数が＜合となる惑星のそれよりも＞相遇に近ければ、前者の方が相遇にふさわしい。またもし宮位をなす両惑星の度数が等しく、ともに第3の惑星に相遇すれば、その相遇は、「歓迎」あるいはその優位性を得ることになる。宮位には＜強さの＞違いがあり、合＜の相遇＞が宮位＜の相遇＞を禁止したように、より強い宮位がより弱い宮位を禁止する、と考える必要がある。ただし、星学者たちはこの意味については何も語っていない。

513 (507). 歓迎 (qabūl) とは何か

これは、下位の惑星が上位の惑星の役のひとつにあることである。「私はあなたの息子です」、「私はあなたの召使です」、あるいは「私はあなたの隣人です」と言う人のように、前者は後者との関係を後者に知らせる。もし上位の惑星もまた下位の惑星の役にあれば、歓迎は完全なものとなり、役の数が増える。特に、惑星が好ましい視座（三分または六分）にある時がそうである。また、歓迎の反対は「拒絶」(inkār) である。

514 (508). 強要 (daf) とは何か

強要する惑星 (ad-dāfi') が相遇＜に関するもの＞であり、操縦 (at-tadbīr) とともに用いられることはすでに述べた (495 節)。強要する惑星は、強要される惑星の状態に関係なく、それ自身の役のひとつにあれば、その相遇は「力の強要」(daf al-qūwa) と呼ばれる。あるいは、それが強要される惑星の役のひとつにあれば、「性質の強要」(daf at-ṭabī'a) と呼ばれる。これは歓迎について述べたことと全く同じである。あるいは、強要する惑星の宮に2つの惑星があれば、それぞれの惑星にムザーアマがあることになる。2つのうち強要する惑星がそれ自身の性質と同時に（同じ宮にある）他方の惑星の性質もそれ（強要される惑星）に強要するかのようになり、「2つの性質の強要」と呼ばれる。ハイイズにある惑星と同じハイイズにある他の惑星との相遇もまたその名で呼ばれる。なぜなら、ハイイズは2つの状態によって初めて完成するからである。したがって、ハイイズにある昼の惑星がハイイズにある別の昼の惑星に相遇すれば、それは「2つの性質の強要」と呼ばれる。

93) この場合、中間惑星が下位の惑星の光を遮断する。

515 (509). ムラーダファ (murādafa) とは何か

これは逆行における相遇、すなわち、逆行の状態にある下位の惑星が逆行の状態にある上位の惑星と相遇することである。両者の状態が同じなので、両者間に返却はない。もしそこに歓迎があれば、それは悪い事態の改善を示す。しかし、この相遇は順行の状態における相遇と同じではなく、それとは異なるものである。

516 (510). 相遇と宮位に代るものが何かあるか

下位と中間の2惑星が上位の惑星に相遇する時、上位の惑星は他の2惑星の光を集める。もし相遇する2惑星が互いに見つめ合っているならば、両者はその状態でも相遇していることになる。もし両者の一方が他方の視座から落ちていけば、<上位の惑星が>両者の光を集めることで、宮位のない相遇の代わりになる。これが「収集」(al-ğam‘)である。

もし下位の惑星が、上位の惑星との視座から落ちた中間惑星から離れ、その後、上位の惑星と相遇すると、中間惑星の光を上位の惑星に運ぶことになる。これが「移転」(an-naql)である。互いに見つめ合う2惑星の間でも、両者が相遇した後にこのことが起る。そしてこの移転は相遇の代わりになる。移転には別の方法がある。すなわち、下位の惑星が中間惑星と相遇し、この中間惑星が上位の惑星と相遇する場合であり⁹⁴⁾、それが下位の惑星が上位の惑星に相遇することの代わりになる。これは一方が他方と落位にある時に起ることである。なぜなら、宮位をなす時の下位の惑星は、すばやく上位の惑星と結びつくからである。ある書物では、火星が太陽と土星の間で移転すると、「最大移転」と呼ばれ、月がその両者の間で移転すると、「最小移転」と呼ばれる。

時として、2つの惑星は第3の惑星、あるいは天球上の一定の場所<の宮位>から落ち、その後その両者はそれらと宮位をなす惑星に相遇し、その第3の惑星、または一定の場所と宮位をなす。それは、惑星の光を鏡のように家から家へと反射する⁹⁵⁾。<人々は>これを「反射」(radd)と呼んだが、これには、前述の「返却」(radd) (512節)との間に名称の曖昧さが残る。彼らはそれ(反射)を別の種類だと考えている。すなわち、それこそが本来の「移転」であり、彼らが相離を言及せずにそれを説明することはない。彼らによれば、それ(移転)が2惑星の間で起る時、下位の惑星が上位の惑星から離れ、別の惑星に相遇すると、2つのうちの一方の光が他方に反射する。最初のもの(返却)が相遇の代わりとなるように、これ(反射)が相離の効力を免れることはないはずである。「サルフ」(aṣ-ṣarf, 転換)とか「アクス」(al-‘aks, 反対)のような言葉をここで「ラッド」の代わりに用いれば、曖昧さはなくなる。

517 (511). 開門 (faṭḥ al-bāb) とは何か

2つずつの惑星が互いに対立していて、その一方が他方に相遇することを「開門」と呼ぶ。月または太陽が土星に相遇することは、「静かな雨、こぬか雨、雪の開門」、金星が火星に相遇することは「にわか雨、あられ、稲妻、雷の開門」、そして水星が木星に相遇することは「風の開門」と呼ばれる。

518 (512). 惑星の強弱とはどのようなものか

すでに、太陽、惑星、天球、黄道環、家のそれぞれに対する惑星の諸状態について述べた。それ

94) この場合、中間惑星が下位の惑星の光を上位の惑星に運ぶ。

95) この場合、2つの惑星がそれらの光を第3の惑星または一定の場所へと反射する。

によってわかるのは、それらの状態における各惑星の良い点と悪い点である。ひとつの惑星における良い特性すべて、あるいはその大部分が、その惑星の持つ最大の強さを形成する。その特性が減少するに依りて、〈惑星の〉強さが減少し、強さの違いが生じる。一般にそれらの反対が惑星が持つ最大の弱さである。弱さの特性が減少するに依りて、〈惑星の〉弱さも減少する。

列挙すると、(1)⁹⁶⁾ 惑星が順行にあって、運行が速く、増大する時、(2) 光線に隠れることから逃れ、上位惑星であれば東に、下位惑星であれば西にあること、(3) 吉の状態にある光輝星と視座をなし、賞賛され好ましくあること、(4) 吉星が伴うか、吉星と宮位をなすこと、(5) 凶星が落位にあること、(6) 性質が似ている恒星が近くにあること、(7) 前述の惑星の通過が凶星の上か吉星の下になるように天球内で上がること、(8) 北の方向に昇ること、(9) 吉星の宿、役、そして性質において似ている場所にあること、(10) 宿のうちその惑星に最も適したところにあること、(11) 杭やそれに続くものにある状態で、惑星のハイズにあること、(12) 歓喜にあること、(13) 性質が惑星に似た、増大する四分円にあって、凶星を支配し征服すること。これらが最大の強さである。

(1) 惑星が遅くなるか、逆行にあるか、光線の下で西に消える時、(2) 下位惑星であれば西伏とともに遅くなって逆行に向うこと、(3) 光輝星に対して落位にあるか、宮位において敵対し好ましくないこと、(4、5) 凶星が惑星に対して敵意をもった宮位にあるか、凶星が伴うこと、(6) 惑星に反する〈性質の〉恒星が近くにあること、(7) 惑星が吉星の下を通過する時に、凶星が惑星の上に上がるように惑星が天球内で下がること、(8) 南に沈むこと、(9) 凶星の宿や役において、幸運から遠ざかっていること、(10) 害か失墜にあること、(11) ハイズの反対にあること、(13) 惑星に反する〈性質の〉減少する四分円にあって、杭やそれに続くものから落ちていて、(12) 歓喜の反対側にあること、(13) 凶星が惑星に影響すること。これらが最大の弱さである。

これは、簡潔に述べた強さと弱さの状態である。さらにそれらが混ざることさまざまな状態になる。そこに達するには、探究によって経験を完全なものにする必要がある。

519 (513). この点について光輝星 (太陽と月) は惑星と異なるか

これは必要なことである。光輝星が互に見つめ合い、吉星と共にあるか吉星と宮位をなし、光輝星がその役か吉星の役にある時、両者はともに強い状態にある。もし両者がそれらに好ましくない場所にあり、凶星がそれらに敵意を示し、それらを占有し、吉星がそれらに対して落位にあり、両者が食の状態にあるか、ジャウザハルの交点、特に降交点から12度以内に近づけば、両者は弱い状態にある。次に月に特有なことは、欠けること、望になること、光の減少、交替〈主星〉の時に地下にあること、そして燃焼の道にあることである。これらの悪い兆候は弱さを増大させる。ある人々は、月の悪い兆候として、月が宮の終わりにあること、2つの凶星の12分の1にあること、沈む時に南にあること、上昇点から9番目〈の家〉にあることを列挙している。このすべてがもっぱら月に特有なものではない。宮の終わりはすべて凶星の区界であり⁹⁷⁾、それらと12分の1は、月と惑星すべてに共通なことである。上昇点から9番目〈の家〉について言えば、それは月の歓喜の反対側であり⁹⁸⁾、月に固有のことである。

96) この番号は、惑星の強弱の条件を対照させるために訳者が付したものである。

97) 456節にあるように、各宮の最後の区界の支配星は、火星か土星である。

98) 472節によれば、月は3番目の家で歓喜する。

520 (514). 燃焼の道 (ṭarīqa muḥtariqa) とは何か

これはてんびん宮の終わりとさそり宮の始めである。この2つの宮はともに、両宮の暗さ (izlām) と逆境 (idbār) のために⁹⁹⁾、そして両宮が光輝星の失墜 (446 節参照) にあることのために、光輝星にとって好ましいものではない。2つの凶星の一方 (火星) は宿において、他方 (土星) は昂揚において、その2つの宮を支配している。前述の場所は、一方 (てんびん宮) では土星の昂揚と太陽の失墜の近くに、また他方 (さそり宮) では月の失墜のあたりにあるために、燃焼の道のように言われる。凶星、すなわち火星の2つの区界が会うのは、2つの宮の間である¹⁰⁰⁾。

第8章 占星術の種類

521 (515). 占星術 (aḥkām an-nuḡūm) は何種類に分けられるか

天球の内部にあるものは、単独にせよ、合成によって別のものが生じるにせよ、4元素である。そしてこの2種類とも、惑星と運動によって影響を受ける。

単独のものは全般的に変化を受けないが、互いに接する境界は、強制的に変質を招く対立のために変化を被る。これは地面上におけることである。

<他方で>それらの混合は、大地に注がれる光線の影響によって完成する。4つの性質はそれ (混合) によって完全なものとなる。地表は、惑星のさまざまな配置に応じて出来事が起る場所であり、希薄化したがつて地中や水中に向う光線が通過する所である。その後、光線は反射し、蒸発した水と煙状の土が、光線の反射が弱まる所まで昇る。この運動は世界における生成消滅の原因となるものである。このように生じたものは、ある程度持続するか、速やかに消えて無くなる。空気中で循環するものは、熱と冷と中庸の性質であり、湿と乾とともにそこで起ることは、空気の動きであり、それに伴って動く雲、雨、雪、あられ、湿ったさまざまなものである。また、そこで聞こえるものは、雷、轟き、叫びであり、そこで見えるものは、稲妻、雷電、虹、かさ、流星、隕石、彗星、そして「天候の出来事」と呼ばれるその他のことである。地中に起ることは地震と陥没、水中で起ることは、潮位の上昇、洪水、水害である。これは、以上の種類のものを含む占星術の>種類 (自然占星術) であり、それほど長くは持続しない。持続時間の最も長いものの例は、雨、雪、彗星、地震である。それらは、たとえ継続しなくても、時としてある場所に力を集め、その場所を壊滅させることもある。

次に、構成要素から成るもの、すなわち植物と動物が続く。ここで起ることはその両者に関することである。それには2つの方法があり、全体的なものは属 (al-ḡins) と種 (an-nawʿ) に共通し、部分的なものはさらに下の区分に生じる。その中には、長く持続するものや速く消滅するものがある。全体的なものについて言えば、例えば作物の被害による飢饉や作物の減少は、ひとつまたは複数の国に広がる。また例えばひどい疫病はひとつまたは複数の都市に及ぶ。部分的なものについて言えば、そこにおいて起ることは場所としては狭く、あまり個人的なことではない。これには、戦争、王朝間の争いや交替、反対派や君主の離反、宗派や宗教の出現による精神的な混乱が結びついている。これらのことは、継続時間も長く、影響力も大きい。これが第2の種類 (全般占星術) である。

それに続くのは、各個人、またはその時代・その場所・その人の一生の間に現われる諸状態な

99) この文脈での「暗さ」と「逆境」の意味は不明。

100) てんびん宮の最後の区界とさそり宮の最初の区界の支配星は、ともに火星である。

どに特有なこと、あるいはその人の死後の影響や子孫である。これが第3の種類（出生占星術）である。

その後続くものは、人々の行うことや人々に対して行なわれたことの諸状態である。これが第4の種類（選択占星術）である。これはすべて、たとえ知られていなくとも、ある原理に基づいている。

それに続くものは、それらの状態を知るための第5の種類（質問占星術）である。しかしその原理は知られていない。これによって占星術は、その限界を越えたものに近づき、できないことを負わされている。なぜなら、占星術では、全体的な重要なことから個別的な細かいことに＜至る＞順序だからである。そのために、占星術は、一方ではすでに述べた種類に対応し、他方では予言（*al-kihāna*）の仕方に似ている。もしその境を越えれば、たとえ星が言及されていたとしても、占星術ではない前兆（*az-zağr*）の領域に入るのである。

522 (516). 第1の種類の原因とは何か

これと第2の種類は、その原理において共通している。すなわちそれは、大合、中合、小合、そしてそれらの後の年の、合の場所・合の<の時の>上昇点・<ペルシア語の>ハザーラートで知られる千年期・百年期・十年期・ファルダールという周期（*an-nawba*）が到達する場所である。ある者は、それら（合）に先行する朔または望を採用し、後者を前者（合）の代わりにする。またある者は、それら（合）の前後近くで起る食を採用する。その目的のために使われるのは、もっぱら日食であり、特に食の程度が大きい場合である。

523 (517). 第1の種類の詳細と説明はどのようなものか

合の度、合の上昇点、そして合の年の上昇点¹⁰¹⁾は、1太陽年に1宮という動きで宮の順方向に交替地点を動かし、それが到達する場所は「到達点」（*muntahan*）と呼ばれる。したがって、それは翌年には最初の宮と同じ度の次の宮に到達する。例えば、ある年の初めの到達がかに宮10度であれば、翌年の初めにはしし宮10度に達する。千年期やそれに続くものもそれに似ていて、時間の長さによってのみ区別される。だからそれらは度と宮において異なるのである。また、それらはペルシア人によるものであり、そのためにそれらの名前はペルシア語で知られている。

すでに述べたように、アブー・マアシャルによれば、世界年が360,000年であり、その中間で大洪水（*aṭ-ṭūfān*）があった。彼にはそれに関する『千年期』（*al-ulūf*）と呼ばれる著書がある。そこにおいてはまず最初に、千年期と天球の度の間で、各度が1,000年に対応する。つまり1年では3と3/5秒となり、彼はこれを「大分割」（*al-qisma al-'uzmā*）と呼んだ。2番目に、千年期と宮の間で、各宮が1,000年に対応する。彼はこれを「千年期の到達」（*intihā' al-ulūf*）と呼んだ。3番目に、一年期と宮の間で、各宮が1年に対応する。すでに述べたように、年の到達はそこから導かれる。4番目に、一年期と度の間で、各度が1年に対応する。これが「小分割」（*al-qisma aṣ-ṣuğrā*）である。一年期と千年期の間にはまだ2つの段階がある。すなわち、一方には各宮が100年に対応し、他方には各宮が10年に対応する到達がある。彼は十年期と百年期の度数については、前述のようには何も述べていない。

ファルダールの期間と、出生占星術で用いられるその序列については、すでに述べた（398, 441

101) 「合の上昇点」とは、合が起った時点の上昇点であり、「合の年の上昇点」とは、合が起った年の春分の日の上昇点のこと。

-442節)。この節(全般占星術)においては、その序列は変わり、昂揚のある宮の順番になる。例えば、ファルダーリーヤ(al-fardārīya)¹⁰²⁾は、おひつじ宮における昂揚の支配星である太陽、おうし宮における昂揚の支配星である月、ふたご宮における昂揚の支配星である昇交点、かに宮における昂揚の支配星である木星、以下水星、土星、降交点、火星、金星と続き太陽に戻る。分担惑星の割り当てもこれと同じである¹⁰³⁾。

<出生占星術における>分担では、昂揚の支配星¹⁰⁴⁾に優先するものとして、ファルダーリーヤ¹⁰⁵⁾があり、順番によってその分割はバラバラである。さらに分担惑星は、昇交点と降交点を除いて、交替でそれ(ファルダール)を分担する。昇交点と降交点は分担することはない。以上が、世界年とその四半分の回帰、そして各朔望、特に<世界年>回帰とその四半分に先行する朔望について知る必要のある全般的な原理である。

524 (518). 合の説明で述べたダウル(adwār)とその四半分とは何か

ダウルについて言えば、各ダウルは360太陽年であり、四半分はその4分の1である¹⁰⁶⁾。ある者によれば、四半分は等しく、それぞれが90年である。なぜなら、ダウルを黄道帯の代わりに用いるからである。

またある者によれば、ダウルと黄道帯とは異なり、最初の四半分は90年、2番目は85年と3カ月、3番目は90年、4番目は94年と9カ月である。なぜなら、ダウルを年とみなし、その四半分を1年の季節の代わりに用いるからである。

525 (519). 第2の種類に特有な、第1の種類とは異なる原理とは何か

それは、類推によって第1の種類の原因につけ加えられた年の回帰である。さらに、年の四半分の回帰、朔、望、それらの間の矩、ファースイーサ(255節)、各土地の人々の経験に基づいて一年の日々について述べたアンワー(166節)、さらに、その年に起る食、燃焼、相遇、逆行がある。ある星学者は、太陽と月のそれぞれが宮を移動する時の上昇点を取り出し、両者を5惑星に結びつ

102) ここでの「ファルダーリーヤ」は442節の訳注で述べたものとは異なり、「全般占星術で用いられるファルダールの支配星」を意味している。

103) すなわち、太陽10年、月9年、昇交点3年、木星12年、水星13年、土星11年、降交点2年、火星7年、そして金星8年で、合計75年となる。

104) ここでは「ファルダールの支配星」のこと。

105) 出生占星術で用いられるファルダールの下位区分、442節訳注参照。アブー・マアシャル『誕生年回帰の書』IV.1-7.

106) アブー・マアシャルによれば、ダウルの周期と歴史上の出来事は次のように対応している。

	年代	支配する惑星と宮	主な出来事
1	-3380 ~ -3020	土星・かに宮	大洪水
2	-3020 ~ -2660	木星・しし宮	ジャームシード(古代の英雄)の誕生
3	-2660 ~ -2300	火星・おとめ宮	ダッハーク王、ニムルード王の誕生
4	-2300 ~ -1940	太陽・てんびん宮	
5	-1940 ~ -1580	金星・さそり宮	ヒムヤル族、サム(セム)以後のアラブ人の繁栄
6	-1580 ~ -1220	水星・いて宮	
7	-1220 ~ -860	月・やぎ宮	
8	-860 ~ -500	土星・みずがめ宮	ゾロアスター教徒とムーサーの出現
9	-500 ~ -140	木星・うお宮	アレクサンドロスの出現
10	-140 ~ 220	火星・おひつじ宮	アレクサンドロスの後継者の出現
11	220 ~ 580	太陽・おうし宮	ペルシア人の支配
12	580 ~ 940	金星・ふたご宮	ムハンマドの誕生、アッバース朝の支配

けている。これはでたらめであり、実際に制限がない。

526 (520). サールフザー (as-sālḥudāh) とは何か

これは、世界年回帰において、上昇点か杭のひとつにあってシャハーダを持つ惑星のことである¹⁰⁷⁾。もしそこになれば、杭に続くものになればよい。もしそこにもなれば、上昇点とその支配星に対して落位にないものである。

インド人によれば、それは、日々の支配星の順番で交替して支配する惑星であり、各惑星につき1年である。それについての彼らの用法を述べると長くなってしまふ。

527 (521). 第3の種類の原因とは何か

存在するすべてのものには、初めて存在する時がある。それは、その時の上昇点と、さまざまな状態にある惑星の配置から求められるが、植物や作物、そして人間以外の動物に関わることはない。それには2つの原理があり、ひとつは種を落とす時であり、受精 (masqat an-nuṭfa) として知られている。もうひとつは姿を現わす時、すなわち誕生である。惑星とそれらの配置から知られるのは、ハイラージュ (指示星、al-haylāg)、カズフザーフ (ハイラージュのある場所の支配星、al-kaḥḥudāh)、ムブタツズ (支配惑星、al-mubtazzāt)、贈与 (al-‘aṭāyā)、寿命の増大 (az-ziyādāt)、寿命の減少 (an-nuqṣānāt)、奪命点 (al-qawāṭi‘) である。また誕生年回帰からは、インティハー (到達、al-intihā‘āt)、タスイール (動点、at-tasyīrāt)、ダウルの支配星、ジャーンバフタール (与命星、al-ḡānbaḥṭār) すなわちカースィム (到達区界の支配星、al-qāsim)、ムダッビル (管理星、al-mudabbir)、週の支配宮、そしてファルダールが知られる。

528 (522). 第3の種類の詳細と説明とは何か

出生者は生まれた時は力が弱く、どんなに小さなことにも影響を受ける。したがって、彼<の命>について保証はない。これは満4歳になるまでであり、それは「養育年」(sanū at-tarbiya) と呼ばれる。星学者たちは、まずこの年に関して、出生者が養育期にその年を完了するか、あるいは養育が完了する前に死ぬかを見る。彼が生育したことが確かめられると、その時にハイラージュがあるかどうかを見る。

ハイラージュは5つの場所から知られる。最初は2光輝星のうちの交替主星、2番目はもう一方の光輝星、3番目は上昇点の度数、4番目は幸運箭、そして5番目は誕生に先行する朔か望の度数である。出生者のハイラージュの諸条件に問題がなければ、ハイラージュはそれらのうちのひとつである。さらにそれと宮位をなすものうちムザーアマが最も強いものが「カズフザーフ」¹⁰⁸⁾ である。カズフザーフが杭にあれば数は最大に、杭に続くものになれば中庸に、そして<杭を>過ぎたものになれば最小となる。これらの数というのは、惑星の年についてすでに述べたことを意味している。その数は、カズフザーフの強弱の状態に応じて、年、月、日、時間となり、時として凶兆や弱さによって減ることがある。以上がカズフザーフの「贈与」である。カズフザーフに対して愛情と歓迎を持って宮位をなす吉星は、その強弱に応じて、最小の数を増やす¹⁰⁹⁾。ま

107) サールフザーは「年の支配星」を意味するペルシア語のサールホダー (sālḥodāh) に由来する。アブー・マハシャル『誕生年回帰の書』II.1-22。

108) 「家長」を意味するペルシア語のカドホダー (kadḥodā) に由来する。

109) ここで、前節で言及された「寿命の増大」が説明されている。

たそれに対して嫌悪を持って宮位をなす凶星は、同じように、最小の数を減らす¹¹⁰⁾。もし奪命点が妨げることがなければ、その結果が出生者の寿命の最大限である。時として誕生時にハイラージュがないことがあるが、その時は、<人は>そこにより影響を及ぼす吉星の数に応じた期間を生きることになる。

「奪命点」¹¹¹⁾ について言えば、それらは、凶星の本体、凶星の好ましくない光線、そして奪命点(al-qat')として知られる恒星の本体¹¹²⁾である。タスイールがそれらに到達する時、贈与は奪命点の半分と1/4に基づき、巡り合わせは悪くなり、そこでは幸運でなくなるか、吉星が凶星に等しいものとなる。星学者たちは、贈与について1/4ではなく1/3を用いる。奪命点の数は多く、上昇点と月のそれぞれ度数もそれに含まれる。両者の一方が他方とともに奪命するのである。4番目、7番目、8番目<の家>の度数もそれに含まれる。それらについて私が別に述べた本がある¹¹³⁾。次に、誕生時に太陽が位置した分に太陽が到達する時から、毎年の上昇点を、そして誕生時と<毎年>の>回帰時に太陽が位置した宮の度と分に太陽が到達した時から、毎月の上昇点を導き出す。

「ダウルの支配星」¹¹⁴⁾ について言えば、これは、最初の年を上昇点の支配星にし、2年目をその惑星より下位にある惑星にすることであり、時間の支配星の決めかたと同じである。こうしてあなた(現在の)年のダウルの支配星に到達する。バビロニア人は、最初の年を誕生時間の支配星にし、2年目をそれより下位にある惑星だと考える。これがダウルの支配星である。

「年のインティハー」¹¹⁵⁾ について言えば、それは各宮につき1年とみなされるので、2年目の到達宮は上昇点から2番目の宮の同じ度数にあり、3年目は3番目の宮の同じ所にある。もしその年の到達宮と度数がわかれば、そこから「月のインティハー」が28日と1時間51分ごとに1宮として導き出される¹¹⁶⁾。インティハーの宮は、誕生時の度数と同じ度数のまま宮を移動する。「日のインティハー」は2日と3時間50分ごとに1宮として見つけられ、月のインティハーの度数がそのまま移動する¹¹⁷⁾。

「週の支配宮」について言えば、出生者の誕生から経過した日数から週(7日)<ずつ>を引き、引いた回数を覚えておき、<その回数を>誕生時の上昇点から数えると、到達した宮が週の支配宮となる。次に、7以下の余り分だけ上昇点の支配星から進み、誕生時の場所から宮の逆方向に進んだ所にある宮が、その宮の<支配する>週の「日の支配宮」である。また余り分だけ宮の順方向に惑星を進める者もいる。

529 (523). 以上のことと共に考慮される他のこととは何か

すでに述べたインティハーにおけるタスイール、千年期、ダウルの意味は、ここの簡単な説明に

110) ここで、同じく「寿命の減少」が説明されている。

111) これは、必ずしも惑星に限らず、場所を指すこともあるので「奪命点」と訳す。

112) アブー・マアシャルは『誕生年回帰の書』IX.8で、奪命星として14の恒星、星雲、星団を挙げている。『アルマゲスト』の星表番号で表記すると、おうし座の14、しし座の8、さそり座の8、ペガサス座の3、ペルセウス座の29、しし座の3と4、ペルセウス座の1、オリオン座の1、かに座の1、さそり座の22、いて座の5と8、そしてはくちょう座の17である。

113) ビルーニーのこの著作は同定できない。

114) アブー・マアシャル『誕生年回帰の書』VI.1.

115) インティハーとは、宮の順方向に規則的に移動するハイラージュの到達を意味する。

116) 月のインティハーは1太陽年で $390^\circ = 30 \times 13$ を移動する。したがって年のインティハーの13倍の速さで動くことになる。

117) 日のインティハーは1太陽年で $5070^\circ = 390 \times 13$ を移動する。したがって月のインティハーの13倍の速さで動くことになる。

よってわかる。出生占星術におけるタスイールは、補正（天の赤道）の度数ではなく、上昇時間（黄道）の度数によつて計算される¹¹⁸⁾。

上昇点の度数とそこにある惑星について言えば、タスイールは、その都市の上昇時間で、1度につき1年で進行する。下降点の度数とそこにある惑星について言えば、その都市の下降時間で、すなわち上昇点とそれに続く宮の<180度>反対側にある上昇時間で<進行する>。なぜなら、その都市の各宮の下降時間は、その反対側の上昇時間に等しいからである。天の中央と大地の杭の各度数とその両者にある惑星について言えば、すべての居住地において直立球の上昇時間で進行する。

もし進行する惑星がこれら4つの度数になくて、杭の間にあれば、そのタスイールは、長い作業と難しい計算によって、2つの杭の上昇時間を基に導かれる上昇時間で<進行する>。ハイラージュが進行するのは、それが寿命を示すものだからであり、<人々は>特別な場合にのみそれ以外のものを進行させる。カズフザーフは寿命の長さを示すものであり、上昇点の度数がハイラージュであるかないかに関わらず、それはあらゆる場合に進行する。

回帰の時、あるいは任意の時に、ハイラージュのタスイールが到達する場所を知りたければ、その場所の区界の支配星が「ジャンバフタール」¹¹⁹⁾と呼ばれる「カースィム」である¹²⁰⁾。なぜなら、寿命がハイラージュの場所から奪命点の場所までの場合、その両者の間は区界によって分割され、その区界の支配星が「キスマの支配星」になるからである。その区界にあり、そこに光線を投げかける各惑星は、キスマの管理 (tadbīr) という形でそれに関っている¹²¹⁾。

「ムブタツズ」について言えば、惑星のそれぞれの宿には、シャハーダが多いものがあり、「強奪」(al-ibtizāzīya) がそれに関係している。誕生ホロスコープ図 (al-mawlid) に対して絶対的な支配力を持つムブタツズとは、誕生時かその回帰時における上昇点、その支配星、そして5つのハイラージュにおいて、シャハーダが多い惑星のことである。

「ファルダール」について言えば、世界年と誕生年のそれぞれのところですでに述べた。

530 (524). 誕生時 (mawālid) をどのように求め、扱うか¹²²⁾

胎児が母親の腹から出る時、昼であれば太陽の高度を求め、それに基づいて上昇点の度数を導き出す。これがその出生者 (al-mawlūd) の上昇点である。もし夜であれば、アストロラープに記された有名な恒星のひとつの高度を取り、そこから上昇点を出す。作業が困難になるので惑星は用いられない。また月による作業でも正しい結果が得られないので、必要な場合を除いて月は用いられない。もし雲などによる障害物や暗闇によって高度が求められない場合には、昼夜の経過時間を知り、そこから前述のように上昇点を求めるしかない。

経過時間を知るには、2つの方法がある。あらかじめ誕生の兆候がある場合、それを観察し、その動きによって時間を計ることのできる水<時計>か器具のひとつに、時間の茶碗 (binkān) を設

118) 243節参照。タスイールとは、黄道上の特定の地点の動向。これらの地点の運行はハイラージュによって指示されると考える。それはまず赤道上の度数で測られ、次に黄道上の度数に変換される。アブー・マアシャル『誕生年回帰の書』III.1, 9.

119) もとは「命運」を意味するペルシア語。

120) ハイラージュのタスイールが或る惑星の区界に達すると、その到達地点が「キスマ」、そしてその惑星が「カースィム」と呼ばれる。アブー・マアシャル『誕生年回帰の書』III.1-9.

121) このような惑星が、527節に挙がっている「ムダツビル」である。

122) 近代にいたるまで、出生占星術を实践する上で最も重要なことは、誕生時における上昇点を求めることであった。ここで扱われるテーマは、まさにそれである。例えば誕生時の上昇点が「かに宮」にある人が、いわゆる「かに宮生れ」ということになる。現在行われている、誕生時の太陽の位置に基づく方法は、20世紀になって考案されたものである。

置する。それをするのは、日の出、日没、またはそれに類することから時がわかる場合である。こうして誕生の時に、器具によって経過時間を知るのである。別の方法は、兆候がない場合である。誕生時に器具を設置し、太陽か惑星の高度を求めることでその時が確かめられる時までそれを見守る。次に、器具によって知り得た時間分だけそこから戻る。そうすると、誕生の時間と瞬間に達する。もし器具がなければ、どんな素材のものでもその時に間に合う容器を使い、その一番下に好きな大きさの穴をあける。

出生者が生まれた後については、2つの方法がある。ひとつは容器に水を入れるもので、もうひとつは容器から水を取り出すものである。〈水を〉入れる場合は、澄んだ水の表面に容器を置く。これが1度目である。そして容器が満ちて水中に沈むたびに、水から空の容器を出して、すばやくそれを置く。太陽か星が見えるまで、容器が沈んだ回数を数えて、それを覚えておく。そしてその時までの経過時間を求める。さらに、容器が沈んだ回数と沈みの端数を〈再び水を入れることで〉確認する。もし端数があれば、水が到達した場所に印をつけ、昼夜のいずれでもその経過時間を知り、その間、容器を水の上に置く準備をする。そして、最初の沈みの回数と同じになって、水が端数の印まで達するまで、容器を観察する。それからその時の太陽高度を求める。その時（1度目）と2度目に容器を置いた時の間の経過時間を知る。その時間が分かれば、太陽か星が見えた時からそれと同じだけ戻る。すると誕生の瞬間に達する。

〈水を〉取り出す場合は、三脚のようなものの上に容器を置き、水差しを用いて、それに水を満たす。そして容器から水がしたたるかあふれるまで水を入れる。水が少なくなり、終わりにかける時、その水を容器に注ぐ。そのことを続け、太陽や星が見えるまでに注いだ回数を数える。もし容器の中に水が残っていれば、容器の水の位置に印をつけ、すでに述べた方法ですみやかに作業を行う。

531 (525). もし誕生時を計測できなければどうするか

実際には、そのような時〈を〉求めることは、到達する手段のない神秘的知識に属する。星学者は、見積りに基づく上昇宮について矛盾が生じることがめったにないということを理由に、それについて苦慮し、度数を必要とする時は、ある度数へと導く「ナムーダール」(an-namūdārāt)¹²³⁾として知られる方法を用いる。彼らは、それ（ナムーダール）が上昇点の度数であるにもかかわらずそれを採用したのだが、用いられたものの大部分は、プトレマイオスのナムーダールである¹²⁴⁾。彼らによれば、それは上昇点の度数と同じではなく、そこで求められた度数は、証明において上昇点の度数の次に重要な度数である。

このナムーダールの方法とは以下のものである。報告者が報告する時を正確にすることに努め、上昇点とそれに基づく杭、そして7惑星の位置を決定し、次に、誕生が月の前半であれば、誕生に先行する朔の度数を、また誕生が月の後半であれば、誕生に先行する望の度数を求め、そこにおけるムザーアマやシャハーダが最も多い惑星を探し、それに続くものを次々と求め、それらを書き留める。2惑星の役が等しい時には、宮位を、両惑星のうち優先すべき一方の惑星の最も優位にあるシャハーダとみなす。次に、ムザーアマを持つ惑星 (muzā'imūn) のうち優先する方の度数がどの杭に最も近いのか、またどの杭がその度数に最も適しているかを見る。そしてその度数をその杭の度数と等しいとみなし、そこから上昇点を導き出す。

123) パフラヴィー語の「指示するもの」に由来する。

124) このテーマは『テトラビプロス』III.3で扱われているが、「ナムーダール」に対応する表現は見られない。

もしその度数がすべての杭の度数からかなり離れていれば、その惑星をあきらめ、ムザーアマにおいてそれに次ぐ惑星を採用する。最も適したものが見つかるまで、前述のことを考慮する。ある星学者は、この問題については場所の近さを取り、ムザーアマを持つ惑星 (al-muzā'im) に最も近い杭の度数を、その惑星の度数と一致する場所だとはみなしていない。その結果はすでに述べたとおりである。

532 (526). 受精 (masqaṭ an-nuṭfa) はどのように知られるか

これは人の始まりであり、人の気質、体格、外的特徴、諸状態がそこから知られる源、すなわち胎児である。権威者たちはそれをを用いることを教えている。しかし、受精について父親と母親が知っていれば、それはどちらかの言葉から<わかる>。彼ら (権威者たち) は、妊娠の段階の始まりを土星に対応させた。その次は木星であり、以下、ひと月ごとまたは1週間ごとに、天球の下がる順番となる。

星学者たちが用いるものについて言えば、それは互いに関連する2つの原理に基づいていて、両者が正しい場合には、その手順は正しいものとなる。そのひとつは、誕生時の上昇点の度数が受精時の月の位置だということであり、もうひとつはその反対で、受精時の上昇点の度数が誕生時の月の位置だということである。

もし彼らが用いる方法を望むならば、まず母親から、胎児が妊娠してから7、8、9、10カ月のどれであるかを知る。もし概算で描いた<誕生>ホロスコープ図 (aṭ-tāli') の月が上昇点の度数にあれば、上昇点の度数を月の度数とみなす。月が完全な回転を経た後に出生者が生まれたとすると、<その期間が>7カ月であれば191日6時間で、8カ月であれば218日13時間で——ここでは8カ月の胎児が生存しないということを気にしなくてもよい——、9カ月であれば245日21時間で、そして10カ月であれば273日5時間となる。もし月が上昇点の度になければ、それは地上か地下にある。地上にある場合は、月から上昇点までの度数を採り、13度11分ごとに1日とみなす。さらに1度につき1と5/6時間、また度数の1分につき時間の1と5/6分を採る。日数と時間の合計を出し、それを彼らが伝える月数に対応する上述の日数から引く。もし月が地下にあれば、上昇点から月までの度数を採り、前述のようにする。日数と時間を合計し、それを彼らが伝えている月数に対応する上述の日数に加える。加減の後の結果が、出生者が<子宮にいた>期間 (makt) である。受精時に達するまで、誕生時からさかのぼり、月の位置を確かめる。そして、誕生時の上昇点の度数がこの月の度数と同じだと考える。われわれが述べた彼らの原理に基づく限り、それは彼らにとって正しいのである。

533 (527). 第4の種類とその原理とは何か

これは、出生占星術の場合のように起ってから知られようと、その時が選ばれてから考慮されようと関係なく、開始<時> (al-ibtidā'at) のホロスコープ図<が対象>である。その目的は、北側の座席、暗い影、湿った亜麻布、埋められた氷を選ぶことで、夏の太陽の影響を軽減するように、幸運を増大させ、不運を減少させることである。この件について、われわれが敬意を表する選択<占星術>を無批判な学者 (al-ḥaṣwīya) が台無しにしようとするような無意味なたわごとは無視しよう。

ここで問題となるテーマは、杭を確立すること、杭を凶星やその光から解放すること、吉星、特にその時の上昇点、上昇点の支配星、月、月のある家の支配星、そして始める物事の指示星で杭を

照らすこと、月、上昇点の支配星、〈始める〉物事の指示星の互いのつながりに注目すること、そしてそれらを上昇点に対して宮位をなす位置に置くことである。ただし、悪い事や破滅のための選択は別である。これは、今それについて追求することができないほど広大な分野である。

534 (528). 第5の種類とその原理とは何か

さまざまな不測の事態によって質問者の誕生時がわからない多くの場合、星学者たちは、質問者が質問を発することを、誕生とは違う始まりのように考える。彼らはその時のホロスコープ図を描き、上昇点、その支配星、月、そして月に対して相離する惑星を調べる。これらが質問者を示す惑星である。

質問内容を示すものについて言えば、それはほとんどの場合、7番目〈の家〉とその支配星であるが、とりわけ質問に関係する家とその支配星、そして月が相遇する惑星である。〈それは〉12の家以外にはあり得ず、どの家にあるかを知るには、わずかな考察と類推によって可能となる。これが質問〈占星術〉と呼ばれる種類である。

535 (529). 役に立たない質問 (mas'ala bikāriya)¹²⁵⁾ とは何か

これはその名で呼ばれるが、「一般的な質問」(mas'ala kullīya)とも呼ばれる。最初に、質問時の上昇点を求めるという点で他の質問と同じようにすることが、大多数の星学者の決まりごとになっている。次に、彼らは誕生ホロスコープ図において見られるもの、すなわち、余命とそれに関する諸状態を見る。また、誕生ホロスコープ図を加味して、そこから質問占星術用にそれまで重ねてきた年齢を取り出そうとする星学者もいる。

無批判な星学者 (ḥaṣwīyat al-munaḡḡimīn) について言えば、彼らは質問者を遠ざけ、3〈晩〉の間、彼の心の奥のこと (damīr) を保持し、3日間そのイメージを失わないよう命じる。その後ようやく彼は質問をする。したがって、愚かさを強調することに加えて私ができるのは、彼らの判断の弱点が明らかになり、質問者に命じられたものが何であれ、彼を破滅させるような過失を彼に転嫁することになるということに覚悟することだけである。

536 (530). 隠されたこと (ḥabī') と心の奥のこととは何か

これは、掌の中に、隠しているか、隠されている質問である。それについて性急な星学者たちの何と不名誉なことか。しかしまた、占い師たち (az-zāḡirūn)¹²⁶⁾ が聞く質問時の言葉や明らかに目に見える家具や行為について、彼らが何と頻繁に的中することか。占星術からこの領域に達すれば、〈初心者にとって〉十分であり、それを越える場合は、彼自身とその技芸を今や軽蔑と嘲笑にさらすことになる。その門外漢は言うまでもなく、それに関わる者たちもそれには無知なのである。

125) bikāriya は、ペルシア語の bikāre (役に立たない) に由来する。

126) 本来は、鳥の飛び方から前兆を導く占い師のことで、ここでは、学問に基づく星学者 (占星術師) とは異なる占い師を指している。